す。問うて曰く、「喫粥了れりや、㋐鉢盂を洗ひ了れりや、藥忌を去却して一句を道將し來れ。」光曰く、「裂破。」慧、威を震つて喝して曰く、「爾又來つて禪を說くか。」と、光、大悟す。慧、皷を搥つて衆に告げて曰く、「兎毛拈得して笑ひ哈哈、一擊すれば萬重の關鏁開く、平生を慶快すること今日に在り、孰か云ふ千里吾れを賺し來ると。」光、頌を以て呈して曰く、「一拶當機怒雷吼ゆ、㋑須彌を驚起して北斗に藏せしむれば、洪波浩渺浪滔天、鼻孔を拈得すれば口を失却す。」（語錄等）

（Sumeru）といひ、全宇宙の最中央にある高山にして、水面を超出する八萬四千由旬、水底も亦八萬四千由旬、頂上は縱橫八萬由旬ありて、帝釋天こゝに居し、宇宙一切の生物、一切の世界は是の四周にあり。譯して妙高山といふ。長阿含經、起世因本經、俱舍論（世間品）等に詳し。

國譯人天寶鑑上終

國譯人天寶鑑下

沙門波若は高麗の人なり、㋐開皇の間、佛隴に詣つて智者の禪法を求む。未だ幾ならずして卽ち所證あり。智者謂つて曰く、「汝此に於て緣あり、宜しく靜處に閑居して妙行を成辨すべし。今、天台の華頂、寺を去ること六七里、是れ吾が昔日の頭陀の所なり、汝、彼れに往いて學道を進行せば、必ず深益する所あらん、衣食を慮ること勿れ」と。波若、訓に遵つて彼れに往いて曉夜行道して曾て睡臥せず、影、山を出でざること十有六年、一日忽ちに山を下つて諸友に告げて曰く、「波若、命將に盡きんとするを知る、特に山を出でて大衆と與に別るるのみ。」と、卽ち華頂に回つて卒す。（天台石刻）

正言陳了翁は南劍州の人なり、妙年にして上第に登る。性閑雅にして物と競ふこと無く、人の短を見ては未だ嘗て面折せず、但だ微しく意を示して之れを警むるのみ。公初め㋑雜華を尙んで頗る所詣あり。明智法師に會ふて天台の宗旨を扣くに及び、明智示すに止觀の㋒上根不思議境、性を以て修を奪ふて無作の行を成ずることを以てす、忽ちに契悟あり。晚年に謫せられて海上に居す。未だ嘗て不滿の意あらず、唯だ西歸を剋念す。嘗て

㋐開皇は隋の文帝の年號。
㋑雜華とは華嚴のこと。
㋒上根は利根とも云ひ、上智の人をいふ。不思議境とは一念心を指す。卽ち吾人の一念心に法爾として本來十界三千の法を具して、卽空卽假卽中なり。止觀に云く、若し心無くん

延慶淨土院の記を作る。其の略に曰く、「如來の九品を叙する至誠を以て上上と爲す。智者の十論を造るや、疑心の具縛を破る、縛解け情忘じて識散じ智見るときは、則ち彌陀の淨境他に求むることを假らず、明鏡に臨んで自ら面像を見るが若し。」又曰く、「譬へば清淨の滿月の影、諸水に見じて月體無二なるが如し。流散を攝して所歸を等しうし、十方を會して一に總ぶ。亦十鏡の環繞して中に一燈を燃して燈體の交參するが如し、東西辨ずること莫けれども、而も方に定位あり、西自から西ならず、各相に隨つて融す。境將に誰れか執らん、安んぞ在塵執方の見を以て如來無碍の境を測度せんや」と。因法師曰く、「了翁の淨土を言ふこと、深く佛祖の壺奧を蹟ると謂ふべし」と。（草庵錄）

石壁寺の杭越を去ること二十里、龍山に走いて而して西し、㊁窅然として幽谷に入る。溪流巖石の美あり、其の氣象清淑なりと雖も、世未だ始より之れを知らず。紹大德、㋕靖法師、之れに居してより、其の名方に播る、亦地も人を以て著はる。靖、紹は皆錢塘の人にして、同じく壽禪師に依つて出家し、律部に通練す。時に㋖韶國師、其の道大いに振ふ。靖、紹、往いて之れに從ふ。國師見て且つ之れを器なりとし、卽ち往いて三觀の法を螺溪の㋗寂法師に學ばしむ。是に於て偕に往いて寂に事へて大義を講求す。居ること未だ幾ならずして所學已に就る。靖、紹復た石壁に回り、以て講衆を會す。前後五十年、其の山林の操を守つて未だ始より苟も鄉野閭里に游ばず、身を處すること修潔なり。吳中の宿學名僧皆其の高人を推す。明敎曰く、「壽公に出家し、法を寂公に學び、韶公に知らる。三は皆奇節異行不測の人なり、天下豈に多く得べけんや。二師皆遇ふて之れに親炙す、假令一見を得るも已に自ら甚だ善し、況んや人に因つて法を得るをや、二師の美多なるかな。」と。（塔銘）

海月の辯都師は雲間の人なり、生れて異あり、父母、普照に入りて出家せしむ。法を明智に得。智、老ゆ、命をうけて講に代ること八年、遂に寺事を領ず。翰林沈時卿、威猛を以て杭の僧徒を治す、見る者多く懼る。師獨り從容として平日の如し。公之れを異として僧職に澂ましむ。遷つて都僧正に至る。時に東坡㋙倅と作る。其の道行高峻にして、言を發すること璀璨なることを喜して、嘗て序して曰く、「錢唐は佛僧の盛なること蓋し天下に甲たり。道德才智の士と夫の妄庸巧僞の人と其の間に雜處す。號して齊しうし難しと爲す。故に僧職正副の外、別に都僧正一員を

㋖韶は德韶國師のことなり。
㋗寂は五代、梁の末帝、眞明五年に永嘉に生れ、宋の太宗雍熙四年に寂す。師は吳越の忠懿王の外護を得て、台敎を復興せし大德なり。
㋙倅は猶ほ帥の如し、大將軍となるなりと。今云く、或は然らず、玉露云く、倅は副なり、周禮の夏官に、國子に逆倅を存して之をして德を脩め道を樂しましむと、注云く、逆倅は子の未だ仕へざる者と。

補す。籍帳、案牒、❶奔走、將迎の勞は專ら副正已下を責め、而して都師は總に要略を領ず。實に行解を以て衆に表たるのみ。」と、師、容止端靖にして長物を畜はへず。盗あり、夜其の室に入る、衣を脱いで之れに與へて支徑より遁れ去らしむ。居ること何も無くして酬酢に勤んで草堂に歸隱す。但だ❷六事身に隨ふのみ。將に順寂せんとし、先づ遺言すらく、「須らく東坡至つて方に棺を闔づべし」と。四日にして東坡始めて山中に氏り、其の端坐して生けるが如きを見る、頂尚ほ溫なり。遂に三絶を作りて之れを哭して云く、「遺跡を尋ねんと欲して强ひて裳を沾す。本と自ら無生亡ずることを得べけんや。今夜生公講堂の月、滿庭舊に依つて冷にして霜の如し。」「生死は猶ほ臂の屈伸するが如し。情鍾つて我が輩一たび酸辛、樂天は是れ蓬萊の客に不ず、憑仗す西方に主人と作れ。」「浮雲起滅の因を訪はんと欲すれば、却つて夢中の身を見るに緣なし。安心好住す王文度、此の理何ぞ須ひん更に人に問ふことを。」（塔銘）

高麗の僧統義天は王位を捨てて出家して法を中國に問ふ。首め四明郡に至る。將、延慶の明智、三學の法隣の二師に命じて❽館伴たらしむ。杭州に至つて照律師に謁す、律學に從はんことを願ふ。照、爲に戒法を說いて儀範を習はしむ。授くるに三衣、盂鉢、錫杖を以て

❶奔は奔の誤か。

❷六事は六物なり、卽ち持律の僧の居常必ず携ふべき六箇の物なり。一に五條衣、二に七條衣、三に大衣（九條乃至二十五條衣）、以上が三衣といふ、四に鉢、之は施與されたる食物等を受くる具なり。五に尼師壇、之は樹下石上等に禪坐する時に坐下に敷く具なり、六に濾水囊、之は行脚等の時に溪流等の飲料水を濾過する器なり。

❽館伴、館は外國の賓客を宿泊せしむる所、其の接伴官たるをいふ。

す。仍つて偈あり、曰く、「汝が爲に裁成す應法衣、更に盂錫を將て威儀を助く、君看よ宿覺歌中に道ふことを、是れ形を標して虛しく事持するにあらず。」と朝廷復た楊次公に詔して館伴たらしむ、經る所の諸刹迎餞することを王臣の禮の如し。金山に至る、獨り佛印、牀に坐して其の❼大展を納る。次公、驚いて其の故を問ふ、印曰く、「義天も亦一異國の僧のみ。衆姓出家すれば同じく釋子と名く、安んぞ❼貴種を問はん。若し道を屈して俗に隨はば先づ一隻眼を失す、何を以てか華夏の師法を示さんや。」と、朝廷是を以て大體を知れりと爲す。（僧傳等）

天竺悟法師は錢唐の人なり。每に❻呪を誦する時、身より舍利を出す、供する所の像も亦之くの如し。天聖三年、慈雲、智者の敎觀を以て❸大藏に入ることを求めんと欲す。文穆王公、天聽に達せんと擬す。悟、曰く、「此れ非常の事なり、小子將に之れを助けんとす。」と、乃ち千手の像を繪いて大悲の密語を誦して誓ふて曰く、「事果さば遂に當に此の軀を焚くべし」と。未だ幾ならずして公薨ず。悟、益精勵を加へて晝夜廢せず、歲を越えて乃ち克く志の如くす。悟、遂に前誓に答ふ。薪盡きて屍在り、袈裟體を覆

❼大展は大に座具を展べて禮拜するなり。一說に大に手を展開して禮拜するなりと。暢禮に對する大展なれば兩手大展開は大儀式の時なり。睦州錄に云く、師曰く、大に座具を展べて禮三拜著せよ云云と。大隋眞錄に云く、投子尙侍者を呼びて裝香せしめ、大いに座具を展べて、西川の大隋山を望んで遙かに禮三拜すと。

❼貴種は尊貴の種族の略稱、義天はもと國王なりし故にいふ。

❻呪は陀羅尼なり、陀羅尼は總持と譯す、一字句の中に無量の敎文を總攝し、一義中に無量の義を持する故なり。又遮持と譯す、煩惱等の惡を遮離し、萬德を攝持する故なり。此の陀羅尼は佛の說き玉へる萬德を包藏したる不可思議の密語なれば、支那の禁呪の法

ふて儼然として生けるが如く、衆威之れを異とす。慈雲再び香木を積んで焚いて乃ち方に壞す、舍利無數あり。三歲の後、信者尙ほ獲たり。慈雲、讚を作り石に刻して曰く、「悟や吾が徒なり、法を荷つて軀を捨つ、其の餘赫赫たり、其の樂愉愉たり、火の將に滅せんとするに逮んで、儼として跏趺するが如し、骨後に碎くるに逮んで、璨として圓きこと珠の若し。信に古にには有るべくも、今は則ち無し。芳年三十、眞なる哉丈夫たること。」と。（金圓）

晦堂の心禪師、初め南禪師の遺命を承けて住山の緣を領ずること十有三❷白、法席の正に盛なる時に於て、毅然として事を謝して西國に居す。晦を以て其の堂に命く。且つ曰く、「吾が辭する所の者は世務のみ、今專ら佛法を行せんと欲す。」と、是に於て其の門に牓して曰く、「諸の禪學に告ぐ、此の道を窮めんと要せば、切に須らく自ら看るべし。人の替代する無し、時中或は是れ因緣を看得して自ら歡喜の入處あらば、却つて來つて入室して吐露せよ。爲に是非深淺を品評せんことを待つ、如し未だ發明せずんば但だ且く❺歇し去れ。道は自ら見前す、苦苦として馳求すれば轉た迷悶を增す。

に擬して呪と名づく、之れ誦すべくして解すべからず、之を誦すれば福德を成ずるを得るなり。

❸大藏云云は大藏經（又は一切經）の中に編入せんと欲するなり。大藏經とは釋尊所說の一切の經、律、並に印度佛學者の著書を網羅せる一大佛教叢書をいふ。後漢以來、印度の經、論が漸次に翻譯せられしが、唐の太宗開元十年に、沙門智昇が開元釋教目錄、二十卷を著はして經、論、疏五千四十八卷の數を擧ぐ、これ大藏經定數の初なり。其の後課經、遺疏著しく增加す。宋の太祖開寶五年に之が開版を企て、十四年にして十三萬版を成ぜり、これ藏經印行の初なり。其の後幾度か開版せられしは人の知る所なり。日本の鐵眼版は六千九百五十六卷あり。弘教書院出版の縮刷藏經は四百十九册、八千五百三十四卷を收めたり。

❹白は霜、若しくは雪を指すか、果して然らば霜雪は冬のものなれば、十三冬の意にて、十三年を表はす歟。

❺歇し去るは諸緣を放捨し、萬事を休息して智解分別を去るをいふ。

此れ是の離言の道は、要は自肯に在り、他に由つて悟らず。此くの如く發明するを方に無量劫來生死の根本に了達すと名く。若し離言の道を見得すれば、卽ち一切の聲色言語是非を見るに、更に別法なし。若し離言の道を見ざれば便ち將に目前差別の因緣を類會して以て所得と爲さんとす。只だ恐らくは誤つて門庭目前の光影を認めて自ら覺知せず、方に剩法と成つて到頭只だ是れ自謾し、枉げて心力を費さんことを。宜しく晝夜剋己精誠に行住觀察して微細に審思せよ、別に用心することと無くんば、自然に箇の入路あらん。是れ朝夕に學び成すの事業に非ず。若し也た是くの如く參詳すること能はずんば、如かじ看經禮拜して此の殘生を度らんには。亦自ら亂生誘法の如きに勝れり。若し老を送るの時、敢保す箇の無事の人と成らんことを、更に他の累無し。其の餘の入室は、今より去つて朔望の兩度、却つて請ふ訪及せよ。」（汀江）

孝宗皇帝、徑山の主僧寶印に選德殿に詔す。上の曰く、「三敎の聖人、本と者箇の道理を同じうす。」印、奏して曰く、「譬へば虛空の東西南北、初めより無二なるが如し。」上曰く、「但だ聖人所立の門戶、各別のみ、孔子は中庸を以て敎を設く。」印曰く、「中庸の敎に非ずんば何を以てか世間を安立せん、故に華嚴に云く、『世間の相を壞せずして而も出世間の法を成ず』と、法華に云く、『治世の語言、資生の產業、皆實

相と相違背せず』と。」上曰く、「今の士夫、孔氏を學ぶ者は、多く文字を攻めて夫子の道を見ず、夫子の心を識らず。唯だ釋迦老子、文字を以て人に教へず、但た直ちに心源を指して衆生に開示して各悟入せしむ、此れを殊勝と爲す。」印曰く、「獨り今の學者のみ夫子の道を見ざるのみに非ず、當時の十哲、顏子が如き號して體を具へたりと爲すも、其の平生の力量を盡して只だ箇の『之れを瞻るに前に在るかとすれば忽然として後に在り、立つる所ありて卓爾たるが如し』と道ひ得たるも、竟に捉摸すること未だ著かならず、而して夫子分明に八字に打開して諸弟子に與して曰く、『二三子、我れを以て隱せりと爲すか、吾れ爾に隱すこと無し、吾れ行ふとして二三子と與にせずといふこと無き者は、是れ丘なり』と。此れを以て觀るに夫子は未だ嘗て諸弟子を回避せずして、而も諸弟子の目、蹉過するなり。昔し張商英丞相云く、『唯だ吾れ佛を學んで然して後に能く儒を知る』と。」上曰く、「朕が意も亦此くの如し」と謂へり。上又問うて曰く、「莊老は何如なる人ぞ。」印曰く、「只だ佛門中の小乘の㋐聲聞の人と作り得たり。蓋し小乘は、身を厭ふこと桎梏の如く、智を棄つること雜毒の如くす。火を化して身を焚き、㋑無爲界に入る、正に莊子が所謂る『形は固に槁木とならしむべし、心は固に死灰の如くにすべし』といふが如し。」と、是に於て旨に稱ふ。（奉對錄）

㋐聲聞とは、佛の苦集滅道の四諦の法門等を說き玉ふを聞いて、初めて悟解する小乘の機類をいふ。

㋑無爲界は、因緣爲作の有爲の世間を離れたる空寂の涅槃をいふ。

㋒可久は姓は錢氏、敎觀ゝ台宗の淨覺に學ぶ、四明の開元寺に居り、喜んで古律詩を爲る、蘇軾と詩友たり。佛祖統紀二十二などに見ゆ。

㋒可久高僧は錢唐の人なり。徧く講肆に游んで、深く天台の旨趣を得たり。後に祥符に居して喜んで古律を爲る。平淡清苦に造る。東坡、詩老を以て之れを呼ぶ。坡、因に元宵、僚屬と同じく燈を觀る。坡、獨り往いて之れに謁す。其の寂然として宴坐するを見て、絕句を作つて云く、「門前の歌鼓鬧紛紛として崩る、一室蕭然として冷かにして冰らんと欲す。瑠璃を把つて閑かに物を照さず、始めて知る無盡本と燈に非ざることを。」久、己を律すること甚だ嚴なり、長坐一食、四威儀の中、法服未だ嘗て體を去らず、儉約自ら持す。一布衲、身を終るまで易へず、或は粮を絕し穀を辟けて宴坐するのみ。晚に西湖の濱に居す。翛然たる一榻あり、餘物を留めず、牕外唯だ紅蕉數本、翠竹百竿のみ、自ら蕭蕭堂と號す。將に卒らんとして、人に語つて曰く、「吾れ死せば蕉竹も亦死れん」と。後其の言の如し。（悟雲集）

楊次公云く、「大願の聖人、淨土より來る、來るも實に來なし。深心の凡夫は、淨土に從ひ去る、去るも實に去るなし。彼れ此に來らず、此れ彼に往かず、而も其の聖凡の會遇兩つながら交際することを得。彌陀の光明は、大圓月の如く、徧く法界を照し、念佛の衆生をば攝取して捨てたまはず。諸佛心內の衆生は、塵塵極樂にして、衆生心中の淨土は、念念彌陀なり。若し能く發心して彼の㋓佛號を念ずれば、卽ち往生を得。河沙の諸佛、同舌の讚あり、十方の菩薩、同往の

㋓佛號云云は念佛すれば極樂に往生することを得て、恒河の沙の數の如き無量の佛も同音にて之を讚歎し玉ひ、又十方の菩薩がたも同じく往生を願ふの心を有せり。依つて衆生念佛すれば必ず往生を得、深く之れを信ぜよとなり。

心あり。佛言く、『信せずんば何れの言か信ずべき、淨土に生ぜずんば、何れの土にか生ずべき、自ら己靈を棄つ、是れ誰が咎ぞや』と。」公、臨終の時、金臺の空より至るを見る。卽ち偈を說いて逝く。偈に曰く、「生も亦戀ふべき無く、死も亦捨つべき無し。太虛空の中、之乎者也、錯を將て錯に就く、西方極樂。」と。（輔道集等）

玄沙備禪師は福州の人なり。姓は謝、少うして南臺江上に漁す。忽ちに舟を棄てて釋に從ふ。芒鞋、布衲、食才かに氣を接く。宴坐日を終ふ。雪峯呼んで、備頭陀は再來の人なりと爲す。何ぞ徧參し去らざるといふ。備曰く、「達磨、東土に來らず、二祖、西天に往かず。」と、峯之れを然りとす。備、屋を玄沙に縛す、衆、相尋で至る。遂に叢林と成る。說法は㋐契經と合す、諸方、要義の未だ明かならざる有れば、皆從つて之れを決す。示衆に曰く、「佛道は閑曠にして途程あることなし、三際に在らず、豈に昇沈あらんや。建立乖張、造作に屬せず、動は卽ち㋑塵勞の境に涉り、靜は卽ち昏醉の鄉に沈む。動靜雙泯は卽ち空亡に落ち、動靜雙收は卽ち佛性を漫汙す。何ぞ必ずしも其の塵境に對して枯木寒灰の如くならん。但だ機に臨んで應用其の宜しきを失せず、鏡の像を照して光輝を亂さざるが如く、鳥の空に飛んで空色を離へざるが如し。所以に道ふ、十方、影像なく、三界、行蹤を絕す、往來の機に墮せず、中間の相に住せず、譬へば壯士の臂を展ぶるに他力に由らざるが如し。師子の遊行豈に伴侶を求めんや、九霄、翳を絕す、何ぞ穿通を用ひん。一段の光明未だ曾て昏昧ならず、者裏に到つて體寂寂、常に皎皎、赤赫爛として邊表なし。圓覺光中動搖せず、乾坤を呑爍して廻然として照す。」（傳燈）

㋐契經は修多羅の異名なり、是れ佛所說の敎法を編纂したる聖典なり。佛の說き玉ひし敎は、能く眞理に契ひ、又衆生の根機智識に契合せるが故に契と云ふ。經は一義に云く、常の義にて、佛の敎法は法界の眞理なれば、萬代不易の聖法の故に經といふ。

㋑塵勞は煩惱の異名、塵は染汚の義にて、煩惱は眞智を蔽ひ、吾人を勞役するものなれば名づく。

文潞公、洛陽に居り、嘗て齋を致して龍安寺に往いて聖像を瞻禮す。一日、像忽ちに朽ち墮つ。公之れを見て㋒略、敬を加へず但瞪視して出づ。傍に僧あり、曰く、「何ぞ作禮せざる。」公曰く、「像既に壞す、吾れ將た何をか禮せん。」僧曰く、「先聖道く、譬へば官路の土の如し、私かに人掘つて像を爲る。智者は路の土なることを知る、凡愚は謂く、像生ずと。後時に官行かんと欲す、還つて像を將て路に塡つ。像本生滅せず、路も亦新故なし。」と、公、之を聞いて省あり。是れに由つて道を慕ふこと甚だ力めたり。年九十餘までに晨香夜坐、未だ嘗て少しも廢せず。毎日願つて曰く、「願くは我れ常に精進して一切の善を勤修せん、願くは我れ心宗を了じて廣く諸の㋓含識を度せん。」と。（梅溪雜錄）

普首座自ら性空と號す、旨を㋔死心に得たり。久しく華亭に居す、好んで鐵笛を吹く。放曠として

㋒略は一向と云ふが如し。

㋓含識は或は含靈ともいふ、有情と云ふに同じ、靈妙不可思議の心識を含有する故に名づく。

㋔死心、諱は悟新、韶州曲江の人、魁偉黑面にして梵僧の狀の如し、氣節を以て人を蓋ふ、面、人を折するに好し、嘗て翠岩に住するの日、躬自ら淫祠を毀す、巨蟒あり、首を擡げて呑噬の狀をなす、師之を叱して去らしむ、後、黃龍山に住す、政和中に寂す。

自ら樂む、人之を測ることなし。喜んで偈句を爲つて世を開導す。偈に曰く、「學道は尤も禁城を守るが如し、晝は㋐六賊を防ぎ、夜は醒醒、將軍主將能く令を行ずれば、干戈を動せずして太平を致す。」又曰く、「耕さずして食ひ、蠶せずして衣る、物外の清閑聖時に過ぎたり。未だ祖師の關戾子を透らずんば、也た須らく意を存して便宜を著くべし。」一日衆に告げて曰く、「坐脫立亡は水葬に如かず、一には柴燒を省き、二には開壙を免る」と。手を撒して便ち行く。妨げず快暢なることを。誰か是れ知音、虹子和尚、高風繼ぎ難し、百千年、一曲の漁歌、人の唱ふる少なり。遂に青龍江上に向つて、木盆に乘り布帆を張りて、遠きに泛んで而して沒す。（普燈）

愚法師は嘉禾の人なり、儒を棄て釋に從つて精苦自ら勵すこと凡そ三十年、功を加へて進行し、未だ嘗て一日も輒く廢せず。嘗て道潛、則章の二師と友たり、潛は詩を能くして名に近づく。而して章と師とは光を韜み彩を鏟り、人の知ることを求めず、唯だ己行を務む。而して章、先づ卒す、愚が將に順世せんとするに及んで、衆に告げて曰く、「吾れ夢らく、神人告げて云く、『汝同學の僧、則章は普賢の願行三昧を得て已に淨土に生る、彼れ汝を待つこと久し、曷ぞ遲留すべけんや』と。是に於て淨土の聖相及び諸〻の花樂悉く見在前す。」と、愚、即ち偈を說いて逝す。偈に曰く、「空裏千花の羅網、夢中七寶の蓮池、踏得して西歸路穩かなり、更に一點の狐疑なし。」（行業記）

㋐六賊は色、聲、香、味、觸、法の六塵のことなり、此の六は能く智慧の命を奪ひ、功德の財を掠むるが故に賊といふ。

東坡曰く、「已に飢ゑて方に食し、未だ飽かずして先づ止り、散步逍遙して務めて腹をして空ならしめ、腹の空なる時に當つて卽ち靜堂に入つて端坐默念して、出入の息を數へよ、一より數へて十に至り、十より數へて百に至り、數へて數百に至りて、此の身兀然として此の心寂然、虛空と等しく禁制を煩はさず。是くの如くすること之れを久しうして一息自ら住る。出でず入らざる時に此の息、毛竅の中八萬四千より雲蒸し霧起ることを覺らば、無始已來の諸〻病自ら除き、諸障消滅して自然に明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼あるが如し、爾の時、人を尋ねて路を指さしむることを用ひず。」（大全）

靈芝の㋑照律師は錢唐の人なり、幼にし夙成あり。年十八にして經に通ずるを以て得度す。㋒沙彌の中に在つて已に衆の爲に講解す。毗尼を習ふ毎に悵然として師承する所なきを興恨す。時に㋓處謙法師、深く天台の道を得。師之れに見えて曰く、「眞に吾が師なり。」と。請ふて坐下に居す。風雨寒暑にも日に數里。謙、講ずる、毎に必ず師の至るを待つ。或は少しく後るるときは、衆、時を過ぐるを以て請を爲せば、謙、必らず曰く、「聽講の人未だ至らず」と。其の之れを愛すること此くの若し。師、所習を棄て之れに從はんと欲す。謙、曰く、「近世律敎、中微なり、汝他日必ず宗匠と

㋑照は元照にて、四分律宗の第二十三祖なり。

㋒沙彌は梵語、室羅末尼羅の譯なり、息慈と譯す、始めて落髮して佛法に入る者の稱なり。世俗の染情を息めて衆生を濟度せんが爲に、慈悲心を起すを以て息慈といふ。

㋓處謙は永嘉の人、逕能に依つて出家し、天竺慈雲に學び、後、神照に謁して大いに圓頓の旨を明かにす、處々に遷りて講道益振ふ、十坐道場、四十年間、登門の弟子三千人、裏

ならん、當に法華を明めて以て㋐四分を弘むべし、吾が道茲に在らずや。」と、師乃ち博く群宗を究め律を以て本となす、苟も之を言ふのみに非ず、實に允く之を蹈む。嘗て南山に依つて六時に禮を致し、晝夜行道し、㋑盂を持して乞食す。衣は唯だ大布、食は㋒中を過ぎず、一鉢三衣、囊に長物なし。凡そ祈㋓禱することあれば、誠、穹昊に達す。蝗を祈りて蝗境を出で、雨を祈りて雨霖を成す。述古龐公、師に命じて雨を禱らしむ。懺未だ口を絶たざるに震雷して大いに霆ぐ。公曰く、「吾が家は數世佛に事へず、今吾が師に歸向せざるを得ず」と。太師史越王、其の碑陰に題して曰く、「儒は儒を以て縛せられ、律は律を以て縛せらる、學者の大病なり。唯だ師のみ㋔三千の威儀、八萬の細行具足して玷なし。而して毎に㋕定慧の表に蟬蛻す。毗尼藏中眞の法王子なり。故に能く數百歲の後に奮ふて直に南山と肩を比べ、功、實に之に倍す。嚮に師をして身に㋖緇を披せざらしめば、必ず儒宗となつて特立超詣せん。惜しい哉」と。師、沒後二十六年、遺馨泯びず。朝廷、號を大智律師と賜ふ。塔を戒光と曰ふ。賜謚の寵を以て劉公の文に載するに及ばず、因つて後に書す。（塔銘）

法者三十人、熙寧中に寂す。

㋐四分は、四分律なり。律に梵網大乘律の外に十誦律、四分律、僧祇律、五分律あり。今はその四分律宗をいふ。此の宗は唐の道宣律師が四分律を所依として開きたるものにして、其四分律は佛滅後百年、曇無德羅漢が上座部の律中より要を拔き集めたる律本なり、四度に之を監修せし故に四分律と名づく、今、日本の律も亦此の派に屬す。

㋑盂は鉢盂の略。

㋒中とは正午をいふ。凡そ比丘の食時は明相現（朝、東の白らむ頃）より日中（正午）迄とす、日中より明相未出に至るまでを非時といひ、固形物を食するを禁ず。若し非時に食すれば波逸提罪を犯す、僧衆に對して懺悔せざる可らず、但し下根の者及び病人等には

大慧禪師、湛堂の準和尙に謁す、指すに入道の捷徑を以てす、慧、橫機讓ることなし。準、之れを訶して曰く、「汝悟らざる者は病、意識の領會に在り、是を㋗所知障となす。」と、時に逸士李商老、道を準に參ず。適々言へることあり、曰く、「道は須らく神悟すべし、妙は心空に在り、之れを體するに聰明を假らず、之れを得れば頓に聞見を超ゆ。」李、擊節して曰く、「何ぞ必ずしも㋘四庫の書を讀んで、然して後に學ぶことをせんや。」と、以故に結んで方外の友と爲す。準、示寂す。慧、㋙丞相無盡居士に謁して準の塔の銘を請ふ。公、雅より禪學を以て自ら許す、大知見を具するに非ざれば敢へて其の門に登ること無し。慧、㋚顏を承け詞を接ぐ、綽として餘裕あり。公、之れを稱して曰く、「子が禪、逸格なり。」

藥石を許せり。

㋓禱は殃を除くの祭なり。

㋔三千威儀は且く大數を擧げて倍增して、其の數の多きを示す。卽ち三千は行住坐臥の四威儀に各々二百五十戒あれば則ち一千なり、之を三世に約するときは三千となる。八萬も亦大數を擧げしのみ。

㋕定慧、定は禪定にして心の散動を防ぎ一境に專法せしむ、智慧は明かに一切の事理を觀照す、此の二相依つて佛道を成ずるを得るなり。今、照は定慧二法既に圓成して定慧に拘はらずと稱讚したるなり。

㋖緇は黑き色なり、法衣をいふ。

㋗所知障とは煩惱障に對するものにして、煩惱障は法の用に迷ふより起り、實に人あり等と執して業を造り、生死を引くの用ありて、吾人を縛して生死に輪廻せしめて涅槃の理を障ふもの。所知障は法の體に迷ふものにして、五蘊等の法體、實にありと執す、業を發し生死を引く用なしと雖も、其の性、闇昧にして了知すべき差別の法及び眞如を障へ、菩提の智慧を障へて起らざらしむ、故に所知の障といふ。

㋘四庫の書は經、史、子、集にして、經書とは四書五經等なり、史は歷史部なり、子は老莊等の諸子百家の書をいひ、集は詩文集等なり。

㋙商英字は天覺、無盡居士と號す、童兒たりし時、日に萬言を記す、趙抃、之れを薦めて召して闕に赴かしむ。徽宗の大觀四年六月、公を以て相たらしむ。初め佛寺に行いて藏經の嚴整たるを見て愀然として曰く、吾が孔聖の敎、胡人の書に如かざらんやと、無佛論を著はさんとす、婁の向氏曰

慧曰く、「自ら未だ肯はざるを奈んせんや。」公、曰く、「若し爾らば川勤に見えて可なり。」と、是に於て圓悟に京の天寧に謁す。因に陞坐の次で擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行」と。若し人ありて天寧に問はゞ即ち他に向つて道はん、「薫風自南來、殿閣生微涼」と。慧、忽然として前後際斷す、然も動相生ぜずと雖も、却つて ㊂ 淨顆顆の處にあり。入室する毎に、悟曰く、「也た易からず、爾、者箇の田地に到ることを得ることを。惜むべし死し了つて活を得る能はざることを。語句を疑はざる、是れを大病となす。道ふことを見ずや、懸崖に手を撒して自ら肯て ㊁ 承當して、末後再び蘇へらば、君を欺くことを得ずといふことを。須らく者箇の道理あることを信じて始めて得べし。」悟、室中にて嘗て「有句無句は藤の樹に倚るが如し」といふことを問ふ。口を開けば便ち道ふ、「不是」と。慧、一日客と同じく藥石す、㊄ 筯を把つて手に在り、食を喫することを忘了す。悟、笑つて客に謂つて曰く、「者の漢、㊅ 黃楊木の禪に參得す。」と、慧、憤然として問うて曰く、「和尚嘗て五祖和尚に問ふ、有句無句は藤の樹に倚るが如しと。祖、如何んが答へん。」悟曰く、「描くとも也た描き

く、既に無佛と言はば何の論か、これあらんと、公乃ち止む。後に維摩經を精讀して深く佛道を信ず。初め東林の聰禪師に謁して、遂に印可を蒙る、後に兜率の悅禪師に見えて大に省發する所ありき。公、護法論等を著はし大いに佛教の爲に力を致せしなり。佛法金湯編十三、稽古略等に出づ。

㊂ 顏な承くとは尊貴、先輩に面接し、其の顏色を見、其の意向を察して事を辨ずる等のことをいふ。

㊃ 淨顆顆等、顆は小頭（小あたま）の銳、又は玉の敲なり。今は只だ淸淨一遍の小さき境界に滯りて、未だ淨にも入り穢にも入り、活達自在の用を得ざるをいふ。

㊄ 承當は、類書纂要に云く、承は下、上を載するをいひ、當は抵なり、猶ほ抵當して其の事を承任するが如しと。即ち十分に肯諾し體得するをいふ。

㊅ 筯は箸なり。

㊆ 黃楊木禪、楊は柳の枝の直にして垂れざるなり。聞く黃楊木は年を經て漸漸に小さくなるなりと、今は活用のなき禪といふ程のことなり。

㊇ 待制とは天子の詔勅などを製作する官なり。

㊈ 爾汝とは何の隔もなき親しき間柄なるをいふ。

㊉ 緒餘は殘なり、莊子に緒餘以て天下國家を治む、とあり。

㊊ 景は墓なり、仰なり。

㊋ 維那は具さには羯磨陀那といひ、知事次第と譯す。之れは僧房の副監に名づく。風紀を監督し、事務を處辨する職務なり。

㊌ 倜儻はものに羈されざること、また高遠の貌。

成さず、畫くことも也た畫き就さず。」又問ふ、「樹倒れ藤枯るれば句何れの處にか歸す。」悟曰く、「相隨來也。」慧、聲を抗げて曰く、「我れ會せり」と。是れより豁然として凝礙あること無し。未だ幾ならずして道を江西に取る、㊇ 待制韓子蒼に邂逅して、儒釋を劇談して深く之れに嘆服す。書齋に館すること半年、昇與相揖するの外、時に非ざれば講を許さず、行くに先後を讓らず、坐するに賓主を問はず、相忘れて ㊈ 爾汝す。 ㊉ 緒餘を傾倒して日として法喜の樂みなしといふこと無し。後に丞相張魏公、挽いて徑山に住せしむるを以て、天下の衲子靡然として ㊊ 景從す。衆將に二萬指ならんとす。慧、繩すに淸規を以てせずんばあらず。其の自ら律なることを容す。禪者の要義を徵詰するある毎に、或は氣論合はずして、大慧の前に諍へば、慧、巨細を決せず、例して堂司に送りて趁ひ出す。時に ㊋ 維那紹眞は蜀の義士なり、大慧、凡そ令ありて下せば寢めて行はず、甚しきときは則ち遊山せしむ。後に慧に聞す、慧、大いに之れを稱して曰く、「妙喜が龍象の窟中に非ずんば、安ぞ此の悅衆あることを得ん。」瑩仲溫曰く、「蓋し師、㊌ 倜儻にして義趣を好み、識高明なり。性急なりと雖も、量實に寬く、怒罵の

中と雖も實に慈あり。衆中に律に徇はざる者あれば、一時令に據つて行ず、未だ嘗て人を傷け物を害するの意あらず。師、之れを稱する所以の者、深く旨あるかな、後人、鑑となさざるべけんや。」(正續傳)

治父の川禪師は蘇の㋕弓級なり。㋖宿種を以ての故に禪法を聽くを喜び、常に景德の謙禪師に參ず。謙、示すに趙州の狗子無佛性の因緣を以てす。早夜參究す、爾より職を廢す。尉、怒りて之れを笞つ。忽ちに杖下に於て玄要を大悟す。謙、爲に名を改めて曰く、「汝、舊狄三と呼ぶ、今、道川と名けん。此を去つて能く脊梁を竪起して益々奮勵を加へよ、則ち其の道、川の增すが如くならん。苟も其れ放怠せば言に足ることなけん。」と、川、其の訓を佩服して志願移ることなし。嘗て金剛經を頌す、今、世に行はる。法を治父に開く。冬至、衆に示して曰く、「群陰銷盡して一陽生ず、草木園林盡く發萠す。唯だ衲僧無底の鉢のみあり、依前として飯を盛り又羹を盛る。」と。(舟峰集)

㋕弓級は軍中の弓取りの役にして、弓手といふが如し。

㋖宿種は宿世(過去)に於て、既に禪を聞き其の種子を有し居る故に、今亦禪を聞くとなり。

德山の密禪師の會下に一人の禪者あり、工を用ふること甚だ銳し。狗子無佛性の話を看る、久しく所入なし。一日、忽ちに狗頭の日輪の大さの如くなるを見、口を張りて之れを食はんと欲す。禪者畏れて席を避けて走る。隣人其の故を問ふ、禪者具さに陳ぶ。遂に德山に白す。山曰く、「必ずしも怖れざれ、但だ痛く精彩を加へて、渠が口を開かんことを待つて裏許に撞入せよ、便ち了せん」と。禪者、數

に依つて坐して夜中に至る。狗、復た見前す。禪者頭を以て力を極めて一撞す、則ち函櫃の中にあり。是に於て煙然として契悟す。後、文殊に出世して道法大いに振ふ。卽ち㋗眞禪師なり。(梅溪筆錄)

神照の如法師、法智尊者に問うて曰く、「如何なるか是れ經王。」尊者曰く、「汝、我が爲に三年の庫事を主れ、却つて汝に向つて道はん。」如、敬んで其命を承く。三年畢んぬ。如、再び請ふて曰く、「今、當に說くべし。」と、尊者大いに「本如」と喚ぶこと一聲、忽然として契悟す。頌して曰く、「處々歸路に逢ふ、頭頭是れ故鄕、本來成見の事、何ぞ必ずしも思量を待たん。」(數行錄)

㋗眞は應眞なり、鼎州の文殊に居る、會元第十五等に出づ。

槖庵の嚴法師、經を試られて得度し、東山の神照に依る。照、之れを器として曰く、「吾が宗、人を得たり、益々墜ちず。」と擺んでて上首に居らしむ。師、特に講說を以て尙しとなさず、凡そ出處語默、必ず其の法と相應じて、而して後に已む。時に法眞、止觀の不思議境を問ふ、師曰く、「萬法唯一心、心外無別法、心法不可得、是れを妙三千と名く」と。未だ幾ならずして、法眞、東掖に移る。事を謝するに及んで、師に命じて踵を繼がしむ。師曰く、「昔㋘智者、年未だ五十ならずして已に徒衆を散ず、四明は年四十に至つて長坐不臥す、吾れ老いたり、又何人ぞ詎ぞ住山に暇あらんや」と。竟に受けず、靈鷲の東峯に隱居す。槖木一本あり、庵を傍に結ぶ、名けて槖庵と曰ふ。其の文に曰く、「予れ年六十にして草庵に歸卜す、庵成りて病を其の中に養ふ。且つ流俗を矯激するを以て意となさず、庵の左に槖一樹あり、因つて名く。夫れ槖

㋘智者は天台智者大師なり。

は名果の珍に非ず、之れを梨栗に比するに豈に愧づる色なけんや。然れども、梨は爽を以ての故に剡を致し、栗は甘を以ての故に啖はる。儻し梨栗をして識性ありて自ら無用の地を求めしむるも、且つ得べからず。彼の檀は梓と類たり、香しと雖も而も澁し。強ひて之れを啖うも、香は腹をして實たしむべからず、澁は口をして爽ならしむべからず、縱ひ三尺の豎子も亦採ること希なり。磊磊として枝に在れども自得の狀あり、是れ佳なるべきのみ。於戲、人、智を以ての故に其の骨を勞す、檀は澁を以ての故に其の身を安んず。智乎、澁乎、何者をか眞とせん。予が不智なる檀と隣なることを得たり」と。師、奉身の具は止だ一の小鉢と晨晝の飡は唯だ⑪三白のみ。是くの如くして獨居すること二十年、門を閉ぢて宴坐す。世、親しむべからず、毗尼の條章、輕重等しく護す、便用の物、細は㊅屢廖に至るまで悉く潔觸あり、寂寥として自得す。專ら㊇安養を以て所期となす。一夕夢むらく、池中に大蓮華を生じ、天樂四に列ると。師曰く、「此れ吾が淨土の相なり」と。後七日にして果して逝す。（行業等記）

昔、一の尊宿あり、道學を以て宗敎の爲に重せらる。晩年に旨を被つて住山す、雅より聖君の爲に賞遇せらる。終に臨みて、上、震悼す、詔して宣葬せしむ。侍臣奏して曰く、「此の僧、衣鉢太だ富めり、有司に諷へらる」と。上、悅ばず、眷禮遂に衰ふ。少雲曰く、「惜しいかな、世利の能く名を蔽ひ、穢を喪することを、今の豐儲厚斂なる者、焉ぞ戒めざるべけんや。」（少雲雜編）

古德、浴室の示衆の偈に曰く、「本より腥臊假りに合成す、皮毛津膩、時を逐ふて生ず、直饒海を傾けて終朝洗ひ、洗ふて驢年に到るとも淸きことを解せず。身塵埃を惹いては㋐沾むこと尙ほ淺し、心欲境に隨つては染むこと尤も深し、憐むに堪へたり、世を擧げて源を忘るる者、只だ皮膚を洗ふて心を洗はず、滿斛の湯を盛りて大杓澆ぐ。㋒檀那は更に望む利の相饒からんことを、後生若し來處を知らずんば、福、㋕須彌に似たりとも立どころに銷することを見ん。」と、（湖心石刻）

分庵主、道の爲に猛烈なり、食息の暇なし。一日石闌に倚りて狗子の話を看す、雨來れども覺えず、良久しうして衣濕ふて、是れ雨なることを知る。爾後、因に江干に行いて階司の侍郎來と喝するを聞いて、忽然として大悟す。偈に云く、「幾年か箇の事胷懷に挂かる、諸方に問ひ盡せども眼開けず、肝膽此の時俱に裂破す。一聲江上の侍郎來。」と、是より所寓を規さず、劍門に庵居す。化、嶺表に被る。偶語筆を走らして成す、自ら像に題して曰く、「面目兜搜、語言薄惡、癡癡酣酣、磊磊落落、風を罵り雨を罵りて慈悲

⑪三白は夢の異稱なり。語に宣夢を要せば三白を見よと、又諺に、廳前に三度降雪あるときは夢の豐作なりといふ。

㊅屢廖は戶牡なり、門關の鍵なり、くくるなり。

㊇安養は西方極樂國なり、彼國に生ずれば身心安穩にして功德、壽命を長養せられて、速かに佛果を得る故に此稱あり。

㋐沾の字、恐らくは泥の誤歟、泥は弱なり、なづむなり、滯なり、增韻に執して通ぜざるなりと。

㋒檀那は梵語、布施と譯す、布は普なり、施は捨なり、一切衆生を愛惜して普く施與するをいふ。之れに二種あり、財施は飲食、衣服、田宅等の財物を施すをいひ。法施は淨心を以て他の爲に善法を說くを云ふ。

㋕須彌は山の名、梵音に蘇迷盧ともいふ、甚だ高き故に譯して妙高山といふ。印度の古說には、此の世界は須彌山を中心として成れり、日月等は此の山の周圍を回轉す、而して山は四寶所成にして、高さは水面を超出すること八萬四千由旬、水中に入ること亦同じとすと。

に當る、是れ聖か是れ凡か摸索し難し、毎日橋頭橋尾に箇の人を等つ、世に王良伯樂なし一生空しく過却す。」（隱山）

靈源の清禪師は南州武寧の人、風神瑩徹にして學を好んで倦まず。黄太史曰く、「清兄學を好むこと飢渴の者の飲食を嗜むが若し、晦堂に依つて晝夜參決して寢饌を忘るに至る。一日晦堂、客と語話する次で、清、侍立す。客去つて之れを久しうして清、只だ舊處に在つて立つ。堂、之れを呼んで曰く、『清兄死了すや』と。是に於て省あり。」清、佛鑑に書を與へて曰く、「某、兩處に住持して、凡そ東山師兄の書に接するに、未だ嘗て一句言の世諦に及ぶあらず、其叮嚀の委囑、軀を忘れて此の道を弘示するに在るのみ。黄龍に到つて書を得るに云く、『今年諸莊皆旱損す、我れ總に憂へず、只だ禪家の無眼なることを憂ふ、一夏百餘人入室す、箇の趙州狗子の話を擧するに一人の透得するなし、此れ憂ふべしとなす』と。至れるかな斯の言、院門の辨せざることを憂ひ、官人の嫌責せんことを怕れ、聲名の揚らざらんことを慮り、徒屬の盛ならざることを恐るる者と實に相遠し。」（汀江筆語等）

佛燈の珣禪師は雪川の人なり、久しく佛鑑和尚に依る。衆に隨つて咨請すれども邈かに所入なし。俄かに歎じて曰く、「此の生に若し徹證せずんば誓つて被を展べず」と。是に於て四十九日只だ露柱に靠りて地に立つ、考妣を喪するが如くに相似たり。偶々佛鑑上堂して曰く、「森羅及び萬象、一法の所印。」と、珣卽ち頓悟して、往いて佛鑑に見ゆ。鑑曰く、「惜しむべし、一顆の明珠、者風顛漢に拾ひ得らるることを。」圓悟聞き得て其の未だ然らざることを疑ふ。乃ち曰く、「我れ須らく勘過して始めて得べし。」悟、人をして召し至らしむ。因に遊山して偶々一水潭に到る。悟、水に推入して遽かに問うて曰く、「牛頭、未だ四祖に見えざる時如何ん。」珣、狼忙として應へて曰く、「潭深うして魚聚る。」又問ふ、「見て後如何ん。」「樹高うして風を招く。」又問ふ、「見ると未だ見えざるとの時如何ん。」曰く、「脚を伸ぶることは脚を縮むるの裏にあり。」悟、大いに之れを稱す。（丹峰語錄等）

秀州の暹禪師、方に五歲にして秀氣藹然たり。母之れを異として資聖に往いて出家せしむ。禪會に徧歷して乃ち還る。而して秀郡に未だ禪居あらず、來者を待つに亦闕くる所あり。師、乃ち一に其院を更め、十方禪規の如くにして之れを主る。時に吳中の僧、坐法序を失す、輙ち勢の高下を以てして、復た戒德を以て論せず。師、慨然として嘗て書を以て ㊂ 理を官に求め、其の事を正すことを得たり。師、明敎の嵩に語つて曰く、「吾れ道を以て大いに物を慧むこと能はず、德行復た觀るに足らず、以て先聖人に媿づ。苟も其の亂法を視るに忍びんや、是れ益々媿なり。」明敎曰く、「必ずしも謙せざれ、宗門の道妙にして至ること罕なり、十二頭陀は出世の至行なり、吾が徒の能くし難き所なり、法の爲に奮うて身を顧みざるも、亦人の能くし難きなり。師、皆得て之れを行ふ、又何をか愧ぢんや。」（彩堂記）

圓照の本禪師は常州の人なり、天質粹美にして緣飾を事とせず、天衣の懷和尚に依る。弊衣垢面、

㊂ 理は正なり道なり、民を治むるを理といふ。
㊃ 襲は、かまどなり。

井臼を採り、㋕炊爨を典る。晝は則ち僧事に驅馳し、夜は則ち坐禪して旦に達る。精勤苦到して略少しも怠らず、或ひと之れに謂つて曰く、「頭陀、衆を荷ふて良に勞す。」本曰く、「若し一法をも捨てば滿足と名けず、菩提決して此の生身に證せんと欲す、敢て勞と言はんや。」と瑞光席を虛うす、師に命じて之れを主らしむ。既に至つて鼓を擊ちて衆を集む、鼓忽ちに地に墮ちて圓轉震響す。僧あり、之れを呼んで曰く、「此れ和尙の法雷、地に震ふの祥なり」と。俄かに僧の所在を失す。是れより法席大いに盛なり。後に諸刹を以て爭ひ之れを迎ふ。晩に淨慈を主る。靈芝の照律師と友とし善し、照、師に法衣を授く。師、身を終るまで陞坐必ず爲に之れを衣る。東都の曦法師、定中に淨土を見る、蓮華あり、大いに金字を書して云く、「杭州永明寺の比丘宗本坐」と。曦、其事を異しんで特に往いて瞻禮して、問うて曰く、「師は是れ別傳の宗、何ぞ淨土に位あることを得たるや」と。曰く、「禪門に在りと雖も、常に淨土を以て兼ねて修するのみ。」（行業等記）

仰山の圓禪師は盱江の人、戒を稟くるの後、道の爲に勇決す。妙喜が梅陽に居すと聞いて、往いて之れに依る。炊爨に服勤して精苦自ら勵む。妙喜、其器識精敏なるを見て、嘗て之れを異とす。因に㋖小參に、修山主の凡夫の法を具足して凡夫知らず、聖人の法を具足して聖人會せず、聖人若し會せば卽ち是れ凡夫、凡夫若し知らば卽ち是れ聖人」といふを擧するを聞いて忽然として契ふことあり。後に衢の祥符を主る、袁の仰山に遷る。事を視ること七日を閱へて、㋙禪門告香の禮を講ず。㋙首座、衆を領じて羅拜し、「咨すに生死事大、無常迅速なり、伏して望らくは慈悲、因緣を開示し玉へ」といふを以てす。圓、徐くにして曰く、「若し生死の事を究明せんと欲せば、直ちに須らく行住坐臥の處に於て覷看すべし。生何れよりか來る、死何れの處にか從ふ。畢竟生死、何の面目をか作す。」と良久して坐を起たず、泊然として蟬蛻す。（行狀）

大慧曰く、「近代主法の者、眞如の喆に若くは莫し、善く叢林を輔くる者楊岐の會に若くは莫し、慈明は眞率にして作事忽略なり、殊に避け忌むことなし。楊岐身を忘れて之れに事へ、惟だ周からざることを恐れ、惟だ辨せざらんことを慮る。寒を衝き暑を冒すと雖も、未だ嘗て己を急にし、容を惰らしめず。南源より興化に終るまで三十年、綱律を總柄す。慈明の一世を盡して而して後に已む。眞如は始め束包行脚してより、應世して徒を領するに逮ぶまで、法の爲に軀を忘れ、啻飢渴のみにあらず、造次顚沛にも遽色なく、疾言なし。一室儼然として安靜自ら怡ぶ。嘗て曰く、「衲子、內に高明遠見なく、外に嚴師良友乏しうしては、克く器を成すもの鮮し」と。嗟乎、

㋖小參は不時に講ずるをいふ。鼓を鳴すこと唯一通、其の規、大參するも約なれば小參といふ、大參は上堂なり。參は交參の義なり、祖庭事苑に云く、非時の說法を小參といふ、參は廣且つ大なり、幽顯皆集まり、凡聖を問つることなし、之れを參といふ。日本の建長清規等にも小參は必ずしも法堂に於てせず、隨處に之れを行ふとあり。

㋙禪門告香は敕修清規の告香に曰く、住持允許せば卽ち堂司に報じて告香圖を出さしむと。韻會に告は啓なり、爾雅に請なり。註に求請なりと、師家に揮香して普說を靜啓するなり。今は禪宗門に於ける告香の禮儀作法等を講ずるなり。

㋙首座とは、第一座、座元、首衆等と同じ、蓋し學、德勝れて大衆中に首位を占むる故に稱す。

二老は實に千載後昆の美範なり。」（與西善書）

石牕の恭禪師は道行孤峻にして才力餘あり。久しく天童の宏智禪師に依る、細大の職務歴試せずといふことなし。一日母を歸省す。母の曰く、「汝行脚本と、死生を了じて父母を度せんが爲なり、而して長く人の主事となる、苟も因果を明めずんば、將に我れを地下に累はさん。」と、恭曰く、「某、常住に於て毫髮も欺かず、一炬の燈と雖も亦彼此の用を分つ。我れを慮るに足ること無し。」母曰く、「然れども水を過ぎて脚の濕はざることを得んや。」と。（悟雲錄）

泰華は夷ぐべく、飲食は無かるべくも、而も孝は忘るべからず。故に大孝は天地に同じ、日月に竝んで健行して息まず。㋕大戒に曰く、「父母師僧に孝順せよ、孝を名けて戒となす」と。則ち孝忘るべけんや。吾儕、髮を祝して㋖三寶の數に預る者、貧富貴賤を問ふこと無かれ、唯だ尚ぶに道を以てし、唯だ尚ぶに孝を以てす。間父母ありて親屬の供億する者なければ、佛、衣鉢の一分を減じて以て之れに奉ずることを許したまふ。若し父母の養を躬せざる者は、吾が釋子に非ざるなり。（叢林公論）

牧庵の朋法師は婺の金華の人なり、車溪の卿公に見えて大事を發明す。累に大刹を尸る、學徒奔萃して惟其の後れんことを恐る。師、講に臨むに預め疏文を看讀せず、侍者をして簽もて出さしめ、起止に樂說の辯を以て流瀉して竭きず。嘗て衆に謂つて曰く、「徒を領してより已來、七番摩訶止觀を講

㋕大戒は大乘戒の略にして梵網戒經。

㋖三寶は佛寶法寶僧寶なり。

す、正修の中に於て未だ嘗て舉口に一字を道著せず。」又曰く、「我れ大部の中に於て箇の小難を作さんと欲するに、片紙の大さの如きも亦作ること成らず。所謂る文字の性を離れて皆解脫すればなり」と。晚に明の延慶を主る。一日坐に登つて調御丈夫を講ずる次で、忽ちに數士夫至つて師の擧唱を聽く。師曰く、「若し儒敎に在つて丈夫の事を論せば、忠臣は死を畏れず、勇士は生を顧みざるが如し、故に能く天下の大事を立し、億代の顯名を成す。乃至名利聲色の爲に惑溺せられざる者を皆丈夫と名く。若し吾が敎に在りては則ち㋝一心三觀を以て舟航となし、㋟六時五悔を檣棹となして、諸魔を降伏し、諸の外道を制する、之れを大丈夫と名くるのみ」と。士夫嘆美して去る。（行業）

無畏の久法師は餘姚の人、慧覺の璧公に依つて旨を得、後に禪會に徧歷す。嘗て徑山佛日の室に入る、佛日、夜坐必らず師を召して至らしめ、命じて天台の旨趣及び楞嚴の大意を說かしめ、深く之れを遇す。清修に出世す、學者雲の如くに集まる。師、後生單寮の縱恣なるを患ひ、屋を闢いて衆堂となす。淨几、明牕、蒲褥㋠禪板、洒然として㋡古叢社の風あり、講

㋝一心三觀。一心とは一念心なり、三觀とは空、假、中の三觀智なり、觀ずる方を一心三觀といひ、觀ぜられる方を一境三諦といふ。即ち一切諸法は因緣生なれば畢竟空無自性なりと觀ずるは空智、無自性にして、空と雖も緣に隨つて十界の法、宛然たるを照すを假智といひ、空にして而も假、假にして而も空、空假圓融して絕對なるを照すを中智といふ、此の三智本是れ一心中に得れば一心外に三智なく、三智外に一心なし、只だ一心が緣に隨つて三智と起るのみ、故に三一一三、圓融無碍なるを一心三觀智といふ。又諦觀を一往能觀所觀と分くれども、其の體本と一にて理智不二にして二、二にして而も不二なり。

㋟六時五悔とは、六時は早朝、日中、日沒、初夜、中夜、後

の次で學者の文相に膠し、異說を鼓するを見て、歎じて曰く、「天台の道、四明に由りて興り、亦四明に由りて廢す。聖人復生するに非ずんば孰か能く扶持せんや」と。識者謂らく、「師、言を知れり」と。師、天資慧利にして辯說流るるが如し。擧止委蛇として物と忤ふことなく、身を終るまで之れと游處する者、未だ嘗て喜愠の色あることを見ず。日に七經を課す、夜は則ち宴坐、率ね以て常となす。無畏庵を創して歸老す。（塔銘）

紹興癸亥の冬、大慧禪師、恩を蒙りて北に還る。時に育王、席を虛しうす、宏智和尙、大慧を擧げて之れを主らしむ。宏智、其の來るときに多衆にして必ず食に匱しからんことを前知す。智、預め知事に告げて曰く、「汝急に我が爲に多く歲計を辦し、㋑香積に合用すべき者は悉く倍して之れを置け」と。知事、誠むる所の如くす。明年大慧果して至る、衆、萬餘指に盈つ、未だ幾ならずして香積匱しと告ぐ、衆皆㋒皇皇たり。大慧、能く錯ふこと莫し、宏智、遂に所積の物を以て盡く發して之れを助く。是れに由つて一衆咸く其の濟を受く。慧、詣謝して曰く、「古佛に非ずんば安ぞ能く此の力量あらん。」慧、一日智の手を執りて曰く、「吾れ二人偕に老いたり、爾唱ふれば我れ和す、我れ唱ふれば爾和せ、一旦先だつて溘然たる者あらば、則ち存する者爲に其の事を主らん」と。歲を越えて宏智、寂を告ぐ、大慧竟に爲に喪を主り、盟を逾えず。（雪窗雜記）

圓覺の慈法師は解行兼ね備ふ、學者之れを宗とす。東掖、席を虛しうす、能、文の二師、然も師を指請して之れを主らしむ。慈、至つて法席鼎に盛んなり、盛暑講罷んで方丈に歸りて偃息す、而して文、適ま至る。師に謂つて曰く、「東掖の道場は世世皆有道の者之れを主る、講罷んで懺室に在らざれば卽ち禪堂にあり、未だ偃臥して自恣なる者あらざるなり。」と、慈、聞いて曰く、「敢て命を敬せざらんや」と。自より後、祁寒溽暑にも殊に少しも怠らず。（草庵錄）

南岳の讓和尙、六祖に參ず、般若多羅の㋓讖あり、云く、「汝が一枝の佛法、汝が邊より去つて向後一馬駒を出して天下の人を蹋殺すること在らん」と。卽ち馬祖是れなり、祖、八十四人の㋔善知識を出す、世人之れを觀音の應化と謂ふ。凡そ住持すれば皆王臣供給す、院主あり、二十年、常住を管執す、㋕文曆を置かず。一日有司磨勘して囚禁して獄にあり、乃ち自ら惟

夜なり。五悔とは一に懺悔、之に二あり、理懺は實相を念するなり、事懺は晝夜六時に三業清淨にして佛前にて罪過を發露し、新に造らざるなり、二に勸請、諸佛の久住して度生し給はんことを勸請す、三に隨喜、他人の作善を隨喜し稱讚す、四に廻向、あらゆる隨喜稱讚の善根を菩提に廻向す、五に發願、若し發心なくんば萬事成ぜず、故に發心して前の四を導くなり。

㋖禪板は坐禪の時に手を安じ或は身を靠くる器具なり。

㋗古叢社、古は往昔をいふ。社は周禮に二十五家を一社となすといへり、復た禮記の祭法に王は群生の爲に社を立つるを大社と曰ふと云へり。今叢社とは僧堂或は叢林と同じ、僧伽を與若くは和合と譯す、比丘一所に和合するをいふ。大樹の叢生するを林といふ、一一の木を林といはざる如く一一の比丘を僧となさず、衆く和合するを僧とす、其の僧衆の居る所を叢林と云ふ。其の嚴肅にして而も洒然たること古の叢林の如しとなり。

㋘香積とは維摩經第十香積品に出づ、卽ち上方に衆香國あり、佛を香積如來と號す、一切法は香に由つて成す、其の香氣十方に遍す、又無盡の香飯あり。舍利弗食を思ふに因つて維摩は一鉢の香飯を香積佛に請ふて大なる佛事を作すことを說けり。此の因緣に依つて今其の名を取り來りて、寺の庫裡を香積と呼びしなり。

㋙皇皇は求むること有りて得ざるの意。

㋚讖は驗すなり、未來記なり。

㋛善知識とは宗師家を稱し、或は道友を稱す、般若經に云く、

つて曰く、「我が此の和尚は知らず、是れ凡か是れ聖か、二十年伊を佐助す、今日此の苦海の報を得」と。馬祖、寺中に於て覺知して侍者をして香を裝せしめ、端然として入定す。院主獄中に於て忽爾として心開け、二十年の用過の錢物、一時に記得す。書司をして口づから授けて筆寫せしむ。計算遺るること無し。（通明集）

雪堂の行和尚云く、「高庵は人と爲り端勁にして動靜法あり、己を處すること儉なりと雖も、人に與ふること甚だ豐なり。人の疾あるを聞いては諸の己より出でたるが如くし、蒼頭厮役に至るまで躬ら往いて候問す。其の所須に聽せて、死に及ぶまで囊篋の有無を問はず、禮を盡して津送す。其の深慈にして物を愛すること、眞に末世の良軌なり。」（恰雲錄）

黃太史、胡少汲に與ふる書に曰く、「公、學道頗る力を得たり、治病の方、當に深く求むべし。禪悅を もて生死の根を照破するときは、則ち喜怒憂患、脚を安んずる處なし。疾既に根なくんば枝葉は能く害をなすこと無けん、投子の聰、海會の演、皆、道行高重にして古人に愧ぢず。若し文章の士に從はば妄言綺語を學んで只だ知見を增長す、何ぞ己事に益あらん。」（梅溪集）

簡堂の機禪師は台の仙居、楊氏の子なり、風姿挺異にして才儒林を壓す。年二十五にして妻孥を棄て、出世の法を學ぶ。晩に此庵元禪師に見ゆ。密に契證あり、出でて莞山に應ず。㋐刀耕火種、單丁なるもの一十七年、偶に云く、「地爐、火無うして客囊空し、雪は楊花に似て歲窮に落つ。斷麻を拾ひ得て壞衲を穿つ。知らず身の寂寥の中に在ることを。」毎に人に謂つて曰く、「某猶ほ未穩在、豈に住山を以て吾が事を落さんや、道を念ふこと在衆の日に減せず。」と、晝夜參究して殊に少しも廢せず。一日偶々樹を斫つて地に倒るるを看て、忽然として大悟す。平昔碌膺の物、泮然として氷のごとく釋く、未だ幾ならずして江州圓通の命あり。師曰く、「吾が道將に行はれんとす。」と、卽ち欣然として杖を曳いて去る。坐に登りて說法して云く、「圓通、㋑生藥鋪を開かず、單單に只だ死猫頭を賣る、知らず那箇の無思算か、喫著して通身冷汗流れん。」（大同拾遺）

隱山、靈空に與ふる書に曰く、「沙門の高尙なることは大聖慈蔭の力なり、後世紛紛たる者自ら之れを卑賤す。三三兩兩泉石の間に出沒して、其の氣象、天台の巖洞と異なることなきも、頻頻に王公の前に匍匐す。識者の爲に口を掩はれざることを得んや、年來糞火に芋を煨して、起つて恩を謝せざるの風、固に復た見ず。一人の政黃牛、志庵主の如くなるを覓むるに、大いに地を掘つて天を覓むるに似たり。」と。

紹興十三年、左修職郎、詹叔義、財賦の表を上りて度牒を賣ることを仕めんことを乞ふ。朝廷依つ

㋐刀耕火種、單丁　人心をして歡喜信樂に入らしむ、是を善知識と名くと。

㋑文暦の暦は鐔の字の略字なる歟、然りとせば右左に書鐔等を置かざるをいふ。

㋒生藥鋪云云は一向効能なきなまの藥店をださぬと云ふを、之れ言句や理窟やの似て非なるつまらぬ法を說かぬことなり。死猫頭は激烈な毒なり、意は一超に得脫のできる究竟の活法を說くとなり。

て三十二年に至りて、侍郎吳子才、表を上つて陳請す、仍つて頒賚を許さる。尋で論せられて以爲く、「佛に倭し福を邀む」と。罷められて、巖谷に歸る、一榻に宴坐し、經禪を味ふて以て自ら飫き、雲泉を弄んで以て自ら娛む。仍つて一棺を製して夜は則ち其の中に偃臥し、才かに分夜に至れば、二三の童子をして棺を擊つて呼ばしめて曰く、「吳子才歸去來、三界無安住すべからず、西方の淨土蓮胎あり」と。吳、聞いて卽ち起つて禪誦す。是くの如く精進すること數年、終に及んで家人に命じて曰く、「汝聞く乎。」家人曰く、「聞かず。」吳曰く、「汝當に念を斂めて聽くべし、悉く聞く空中に隱然として天樂の音あることを。」吳曰く、「淸淨界中、念を失して此に來る、金臺既に至る、予れ則ち行かん」と言ひ訖つて逝す。（雪竇記）

寂室の光禪師、靈隱に住する日、兄往いて之れを訪ふ、茶湯のみにして退く。兄の意悅ばず、知事延いて庫堂に至つて食を備へて之れを待す。光、聞いて曰く、「故なくして食を受く、他日我れを累することあらん」と。兄をして塡て還して去らしむ。（江筆語）

長靈の卓禪師、無示に命じて立僧せしむ。法席嚴肅なり、堂廚を事とせず、唯だ安禪、以て佳供に當て、夜參以て藥石に當つ。其の間、衲子任へざる者あり、無示、卓に告げて曰く、「人、食を以て先となす、是くの若きときは則ち衆將た安んせんや。」卓、之れを慍りて曰く、「表率安んぞ此れを爲すべき。」無示曰く、「某爭はずんば堂廚、誰をしてか爭はしめん。」（慈航小參）

孝宗の佛照禪師に賜ふ手詔に曰く、「禪師の奏する所の菩薩の十地は、乃ち是れ修行の漸次、凡より聖に入ると、夫れ復た何をか疑はん、方に知んぬ、脚實處を踏んで十二時中曾て間斷なく、以て圓熟するに至る。雜染純淨俱に障礙をなす、作止任滅此の禪病を脫せよと。當に禪師の言の如くすべし、常に劒刃を揮つて脊梁を卓起し、發心精進して猶ほ退墮せんことを恐る。每に思ひ此に到つて㊀兢兢業業として未だ嘗て敢て忽にせず。今、俗人乃ち禪を以て虛空となし、語を以て㊁戲論となす。其の道を知らざること此くの如し。玆の事至大なり、豈に筆下に在りて窮むべけんや、聊か所得を叙するのみ。」

慈航の朴禪師は福州の人、世家に生る、忽ちに浮幻を厭ひ身を脫して釋に從ふ。師、納戒の時、身心輕安にして空際にあるが如し。戒師曰く、「子は眞に上品の妙戒を得たり」と。是れに由つて身を終るまで持戒嚴甚なり。天童を主ること二十年、未だ一日も輒ち衆に背いて食することあらず。病と雖も違はず、己を奉ずることは甚だ約かに、衆を待することは至豐なり。小師あり、知庫畢りて歸りて師を拜して曰く、「某力を竭して、營轉して一倍の贏を增す、敢て自ら與へず、之れを常住に納れん。」師、怒つて曰く、「汝が贏す所の者は巧に從せて不義を取りて之れを得、常住の物は乃ち淨財なり、豈に汝が不義の物を容れんや。」と終に之れ納れず、其の僧をば逐ふ。師凡そ童行の剃染すれ

㊀兢兢は自ら安んぜざる貌、兢兢業業は恐るるなり。

㊁戲論とは、迷妄の見より起る言なり、卽ち正理に契はざる故に戲論といふ。此に二あり、一に愛論とは一切法に於て取・著の心を生ずるをいひ、二に見論とは諸法に於て決定の解をなすをいふ。

ば沙彌寮に入れて登壇受戒の儀軌を習ひ、及び遺敎經を誦せしめて方に具戒を受けしむ。受具畢りて新戒寮に入れて三衣一鉢を受持せしむ。夜は則ち坐具を展べ、五條を披して睡る。復た一りの戒經を精誦する者を請して、之れが與に敎授せしむ。誦して通利に至つて方に參堂を許す。二三夏を越えて山門に方に掌務を督す。遊方を願ふ者は、師、必ず欣然として眉睫に動く。道具を贈つて其の行を促す。嘗て其の徒を誡めて曰く、『古は僧となるに朝廷、經を試みて以て得度す、故に發心して釋に從ふ者は、皆英特の上行にして佛果を誓求するの士なり。今時、佛法淡薄にして名存して實忘す、多資なる者は方袍を服し、資贍ならざる者は裨販して利を爲す。貪僞捷出して至らざる所なし。一朝に緇流に預ることを得て、自ら謂り、『畢生了辦す』と。更に克己進修せず、便ち因果を撥無し、光陰を虛喪して徒らに信施を消す。皆出家の正因を知らず、佛法の罪淨を明めず、三乘十二分敎を解せず、一切諸法の本空に達せざるに由る。未得を得と謂ひ、未證を證と謂ふ。貴權に諂奉して應世を干し求む。且つ法の爲にする身心なし、一味に貪嗔造過す。斯くの如きの徒、我が法內に入りて、傷敗壞亂して害をなすこと滋々多し。佛の言はく、『譬へば師子身中の蟲、自ら師子身中の肉を食ふが如し、外道天魔能く破るに非ず』と。汝既に正因もて出家し、正因もて僧となる、須らく當に魔道を遠離し、佛戒を遵持すべし。若し是れ達道の人ならば、總に恁麼なることを消せず、汝が積劫より今に至るまで心識昏倒することを奈せん。僧となるの初め三衣一鉢、種々の禁戒を以て其の心を制御せずんば、安んぞ道に入るべけんや。譬へば㋐懶惷にして調はざるに、諸れに楚毒を加ふれば、方に乃ち調伏するが如し。若し是くの如くならずんば、異時三塗の苦、重くして悔ゆとも將た及ぶことなし。我れ無示の會中に在りて、凡そ㋑五夜に遇へば必ず參ず、行者に誡む、『我れ須らく往いて聞くべし』と。他の苦口に人の爲にするを聞いては覺えず涕淚俱に下る。凡そ無示の門に登つて、其の擧揚を聞き其の行事を觀ては叢林に老いたる者と雖も、亦皆汗下り心死す。蓋し者の老和尙、生平眞實にして行說俱に到る。四十餘年、非時を食せず、衣鉢を畜へず、己を持するに至つて細行も悉く律制に徇ふ。以の故に至る所の住山、聲氣を動せずして自然に法席雍肅たり、諸方目づけて鐵面と曰ふ。汝釋子たり、當に志を抗げ古を慕ひ、言に依りて行を立すべし。庸俗に墮することを毋れ。」と。無示、嘗て曰く、「我れ主法の者となる、若し方便をもて汝をして心を攝して道の爲にせしめずんば、汝他日無知にして罪を造らんに、老僧未だ免れじ、汝と同じく苦を受くることを。今汝をして聞くこと無からしむべからず。聞いて行せざるは我が咎に非ず。見ずや、良禪師は靖州の人、楊岐會下の尊宿なり。小師の戒律を犯すありて臨終に惡道に入る。其の母夢らく、其の子、恨を師に銜んで曰く、皆父師の我れを導いて善をなさしむることを能はずして是の苦を受くることを致すと。其の母是の夢を以て良に告ぐ。良未だ之れを信せず、龍圖

㋐懶惷は調はざるなり、また性狠なり。

㋑五夜、夜參禪すべき日が五回あり、其度毎に參するをいふと。靈隱錄上堂に云く、五日一參諸方の常例、少室の單傳を說かず云云と。又普燈錄に曰く、五日一參二八普說云云と、是れ其の例か。

の徐禧、德占、是の時布衣たり、嘗て良に參扣す。德占俄かに夢に一官府に入る、兵吏、斧鉞、左右に森列す、熟々之れを見れば、乃ち良禪師、庭下に坐す、鬼卒杵を以て其の背を撞く。號叫震裂す。復た其の小師を見るに枷鏁杻械して其の側に蹲踞す。德占、守闇の吏に問うて曰く、「二僧何の罪ぞ。」吏曰く、「老者は乃ち少の師なり、其の師、平時訓導すること能はずして縱に破戒せしむるを以ての故に、師の罪特に重きのみ。此れ猶ほ生報なり。後七日にして子と同じく ⑰無間に墜ちん、斯れを大苦となすと。德占、夢さめて遂に良の所以を詢ふ。乃ち云く、數日より來、背痛うして擊ち撞くが如し、藥も療すべからず」と。七日にして果して卒す。德占、嘗て壁窠して大いに分寧諸刹の壁に書す。（紹熙の間、光孝の紹禪師、天童行堂の壁に榜す）

法智尊者は學行高妙なり、凡そ著作する所、宗旨を立し邪說を闢き、人心を開奬して眞實地に到らしめざるは莫し。指要書成る、雪竇の顯禪師、持して山を出でて齋を羞めて慶を爲す。仍つて茶榜あり、具に其の事を美す。則ち知りぬ、在昔の禪敎一體にして氣味相尙ぶこと、此くの如くなること有るに至るを。今の暗禪奪敎の者と日を同じうして語るべきに非ず。（草庵錄）

黃龍の心禪師は南雄の人、儒生となつて聲あり。年十九にして目、盲す、父母許して以て出家せしむ。忽ちに復た物を見る、遊方して南禪師に謁す。深く此の事を信ずと雖も、而も大いに發明せず、辭して雲峯の會に往く。峯、世を謝す、就て石霜に止る。因つて傳燈を閱て、「僧、多福に問ふ。如何なるか是れ多福の一叢竹。福曰く、一莖兩莖斜なり。僧云く、不會。福曰く、三莖四莖曲れり」といふに至つて、此の時頓に二師を見る。歸りて南公を禮して方に坐具を展ぶ。南曰く、「汝我が室に入れりと。」師も亦踴躍して自ら喜ぶ。卽ち應へて曰く、「大事本來是くの如し、和尙何を用てか人をして看話下語せしむ。」南曰く、「若し汝をして究尋して無用心の處に到つて自ら見、自ら肯はしめざれば、吾れ則ち汝を埋沒せん。」と南の入滅に會ふて道俗、師を請じて踵を繼がしむ。四方歸仰して南公の時に減せず。然るに師、雅より眞率を尙んで、務に從ふことを樂はず、五たび解き去らんことを求む。乃ち事を謝することを得たり。未だ幾ならずして謝師直、潭州に守たり、大潙を虛ふし、以て師を致す。三たび辭して往かず、又江西の轉運、彭器資に屬して、長沙に應せざる所以の意を請ふ。師曰く、「馬祖、百丈以前は住持の事なし、道人は空閑寂寞の濱を相尋ぬるのみ。其の後住持ありと雖も、而も王目尊禮して天人の師となる、今は則ち然らず、名を官府に挂けて直ちに伍伯をして追呼せしむ、此れ豈に復た爲すべけんや。器資、此の言を以て反命す。」師、直ちに復た書を致して曰く、「願はくは一たび見ゆることを得ん、敢て住持を以て相屈せず」と。師、四方の公卿と意合すれば千里之れに應ず、合はざれば數舍と雖と往かず。師、內外の書を以て徵詰開示して、人をして服習する所に因つて克己自觀せしむ。悟るときは則ち歸を同じうし、歸すれば則ち敎へず。諸方、師の外書を以て佛說に糅ふることを訾

⑰無間は阿鼻の譯語なり、之れ八大地獄中第八の最重の苦處にして、此の地獄に墮せし罪人は、劍樹、刀山、熱鐵丸等にて痛苦を受け、少しの休息の間斷も無き故に無間地獄といふ。

る。師曰く、「若し見性せざるときは則ち祖佛の密語盡く外書と成る、若し見性するときは則ち魔說狐禪も皆密語と成る。」と故に四十年の間、士大夫、其の風を聞いて開發する者衆し。㊐庭堅、宿に記荊を承けて大法を湛任す、道眼未だ圓ならざる者來つて㊑宰堵を瞻て實に安仰の嘆を深うす。乃ち堅㊒珉に勒して敬して遺美を頌す。（塔銘）

宏智の覺禪師は隰州の人なり。未だ遊方せざる時、預め天童の境を夢む、嘗て之れを紀して曰く、「松徑森森窈窕たる門、到る時微月正に黃昏。」と。㊓建炎の間事を長蘆に謝して、眞歇を寶陀巖に訪ふ、天童に到るに及んで宛も昔夢の如し。尋で州府の爲に住山を敦請せらる。師、固辭す、後衲子の肩して法座に至るが爲に、是れに由つて黽勉して受く。山に居ること三十年、傳法の外百具㊔鼎新なり、常に千餘衆を安ず。而して齋厨豐衍なること諸刹に甲たり、衲子以て安然として道を辨ずることを得たり。師嘗て衆の爲に行乞す、吳越の人深く其の化を信じて金帛の施、求めずして至る。師、諸檀に謂つて曰く、「汝を化して布施せしむることは、慳心を破せしめんとなり、專ら我れに施すこと毋れ。後に小寺の僧ありて來らば、願はくは却つて之れに施せ」と。或は廢寺の窘乏、及び窮民老弱の輩を見ば、卽ち衣資を出して施して歡喜せしむ。師未だ嘗て儲積せず、用ひ盡すを度と

㊐黃庭堅は心禪師の居士なり。
㊑宰堵は宰堵婆の略、或は數斗婆、卒都婆、卒塔婆などともいふ、略して塔、塔婆といふ、此に方墳圓塚、高顯などと譯す。佛舍利を奉安するところなるが故に、或は靈廟等ともいふ。
㊒珉は石の美なるものにて玉に似たり、今は美しき堅き石なり。
㊓建炎は南宋の高宗の年號、西紀約一一二七。
㊔鼎は新なり。

するのみ。隰州の僧、哲魁といふ者あり、孤硬の人なり、跡を坐下に潛む、鄉所を言はず、十餘歲を經て始めて宏智の鄉の人なることを知る。宏智聞いて欣然として訪ふて曰く、「父母の邦何ぞ太だ絕物なるや。」と智、招いて方丈に至らしめんと欲す。魁、謝して曰く、「己事尙ほ未だ辨せず、豈に鄉禮を講ふに暇あらんや。」と卽ち杖を曳いて去る。人能く挽くなし。徑に寶陀の眞歇の故居に往いて禪宴す、月餘日にして臨終す。衆を召して說法して逝す。闍維して舍利無數なり。（雪竇に其の事を誌す）

歐陽文忠公、嵩山に遊んで意を放にして往く。一の古寺に至るに風物蕭然たり。老僧あり、經を閱して自若たり。公與に語る、甚だ顧みず。公問うて曰く、「古の高僧は死生の際に臨んで類ね皆談笑して脫去す、何の道ありてか之れを致す。」僧曰く、「定惠の力なり。」公曰く、「今は寂寞として有ること無きは何ぞ哉。」僧曰く、「古人は念念定にあり、臨終那ぞ散を得ん。今人は念念散に在り、臨終安ぞ定を得ん。」と、文忠之れを嘆服す。（林間錄）

馮濟川居士、藏經を施す。願文の其の略に曰く、「予がこの施經は一事にして而も二施を具す。何が故ぞ、財を以て經を贖ふ、是れを財施と謂ふ。經を以て法を傳ふ、是れを法施と謂ふ。佛の所說を按ずるに、財施は後世當に天上人間の福德の報を得べし、法施は當に世智辯聰蓋衆の報を得べし。當に知るべし、此の二報皆是れ輪廻の因、苦報の本なることを。我れ今發願す、願くは此の二報を回して臨命終の時、往生の極樂世界を莊嚴して蓮華を胎となし、佛に見え法を聞いて㊗無生忍を悟り、不退

階に登りて菩薩の位に入り、十方界の内、五濁世中に還り來りて、普く其の身を見じて佛事をなさん。今日の財法二施の因を以て、觀音大士の大慈悲を具するが如く、㋒五道に游戯して類に隨ひ形を化して諸の妙法を說き、永く苦道を離れて智慧を得せしめて、普く衆生と與に悉く成佛を得ん。乃ち予が施經の願なり。」と。（捨經碑）

北峯の印禪師、睡を戒めて曰く、「佛法滅せんと欲して幻身を調養す、然も此の臭身は終に灰土となる。苟も樹立に因つて以て死を致さば、亦大丈夫にあらずや。」又曰く、「說き得て人に過ぐれば事を濟し得ず、須らく是れ行じ得て人に過ぐべし。若し自己分上一點も㋓用不著ならば、千經萬論を記得すること㋔阿難の如しと雖も、亦何ぞ貴ぶに足らん。」又曰く、嘗て見識の人と住持の寺門を興顯する法を論ずるに曰く、『香火を勤奉して常住潔白に、衆人を將ゐて事を爲すを出でず』と。予、深く此の說の理を盡すことを喜ぶ。若し無識の人、論ずるときは汗下つて、俗に趨り本色の人體を失す。」（自行錄）

資壽の總禪師は蘇氏、元祐の間の丞相の孫女なり。年十五にして憒と

㋒無生忍とは無生とは無生無滅常住不變の義なれば、眞如の理を指すなり。忍とは忍可の義にて、確に認識するをいふ、卽ち智を指す、故に中道眞如の理を悟る智慧を無生忍と云ふ。

㋒五道は地獄、餓鬼、畜生、人、天なり。修羅は人若しくは天中に攝したるなり。觀音菩薩が大悲大智もて衆を濟度せんが爲に、機に應赴して自在に現じ給ふ。遊戯とは物に執着せず、障へられず、自在無碍に度生し給ふ樣を形容したるなり。

㋓用不著は何の役にも立たぬをいふ。

㋔阿難は阿難陀の略、釋尊の從弟にして釋尊五十五歲の時に出家して、二十餘年間侍者となりて東西の化導に隨行す、弟子中に多聞强記を以て有名

して禪の所謂を知らず、唯だ人の世に處する、生けるときんば來處を知らず、死するときんば去相を知らざることを疑ふ。是に於て念を斂めて忽ちに所省あり、自ら以て異とせず。意らく、「其の最靈たる者、是くの如くならずといふこと靡し」と。亦未だ嘗て以て人に語らず、勉めて庭闈の命に從ふに及んで西徐の許壽源に歸ぐ。幾何も無くして深く世相を厭ふて齋潔自如なり。且つ方外に高蹈せんと欲す、志を抗げて古を慕ふ。遂に薦嚴の圓禪師に謁す。圓曰く、「閨門の淑質何ぞ大丈夫の事に預らんや。」總曰く、「佛法、男女等の相を分たんや。」圓、之れを詰つて曰く、「如何なるか是れ佛。」「卽心是佛」と。「汝、作麼生。」總曰く、「久しく老師と嚮く、猶ほ者箇の語話を作すや。」圓曰く、「德山、門に入れば便ち棒す、遉。」總曰く、「老師若し此の令を行せば、虛しく人天の供養を受けじ。」圓曰く、「未在。」總、手を以て香臺を拍すること一下。圓曰く、「香臺は汝が拍するに從す、無きときんば如何ん。」總、便ち出づ。圓、呼んで曰く、「汝甚麼の道理を見て便ち與麼なる。」總、首を回して曰く、「了了として見るに一物なし。」圓曰く、「者箇は是れ永嘉底。」總曰く、「他を借つて氣を出す、又何ぞ不可ならん。」圓曰く、「眞の師子兒なり。」と。時に眞歇禪師、宜興に庵す。師、徑に造る。眞歇、繩牀に端坐す。總、才かに門に入る。眞歇曰く、「是れ凡か是れ聖か。」總曰く、「頂門の眼何んか在る。」曰く、「覿面に相呈す事若何ん。」總、坐具を提起す。歇曰く、「者箇を問はず。」總曰く、「蹉過了也。」歇、便ち喝す。總も亦喝す。總、江浙の諸名宿に於て參扣

なり、滅後に佛の敎法を編纂するに當つて、經文は殆んど此の人の記憶に存せしものなり。

すること殆んど徧し。壽源、嘉禾に守官たるに從ふ。未だ妙喜を見ざるを念となす。適々妙喜、馮濟川と俱に舟御して城に氏る。總、之れを聞いて往いて禮敬するのみ。妙喜、濟川に謂つて曰く、「適來の道人却つて曾て神を見、鬼を見來る、但だ未だ鑪鞴の鍛鍊に遇はず、恰も萬斛の舟の絶潰斷港の中に在つて、未だ轉動すること能はざるが如し。」馮、㋺軒渠して曰く、「談ずること何ぞ容易なるや。」妙喜曰く、「他、若し頭を回さば定めて須らく別なるべし。」と、翌日壽源、喜に命じて說法せしむ。喜、衆を顧みて曰く、「今此間に却つて箇の見處ある人あり、山僧は掌關吏の如し。才かに其の來るを見れば、便ち有無の稅物を知る。」と、下坐するに及び、總、遂に道號を求む、喜、無著を以て之れに名く。明年徑山の法席盛なりと聞いて、卽ち往いて夏を度す。一夕宴坐して忽ちに契悟あり、頌して曰く、「驀然として鼻頭に撞著すれば、伎倆冰消瓦解す、達磨何ぞ必ずしも西來せん、二祖枉げて三拜を施す、更に如何若何を問はば、一隊の草賊大敗す。」と喜、之れに復して曰く、「汝既に活祖師意を悟り、一刀兩段直下に了ず。機に臨んで一一天眞に任す。世出世間、剩少なし。我れ此の偈を作つて證明をなす。四聖六凡、盡く驚擾す、驚擾することを休めよ碧眼の胡兒、猶ほ未だ曉らず。」と總、因に入室す。喜問うて曰く、「適來者僧、汝に祇對す、且く道へ、老僧何が故にか他を肯はざる。」曰く「爭か妙總を恠み得ん。」喜、竹篦を擧げて云く、「汝、者箇を喚んで甚麼とか作す。」總曰く、「蒼天㋻蒼天。」喜、便ち打つ。總曰く、「和尙他、後錯つて人を

㋺軒渠は笑ふ貌。
㋻蒼天は、やれ悲しや悲しやと云ふこと。

打ち去ること在らん。」喜曰く、「打得著すれば便ち休す、甚の錯不錯をか管せん。」總曰く、「專ら流通を爲さん。」と、總、一日禮辭して里に旋る。喜曰く、「汝山を下り去つて、人の此間の法道を問ふことあらば如何んが祇對せん。」總曰く、「未だ徑山に到らずんば、妨げず疑著することを。」喜曰く、「到つて後如何。」總曰く、「舊に依つて孟春猶ほ寒し。」喜曰く、「恁麼に祇對せば豈に徑山を鈍置せざらんや。」總、耳を掩ふて出づ。是れに由つて一衆歆艶して無著の名、大いに世に著る。晦藏すること既に久しうして遂に㊐方袍を服す。師、年德重しと雖も、持律甚だ嚴にして苦節自ら礪す。前輩の典刑あり。太守張安國、師の道望を以て命じて資壽に出世せしむ。未だ幾ならずして事を謝せんことを求めて、家墅に歸老す。（投機傳）

道曇法師は常州の人、禪定中に於て慈忍三昧を得。猿鳥の常に花果を供することあり、乃ち爲に受戒說法して去らしむ。夜に至つて鬼神に食を施す時、之れを祝して曰く、「吾が食を食ひ、吾が法を受けば同じく法侶と爲さん」と。年九十餘にして四方より師として事ふるに、法を受くる者は皆新學の少年なり。師、凡そ經を閱るに香を炷いて九禮し、趺坐良久して然して後に帙を開く。常に諸徒に訓へて曰く、「夫れ聖敎を窺ふこと意、宗を明らむるあり、若し己を端し心を虛しうせずんば、爭でか如來の境界に到らん。誠に小緣に匪ず、容易を生ずること莫れ。」と。（孫仲益碑）

郭道人、世、鐵工たり、常に景德の忠禪師に參ず。忠曰く、「汝但だ其の重んずる所を去つて己を扣い

㊐方袍は角袖の着物、卽ち法衣をいふ。

て參せよ、辨せざることあること無けん。」忠、一日上堂す、善惡は浮雲の如し、起滅俱に處なしといふを擧す。郭、言下に於て忽然として心開く。是れより語を出すこと常に異なり、卒するに及んで親故に別る。趺坐して偈を說いて曰く、「六十三年鐵を打す、日夜扇㊇搖して歇まず、今朝鐵鎚を放下すれば、紅爐變じて白雪と成る。」（類說）

伊庵權禪師は臨安昌化の祁氏の子なり、幼にして莊重なり、嶷然として成人の如し。十四にして得度し、內外の學に通ず。無庵全禪師に依る。工を用ひること甚だ銳し。晚に至つては必ず淚を垂れて曰く、「今日も又、只麽に空しく過ぐ、未だ知らず來日の工夫如何ん」と。師、衆に在つて人と一詞を交へず、毅然として自ら處す。人能く親疎すること莫し。嘗て夜坐して旦に達る。粥を行く者至る、鉢を展ぶることを忘る。隣人手を以て之れに觸る。師、感悟して偈を作つて曰く、「黑漆の崑崙、釣竿を把る、古帆高く挂けて驚湍を下る、蘆花影裏明月を弄す。引き得たり盲龜の釣舡に上ることを。」無庵喜んで以爲らく、「己に類せり」と。㊁乾道の間、出でて萬年に應ず、宿學老師、其の威儀を見、其の擧揚を聽いて皆手を拱いて心醉す。內外萬指、㊂井井然として官府に入るが如し。師、至る所に行道して、衆と其の勢を同じうす。尙書尤公袤曰く、「住持は安坐演法す、何ぞ頭陀の行を躬らするに至るや。」師曰く、「然らず、末法の比丘、增上驕慢にして末得を得と謂ふて、便ち自ら恣にせんと欲す、我れ身を以て師ゆ、尙ほ恐らくは從はざらんことを。況んや敢て自ら逸せんをや」と。近世禪林の標準を言ふ者は、必ず師を以て稱首となす。（行狀）

㊇撥は搖の字の誤か。
㊁乾道は南宋の孝宗の年號、其元年は西紀一一六五。
㊂井井は往來連屬の貌、又經營綱整の貌。

東山の淵禪師、業履端潔にして叢林に聞ゆ。東山より遷つて五峯に至る、火箸を見るに東山に用ふる所の者と異なること無し。遂に其の奴を詰つて曰く、「是れ東山の方丈物なること莫しや。」奴曰く、「然り、彼此常住、利害なきが故に、將つて之に至る。」淵、之れを誡めて曰く、「汝が輩無知なり、安ぞ因果に互用の罪あることを識らんや」と。急に送り還さしむ。（怡雲錄）

別峯の印禪師、雪竇に住するの日、小師あり、頭首の過を訴ふ。峯、聲を厲して怒つて曰く、「汝は是れ我が小師、上下を包含するときは則ち可なり、反つて來りて人の過惡を說かんや、之れを左右に置かば必ず吾が事を破せん」と。遂に杖もて之れを逐ふ。聞く者歎じて曰く、「何ぞ其れ明なるや。」と。（少雲雜記）

淳禪師は劒州の人、丹霞に出世す。宏智、侍者たり。寮中に在つて僧と公案を徵詰して、宏智覺えず大笑す。適々丹霞、門に過れり。夜參に至つて問うて曰く、「汝早來大笑す、何の謂ぞ。」答へて曰く、「因に僧の話を詰るに、渠が答へ㊈太龐生、所以に發笑す。」淳曰く、「是は卽ち是、汝が笑ふ者一聲、多少の好事を失了す、道ふことを見ずや、暫時も在らざれば死人に如同すと。」宏智、敬拜服膺す。後暗室にありと雖も、未だ嘗て敢て忽にせず。（雪竇記）

㊈太龐生とは答へが餘りに龐雜な、あらつぽいといふこと。

成都の昭覺の祖首座、久しく圓悟に參ず。因に入室して卽心佛を問ふ、此れより省あり。圓悟、命じて分坐せしむ。一日、衆の爲に入室せしむ。禪者に問うて曰く、「生死到來如何んが回避せん。」僧、對ふるなし。祖、拂子を擲下して奄然として逝く、衆皆愕眙す。亟かに以て悟に聞す。悟、至つて呼んで曰く、「祖首座」と。祖、復た目を開く。悟曰く、「精神を抖擻して透關し去れ。」祖、復た點頭して竟爾として長逝す。（東林顏屯庵其の事を記す）

韓退之曰く、「且つ愈、釋氏を助けずして之れを排することは、其れ亦說あり」と。歐陽永叔に至つて曰く、「佛法、中國の患たること千餘歲、世の卓然として惑はずして力ある者、之れを去らんと欲せずと云ふこと莫し。已に嘗て去りぬ、而して復た大いに集まる。之れを攻むれば暫く破れて而も愈々堅し。之れを撲てば未だ滅せざるに而も愈々熾なり。遂に奈何ともすべきなきに至る」と。二りは皆其の儒道を壯にせんと欲して、之れを排し之れを破ると雖も、實に吾が釋氏の道を激揚す、何の害か之れあらん。（公論）

舒王、佛慧の泉禪師に問うて曰く、「禪家の所謂る世尊拈華、何れの ㋑典よりか出でたる。」泉云く、「藏經に載せざる所なり。」王云く、「頃ろ ㋒翰苑に在りて偶々大梵王問佛決疑經三卷を見る、因つて之れを閱するに、經中に載する所甚だ詳かなり。梵王、靈山會上に至つて金色の波羅華を以て佛に獻ず、身を捨てて牀坐と爲して佛を請じて群生の爲に說法せしむ。世尊、坐に登つて花を拈じて衆に示す。人天百萬悉く皆指くこと罔し。獨り迦葉のみ破顏微笑す。世尊云く、『吾れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に分付す』と。」泉、其の博究を嘆ず。（梅溪集）

㋑典は典據なり。
㋒翰苑は翰林に同じ、大學なり。

秦國夫人計氏法眞、因に寡處す、紛華を屏去して蔬食弊衣す。有爲の法を習ふて禪宗に於て未だ趨嚮あらず。因に徑山の大慧、謙禪者を遣はして問を致す。其の子魏公、浚公、謙を留めて祖道を以て其の母を誘く。眞一日謙に問うて曰く、「徑山和尙、尋常如何んが人の爲にする。」謙曰く、「和尙只だ人をして狗子無佛性を看せしむ。只だ是れ下語することを得ず、思量卜度することを得ず、只だ擧す、狗子に還つて佛性ありや也た無しや。州云く、『無』と。只だ恁麼に人をして看せしむ。」と、眞、遂に諦信して狗子の話を以て晝夜參究す。坐して中夜に至つて俄かに契ふことあり、連に數偈を作つて、大慧に呈す。其の後に云く、「終日經文を看るに、舊識の人に逢ふが如し。言ふこと莫れ頻りに該ありと、一擧すれば一回新なり。」（語錄）

神光は磁州の人、曠達の士なり、伊洛に居して博く群書を覽て、善く玄理を談ず。毎に默して曰く、「孔老の敎は禮術風規のみ。經論の詮は未だ妙理を盡さず。近ろ聞く、達磨大士、少林に住止すと。至人遙ならず、當に玄境に造るべし。」光、乃ち彼れに往いて晨夕參承す。大士唯だ端坐面壙す。師、誨を聞くこと莫し。光、自ら惟ふて曰く、「昔人の道を求むる、骨を敲き髓を取り、身を捨て、偈を求む。古すら尙ほ此くの若し、我れ又何人ぞ。」其の年十二月九日の夜、大いに雪ふる。光、庭中に立つ、

遲明ひ積雪膝を過ぐ。師、惘んで問うて曰く、「汝雪中に立つ、當に何事をか求む。」光、悲涙して曰く、「惟だ願くは慈悲、甘露門を開いて廣く ⑩群品を度したまへ。」師曰く、「諸佛無上の妙道は、積劫勤求して行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ、豈に小德小智輕心慢心を以て、眞乘を覬んと欲するや。」光、師の誨を聞いて潛かに利刀を取りて自ら左臂を斷じ、師の前に置く。師、是れ法器なることを知つて、乃ち曰く、「諸佛最初に道を求むるや、法の爲に軀を忘る、汝今臂を吾が前に斷つ、求むるも亦可なり。」と因つて與に名を易へて慧可と曰ふ。光曰く、「諸佛の法印得て聞くべきや。」師曰く、「諸佛の法印は人より得るに匪ず。」光曰く、「我が心未だ安んぜず、乞ふ師、安心せしめたまへ。」師曰く、「心を將ち來れ、汝が與に安せん。」光の曰く、「心を覓むるに了に不可得なり。」師曰く、「汝が與に安心し竟んぬ。」光卽ち契悟す。（傳燈）

永明の壽禪師、先は丹陽の人、父は王氏、兵寇に縻るに因つて、吳越に歸つて先鋒たり。遂に錢塘に居す。師生れて異才あり、❸周に及んで父母諍ふことあり、人諫むれども從はず、輒ち高榻に於て身を地に奮ふ。二親驚懼して抱泣して諍ひを息む。長じて儒生となる。年三十四にして龍冊寺に往いて出家受具す。後に苦行自厲す。唯だ一食す。朝は衆僧に供し、夜は禪法を習ふ。尋で台の天柱峯に往いて九旬習定す。尺鷃あり、衣裓に巢ふ。韶國師に謁するに暨んで、一見して深く之れを器とし、

⑩群品は衆生といふに同じ。
❸周は匝るなり、復るなり、一周年と云ふが如く、滿一歲の時を謂ふ歟。

密に玄旨を授く。仍つて師に謂つて曰く、「汝元師と緣あり、他日大に佛事を興さん。」と、初め明の資聖に住す、建隆元年に至つて忠懿王、請して靈隱の新寺に居らしむ。第一世となる。明年請じて永明の道場に居らしむ、衆二千に盈つ。皆頭陀の上行なり。僧とならんと願ふ者は、師卽ち王に奏して度牒を與へて剃染せしむ。因に僧問ふ、「如何なるか是れ永明の旨。」師、偈を示して曰く、「永明の旨を識らんと欲せば、西湖の一湖水、日出でて光明生ず、風來つて波浪起る。」又僧問ふ、「學人久しく永明にあり、甚となしてか永明の家風を會せざる。」師曰く、「不會の處に會取せよ。」僧云く、「不會の處如何んが會せん。」師曰く、「牛胎象子を生じ、碧海紅塵起る。」開寶七年、事を謝して華頂峯に歸る。頌に曰く、「渴しては半掬の水を飲み、飢ゑては一口の ⑪松を飡ふ。胷中一事なし、高臥す白雲峯。」偶華嚴を讀んで、「若し諸の菩薩大願を發せざれば、是れ菩薩の魔事なり」といふに至つて、遂に大乘悲智の願文を撰す。代りて群迷の爲に日に發くこと一徧、國淸にありて修懺す。中夜に至つて旋繞する次で、普賢の像前の供養の蓮華、忽然として手に在るを見る。是れより一生散華供養す。觀音大士、甘露を以て口を灌ぐことを感じ、大辯才を獲たり。宗鏡一百卷を著す。寂音曰く、「切に嘗て深く之れを觀るに、其の方等契經を出入馳騖するもの六十本、此方異域の聖賢の論を參錯通貫するもの三百家、天台、賢首を領略して而して深く唯識を談じ、率ね三宗の異義を拆いて要、一源に歸す。故に其の橫に疑難を生ずるときは卽ち深を釣り、遠を頤る。

⑪松は松子か、或は蘂か。

幽翳を剖發するときんば、偏邪を揮掃す。其の文、光明玲瓏として縱横放肆なり、自身成佛の宗を開曉して明かに西來無傳の的意を告ぐる所以なり。」禪師既に寂して叢林多く名を知らず。熙寧中、圓照禪師、始めて之れを出して普く大衆に告げて曰く、「昔菩薩、無師智、自然智を晦して專ら衆智を用て諸宗の講師に命じて自ら相攻難せしめ、獨り心宗の權衡を持つて、以て其の義を準平して之れをして折中せしむ。精妙の至、以て心を鏡みつべし。」と、是に於て衲子爭ふて之れを傳誦す。元祐の間、寶覺禪師、年臘高しと雖も、猶ほ手に卷を釋てず。曰く、「吾れ恨むらくは此の書を見ることの晚きことを。平生未だ見ざる所の文、功力の及ばざる所の義、備に其中に聚る。」と。因つて其要處を撮つて三卷となして之れを冥樞會要と謂ふ。世盛んに傳ふ。後世是の二大老なくんば叢林、宗尙する所なけん。舊學のものは日に以て懦惰にして口を絶つて言はず。晚至の者は日に以て窒塞して游談し、根なきのみ。何によりてか其書を知りて其義を講味せんや。脫し之れを知る者あるも、亦以て意とせず、以て祖師の敎外別傳、不立文字の法、豈に當に復た文字の中に刺首すべけんやと謂ふに過ぎず。彼れ獨り思はずや、達磨已前の馬鳴龍樹も亦祖師なることを。而して論を造るときんば、百本契經の義を兼ぬ。泛く觀るときは則ち龍宮の書を借り讀む。達磨より後れて興れる者、觀音、大寂、百丈、黃檗も亦祖師なり。然も皆三藏精微にして諸宗を該練す。今其の語具さに在り、取つて之れを觀るべし。何ぞ獨り達磨の言のみならんや。聖世逾々遠くして衆生根劣に、趣慮褊短にして道學苟簡なり、其從事する所、安坐して成ぜんと欲す。譬へば農夫の耕耘に惰りて涎を垂れて食を仰ぐが如し、笑ふべしと爲す。師、嘗て願に曰く、「普く願はくば十方の學士、一切の後賢、道富み身貧しく、情疎に、智密に、佛祖の心宗を闡揚して、人天の眼目を開鑿せんことを。」と。（寶錄等）

國譯人天寶鑑下　終

古の人は修心を以て要となす。心の正行は思言に越ゆること毋し。斯をもつて鳴道して夫の後進をして、其れを師模とすべからしめば、何の禪敎律儒釋道の異なりあらん。蓋し至公なるときんば、天下之れを共にす、四明の禪者秀公、志を此に篤うす。叢林を履歷して玄機綜覽す。聞見する所に隨つて、集めて此の書を成し、人天の眼目を闢く。因つて寶鑑を以て名づく。大圓覺に走つて之れを刊行せんことを求む。獨り先輩の幽德潛光を發明するのみに非ず、將に同志と力めて此の道を追はんとす。予、其の說を嘉して遂に其の後に跋すと云ふ。時紹定庚寅❼自恣前一日、古岑比丘師贊萬壽の歸雲堂に書す。

❼自恣の日は安居の竟りの日、卽ち正しくは七月十六日、但し十四、五、六の三日に行ふを許す、是れは僧衆に向つて慈誨を請ふことにして、卽ち一夏九旬の間は、道を修し身心を精練すとのみ思ふて、己に迷ひ自ら我が身の過は見えず、必ず目に餘ること多かるべし、願くは寃愆を垂れて我が過失を告げ給へと、僧衆の我が過を擧ぐるを恣にするが自恣の義なり、これ內に私隱なく、外に瑕疵あることを彰はして、身口を他に托するを云ふ、此の日は我が儘をする日といふに非ず、之を行するには嚴格なる作法あり。

秀書記、古を集めて書を成す、人天寶鑑と曰ふ。着語を請ふ、遂に一轉語を下して云く、先德情に知る、已に厚顏なることを。那ぞ堪へん、井に落ちて更に欄を攀づるに、本來一點明月の如し。胡漢何ぞ曾て自ら照看せん。紹定庚寅中秋、靈隱に住する妙堪書す。

人天寶鑑序

是集皆佛氏妙藥、救世之書也、能令病者服之卽愈、至有盲聾喑跛之徒、亦得除瘥、四明道人秀公、久歷湖海、此藥備嘗、無不應驗、宜乎、刊行以壽後世、故余樂爲之序、紹定庚寅六月望日、蘭庭劉棐。

人天寶鑑序

竊聞先德、有善不能昭於世者、後學之過也、如三教古德於佛法中有一言一行、雖載之碑傳實錄及諸遺編而散在四方、不能周知徧覽、於是潛德或幾無聞、愚嘗出處叢林、或得之尊宿提倡、或訪求採摭、凡可以激發志氣、垂鑑於世者、輒隨而錄之、總數百段、目曰人天寶鑑、不復銓束人品、條次先後、擬大慧正法眼藏之類、且昔之禪者、未始不以教律爲務、宗教律者、未始不以禪爲務、至於儒老家學者、亦未始不相得而徹證之、非如今日專一門、擅一美、互相詆訾、如水火不相入、噫古者之行、非難行也、人自菲薄以謂、古人不可及爾、殊不知古人猶今之人也、能自奮志於其間、則與古人何別、今刊其書、廣其說、欲示後世學者、知有前輩典刑、咸至于道而已、高明毋誚焉、紹定三年結制日、四明沙門曇秀序、

人天寶鑑上

唐德宗問曇光法師曰、僧何名爲寶、對曰、僧者具有六種、以寶稱之、一頓悟自心、超凡入聖、得名禪僧、二解行雙運、不入世流、得名高僧、三具戒定慧、有大辯才、得名講僧、四見聞深實、舉古驗今、得名文章僧、五知因識果、慈威並行、得名主事僧、六精勤功業、長養聖胎、得名常僧、帝大悅、遂詔天下度僧、唐僧傳。

大善禪師南岳高弟也、修法華禪門、得慈悲三昧、時衡陽內史鄭僧杲、雖每遇縣令陳正業稱揚師德、而鄭略無信向意、一日同陳出獵圍鹿一群、鄭謂陳曰、公嘗稱大善禪師有慈悲三昧力、今日其鹿如何、陳卽率左右數人同聲念曰、南無大善禪師、卽時群鹿騰空而出、於是內史媿伏。國清石刻。

左溪尊者諱玄朗、烏傷人、從學天宮威法師、得旨後栖身巖谷、或猿猱來以捧鉢、或飛鳥至以聽經、唯十八種十二頭陀、如是處者三十年、若其細行修身、悉徇律制、故李華云、禪無私授、不見身相、戒淨無玷、不假外儀、講不待衆、誨人無勸、居止偏厦、食無重味、夜非披尋聖典、未嘗空秉一燈、日非瞻禮聖容、未嘗虛行一步、一鬱多羅四十餘年、一尼師壇終身不易、未嘗因利說一句法、未嘗爲法受一毫財。本傳。

五臺山無相禪師、禮佛示衆曰、汝輩才見泥像、便如舂米相似、曾無意謂、殊不知己躬分上、各

各有一尊虛空來、大小古釋迦古觀音、日夜在汝六根門頭放光動地、四威儀內同出同入、未嘗纖毫相離、何不學禮取者箇佛、却去泥團上作活計、汝若禮得者箇佛、卽是禮汝自心、汝雖是顚倒妄想之心、從本已來直至今日、廣大清淨、迷未嘗迷、悟未嘗悟、與佛如來更無欠少、只爲汝貪著緣境、所以有生有滅有迷有悟、若能一念回光便乃卽同諸聖、故云、佛在爾心頭、時人向外求、內懷無價寶、不識一生休、又不見華嚴遂法師道、我會得卽心自性、如今凡修行動靜、無不與稱自性底、道理相應故、我終日禮佛不作禮會、終日念佛不作念會、且道、華嚴作甚麼會者箇、恰如善財入毗盧樓閣、證不思議自在境界、相似、末後却道、我歷一百一十城參五十三善知識、見種種境界、聞種種法門、皆無有實、譬如有人於睡夢中、見種種事、從睡覺已、乃知是夢、諸禪德、善財雖向夢裏認得箇昭昭靈靈、依然落在陰界、若是頂門具眼、肘後有符、釋迦彌勒是乾屎橛、文殊普賢是博地凡夫、眞如涅槃是繫驢橛、一大藏敎是拭瘡疣紙、有甚樓閣可入境界可證、其或未能如是、且向他夢裏禮取一拜半拜、通行錄。

天台韶國師、處之龍泉人、受具後剋意咨參、殊無所入、至曹山隨衆而已、因僧問法眼曰、十二時中如何得頓息萬緣去、法眼曰、空與汝爲緣邪、色與汝爲緣邪、言空爲緣則空本無緣、言色爲緣則色心不二、日用果何物爲汝緣乎、韶聞悚然有省、復有禪者問如何是曹源一滴水、法眼曰、是曹源一滴水、韶聞大悟、法眼曰、汝當大闡吾宗、毋滯於此、遂遊天台、瞻然有終焉之意、時吳越忠懿王、以國子刺台州、雅聞師名、嘗遣使迎之、申弟子禮、王一夕夢、被人斷頸、驚疑不釋、遂決於韶、韶曰、非常夢也、主字去却一點、不久爲王矣、王曰、若果符此、無忘佛恩、漢乾祐元年、王嗣國位、尊韶爲國師、時天台智者敎法、自會昌之變、碩德隱耀、所有法藏多流海東、螺溪寂法師痛將蔑聞、力網羅之、先於金華藏中、僅得淨名一疏而已、後因忠懿王覽內典、昧敎相、請扣於韶、韶稱、寂洞明天台之道、遂召寂建講、王乃喜特遣十使、航海傳寫以還、由是敎法復振、殆今不墜者、韶寂二師之力也、開寶四年六月二十八日、順寂于華頂峯、是夜星隕于地、天降大雪、師之涅槃異相難以盡紀、具如燈禪師行業等記。

智者顗禪師示衆曰、同學照禪師、在南岳衆中、苦行禪定、最爲第一、輒用衆一撮鹽、作齋飲用、所侵無幾、不以爲事、後行方等忽見相起、計三年增之、至數十斛、急令陪備、仍賣衣資、買鹽償衆、此事非久、亦非傳聞、宜以爲規、莫令後悔、吾雖寡德行、遠近頗相追尋、而隔剡嶺、難爲徒步、老病出入、多以衆驢迎送、若是吾客、私計功酬直、令彼此無咎、吾是衆主、驢亦我得、既捨入衆、非復我有、我不合用、非我何言、擧此一條、餘事皆爾。國淸百錄。

兜率梧律師、從學普寧律師、持己精嚴、日中一食、禮誦不輟、後住兜率、嘗問道徑山琳禪師、琳見其著心持戒、不通理道、因戲謂曰、公被律縛、無氣急乎、梧曰、根識暗鈍、不得不縛、望師憫而示之、琳擧婆修盤頭、嘗一食不臥、六時禮佛、淸淨無染、爲衆所歸、二十祖圖夜多、將欲度之、問其徒曰、此頭陀精修梵行、可得佛乎、其徒曰、精進如此、何故不可、夜多曰、汝師與道遠矣、縱經塵劫、皆虛妄之本、其徒不憤、謂夜多曰、尊者蘊何德行、而譏我師、夜多曰、我不求道、亦不顚倒、我不禮佛、亦不輕慢、我不長坐、亦不懈怠、我不一食、亦不雜食、我不知足、亦不貪慾、心無所之、名之曰道、婆修聞已、獲無漏智、琳遂厲聲喝一喝云、直饒與麼、猶是鈍漢、梧於言下心意豁然、

喜躍而拜曰、不聞師誨、爭解知非、今當持而不持、持無作戒、更不消著心力也、辭行、回至丈室、屏去舊習、獨一禪牀、講倡之外默坐而已、俄一夕召明靜法師至曰、擇梧得徑山打破情執、至今無一點事在胸中、今夜欲入無聲三昧去也、由是寂然竟爾長寢。通行錄。

眞宗、嘗欲廢太平興國寺爲倉、詔下之日、有僧唐突以謂不可廢、　上遣中使諭旨曰、不聽廢寺即斬、仍以劍示之、祝曰、僧見劍怖懼即斬、不然即赦之、中使如所誡、僧笑引頸曰、爲佛法死、實甘餂之、　上悅寺遂免。韓子蒼曰、今時有如是僧、乃可稱衲子。石門集。

法昌遇禪師、臨漳高亭人、幼棄家、有大志、遊方名著叢席、浮山遠公指謂人曰、此後學行脚樣子、晚於分寧之北、千峰萬壑、古屋敗垣、遇安止之、衲子時有至者、皆苦其作勞、未嘗有一語委曲以示、其徒、學者不能曉其意、又不能與之同憺泊辛苦、悉皆引去、以故單丁住山、而晨香夕燈、陞堂說法、至老不廢、叢林所服玩者、無不備、龍圖徐禧歎曰、無衆如有衆、眞本色住山、將化前一日、偶作偈遣曰、今年七十七、出行須擇日、昨夜報龜哥、報道明朝吉、徐覽偈聳然邀靈源同往、至彼已寂然矣。江集。

法智尊者諱知禮、年至四十、常坐不臥、足無外涉、修謁都遣、一日謂諸徒曰、半偈忘軀、一句投火、聖人之心爲法如是、吾不能捐捨身命、以警發懈怠、胡足言哉、於是結十僧、修法華三昧、期滿三載、共焚其身、時翰林楊億、致書確請住世、復以欣厭意而與難問、尊者答曰、終日破相而諸法皆成、終日立法而纖塵必盡、楊公復致問曰、風吟寶樹、波動金渠、是何人境界、答曰、只此見聞更無道理、公又問、法華梵網皆魔王所說、答曰、佛之與魔相去幾何、公知不可以義屈、亦不可以言留、乃致書慈雲、俾自杭至明面沮其議、又委州將保護、無容以焚、是年公請師號於朝、　眞宗召楊問之、公因奏師遺身事、　上嘉歎之、重諭楊曰、但傳朕意、請留住世、即賜法智之號、由是願行不得施矣、復修光明懺爲順寂之期、方五日趺坐召衆曰、人之生必有死、蓋常分爾、汝等當勤修道、勿令有間、從吾之訓、猶吾之生也、言畢稱佛而逝。教行錄等。

圓通訥禪師、梓州人、性端靖澄、衆有法律、己精嚴、夜必入定、初叉手自如、中夜漸昇至膺、侍者每眂此、以候天明、　仁宗聞其名、詔住淨因、訥以疾辭舉璉以自代、召對大悅、賜大覺禪師、至英宗、嘗賜手詔、天下寺院任性住持、璉不言、鮮有知者、及東坡制宸奎閣記、移書審之云、宸奎閣碑、謹已撰成、衰朽廢學、不知堪上石否、見參寥說、禪師出京日、　英廟賜手詔、其略曰、任性住持者、不知果是否、切請錄示全文、欲入此一節、璉答云、無、及寂乃得於書笥中、坡聞云、非得道之士、安得有此蘊藉、坡閣記云、師雖出世度人、而持律甚嚴、　上賜龍腦鉢、師對使者焚之曰、吾法以壞色衣、以瓦鉢食、此鉢非法、使者歸奏、　上嘉歎久之、師居所服玩、可以化寶坊也、而皆不爲、獨於都城之西、爲精舍、容百許人而已。

梁武帝問誌公曰、朕萬機之暇、修諸善事、還有功德也無、誌曰、有即有、非眞功德、帝曰、何謂其眞、誌曰、性淨明心體自空寂、是眞功德、帝因有省、故先聖有言、若能靜坐一須臾、勝造河沙七寶塔、寶塔畢竟化爲塵、一念淨心成正覺。通行錄。

眞人孫思邈、京兆人、幼聰慧、日誦萬言、善莊老、尤篤志釋典、年百五十歲、嘗隱終南山、不食飲食、唯服鉛汞、與宣律師友善、議論終日、嘗書華嚴經、時唐太宗、欲讀佛經、問邈曰、何經爲大、答

曰、華嚴經佛所尊大、帝曰、近玄奘三藏、譯大般若六百卷、何不爲大而八十卷者猶爲大乎、答曰、華嚴法界具一切門、於一門中可演出大千經卷、般若經乃是華嚴一門耳、帝悟、從是受持。

釋氏類說。

侍郎楊億、書寄李維內翰、其畧曰、假守南昌、適會廣慧禪伯、齋中務簡退食多暇、或坐邀而至、或命駕從之、請扣無方蒙滯頓釋、半歲之後曠然弗疑、如忘忽記、如睡忽覺、平昔碍膺之物曝然自落、積劫未明之事燿爾見前、固亦決擇之洞分、應接之無窒矣、重念先德率多參尋、如雪峰九度上洞山、三度上投子、遂嗣德山、臨濟得法於大愚、終承黃檗、雲巖多蒙道吾訓誘、乃爲藥山之子、丹霞親承馬祖印可、而作石頭之裔、在古多有、於理無嫌、病夫今繼紹之緣、實屬於廣慧、提激之自、良出於龜峯也、忻幸、因僧談道、侍郎遂云、大凡參學人、十二時中長須照顧、不見說禪道時、便有箇照帶底道理、日用作務時、不可便無也、如鷄抱卵、若是拋離起去、暖氣不接、便不成種子、如今萬境森羅六根煩動、略失照顧、便喪身命、不是小事、今來受此緣生、被生死繫縛、蓋爲塵劫已來順生滅心、隨他流轉以至如今、諸人等且道、若曾喪失、何以得至如今、要識露地白牛麼、試把鼻孔拽看、又云、釋迦老子於靈山會上、目顧迦葉、謂大衆曰、吾有正法眼、分付摩訶迦葉、又道、我於四十九年中、不曾說一字、此是什麼道理、若是諸人分上、著一字脚不得、爲諸人各各有奇特事在、喚作奇特早是不中也、我道、釋迦是敗軍之將、迦葉是喪身失命底人、汝等且怎生會、不見道涅槃生死俱是夢言、佛與衆生並爲增語、直須恁麼會取、不要向外馳求、若也於此未明、敢道、諸人乖張不少、侍郎臨終前一日、親寫一偈與家人、令來日送達、李駙馬處、偈曰、漚生與漚滅、二法本來齊、欲識眞歸處、趙州東院西、駙馬接得偈云、泰山廟裏賣紙錢、天聖廣燈。

張文定公、前身爲琅邪知藏僧、書楞伽末終而卒、誓云、來生當再書、後知滁州、遊琅邪山、周行廊廡、殊不忍去、氏藏院忽感悟、指梁間經函云、此吾前身事也、令取而眡之、乃楞伽經、與今生所書筆畫無異、嘗讀至世間離生滅猶如虛空華、智不得有無而與大悲心、遂明己見、偈曰、一念存生滅、千機縛有無、神鋒輕擧處、透出走盤珠、暮年出此經示東坡居士、仍以其事語之、坡題其後刻石金山。

頎禪師秦之龍城人、初得法於天聖泰和尚、晚依黃龍南禪師、南見其所得諦當、甚遇之、令住全之興國、開堂遂爲南之嗣、至夜夢神告曰、師遇惡疾、卽是緣盡、言畢而隱、閱十三白果患大風、屏院事歸龍城之西、爲小庵、庵成養病其中、頎有小師名克慈、久依楊岐、亦禪林秀出者、歸以侍病奉禮至孝、乞食村落、風雨寒暑盡師一世、而後已、頎一日謂慈曰、吾之所得實在天聖和尚、晚見黃龍道行兼重、心所敬慕、故爲嗣之、豈謂半生感此惡疾、今幸償足、昔神仙多因惡疾而得仙道、蓋其割棄塵累、懷潁陽之風、所以因禍而致福也、吾不因此爭得、有今日事、如今把住也由我、放行也由我、把住放行總得自在、遂噓一聲良久而逝、闍維異香徧野、舍利無數。

舟峯錄。

希顏首座字聖徒、性剛果、通內外學、以風節自持、遊歷罷歸隱故廬、跡不入俗、常閉門宴坐、非行誼高潔者莫與友也、名公貴人累以諸刹招之堅不答、時有童行名參已、欲爲僧侍左右、顏

識其非器作釋難文以却之曰知子莫若父知父莫若子若予之參已非爲僧器蓋出家爲僧豈細事乎非求安逸也非求溫飽也非求蝸角利名也爲生死也爲衆生也爲斷煩惱出三界海續佛慧命也去聖時遙佛法大壞汝敢妄爲爾寶梁經曰比丘不修比丘法大千無唾處通慧錄曰爲僧不預十科事佛徒勞百載爲之不難得乎以是觀之予濫厠僧倫有詒於佛況汝爲之邪然出家爲僧苟不知三乘十二分教周公孔子之道不明因果不達己性不知稼穡艱難不念信施難消徒飲酒食肉破齋犯戒行商坐賈偸姦博弈覬覦院舍車蓋出入奉養一己而已悲夫有六尺之身而無智慧佛謂之癡僧有三寸舌而不能說法佛謂之啞羊似僧非僧似俗非俗佛謂之鳥鼠僧亦曰禿居士楞嚴故曰云何賊人假我衣服裨販如來造種種業非濟世舟航也地獄種子爾縱饒彌勒下生出得頭來身已陷鐵圍百刑之痛非一朝一夕也若今爲之者或百或千至于萬計形服而已篤論其中何有哉所謂鷙翰而鳳鳴也碌碌之石非玉也蕭歟艾榮非雪山忍草也國家度僧本爲祈福今反責以丁錢示民於僧不然使吾徒不足待之之至也只如前日育王璉永安嵩龍井淨靈芝照一狐之裘自餘千羊之皮何足道哉於戲佛海稊滓未有今日之甚也可與智者道難與俗人言

梵法主嘉禾人棄家謁神悟法師梵解行兼備爲法檀度晚住北禪嘗乞食於市或告止之梵曰先佛遺規末世當行非諺事也梵持身御衆悉有律度故其法席典刑冠於西浙嘗訓其徒曰十二時中四威儀內皆有受用法門若不研心體究如說而行舉動皆成魔業且展鉢時曠野鬼神嘗受飢虛聞比丘擊鉢聲益增飢火其苦愈重故佛有誡須令身心寂靜然後受食施之故清規有棄鉢水祝祝曰唵摩休羅細娑訶百丈單傳心印者猶徇細行況吾祖兼善毗尼之教者乎汝澡浴時尤不可忽昔有比丘因浴戲笑不修正念後感沸湯相潑之報故先聖令系心觀察常發願語我今澡浴身體當願衆生身心無垢內外光潔舉此二條餘事皆爾汝等日用得不兢兢業業退步省思善用心矣。通行錄。

慈雲式法師云予與四明法智爲友四十餘年及終不得一哭於寢門之下嗟嘆之不足乃詠歌之句云天上無雙月人間只一僧覽者無謂吾厚於所知薄於所不知但見其解行有卓卓出人之異寄極言以暢所懷異者何也一家教部毗陵師所未記者悉記之四三昧人所難行者悉行之雖寒暑相代脇不至席六十有九而終其疾且頓而行道講訓無所間然門徒請宴不從及死舍利莫知其幾噫非知之難行之爲難也。

龍湖開禪師唐僖宗太子眉目風骨清眞如畫僖宗鍾愛之然以其無經世意百計陶寫終不回唯慕霜華之風夢寐想見中和元年天下大亂遂斷髮逸遊人無知者造石霜諸禪師諸與語嘆曰汝乘願力生帝王家脫身從我眞火中芙蕖至夜聞入室懇曰祖師別傳事肯以相付乎諸曰勿謗祖師聞曰天下宗旨盛大豈妄爲之邪諸曰待按山點頭即向汝道聞即日辭去至邵武城外見山鬱然深秀遂撥草而進見一苦行隱其中欣然讓其廬曰上人當興此長揖而去不知所之聞遂憩止十餘年一日有老人謁曰我非人龍也以行雨不職上天有罰賴道力可脫於是化爲小蛇緣入袖中至夜風雷挾坐榻山岳震搖而聞危坐自若平明開霽蛇墮地而去頃有老人謝曰非大士之力爲血腥穢此山矣念無以報厚德當穴巖下爲泉他日衆

多乏水、今所以延師也、泉今爲湖、因以名焉。寺記碑。

仗錫已禪師與浮山遠公遊、嘗卓庵廬山佛手巖、後至四明山心、獨居十餘載、虎豹在前、以定力、故曾無懼色、嘗曰、羊腸鳥道無人到、寂寞雲中一箇人、爾後道俗聞風而慕、住山四十餘年、翛然無毫髮之儲、冬夏一布衲、唯以創業爲任、經營積累作成禪林、凡衆之宜、有者大備之、獨不營丈室、而與衆共處、蓋師不以私室宴安爲意也、有知事蘊躬、伺師遠出、潛爲建之、達觀頴禪師、時主雪竇、聞之嘆曰、若非本色宗匠、不能有其良輔、非良輔、無以尊道師之德、爾。仗錫達觀碑。

辯才淨法師杭之於潛人、生而左肩肉起如袈裟條、八十一日乃滅、父嘆曰、是宿世沙門、無奪其願、長當事佛、及師之終、實八十有一、殆其筭也、出家後、凡見法坐、嘆曰、吾願登此說法度人、首謁慈雲、日夜勤力學與行進、不數年、齒其高弟、慈雲沒、復事明智韶、韶講止觀、至方便五緣、曰、淨名所謂以一食施一切、供養諸佛及衆賢聖、然後可食、師聞之悟曰、今日乃知色聲香味、本具第一義諦、由此遇物中無疑矣、時沈公叔才治杭、以謂、觀音道場講懺爲佛事、非禪那所居、乃命師以教易禪、師至、吳越人歸之如佛出世、事之如養父母、金帛之施不求而至、居天竺一十四年、有利其富者、迫而逐之、師欣然舍去、不以爲恨、天竺之衆分散四去、事聞於朝、明年使復其舊、師黽勉而還、如不得已、衆復大集、清獻趙公與師爲世外友、見之而讚曰、師去天竺、山空鬼哭、天竺師歸、道場光輝、復留二年、一日告衆曰、吾祖智者聖人也、猶以急於化人害於己行、位本鐵輪而證止五品、況吾凡夫也哉、謝去老於南山龍井之上、以茅竹自覆、閉門宴坐、寂然終日、葉落根榮如冬枯木、風正波定如古澗水、故人以訥名之、師嚴於持律、講說不擇晝夜、嘗曰、鬼神威德不具畏人、晝說或不得至、此夜人靜庶幾能聽、嘗焚指供佛、左三右二、僅能以執、其徒有欲效者、輒禁之曰、如我乃可、東坡一日謂曰、北山如師道行者有幾、師曰、僧人密行者多、非元淨所能測之。龍井雜碑。

芙蓉楷禪師示衆曰、山僧行業無取、忝主山門、今欲略敎古人爲住持體例、共報佛恩、與諸人議定、更不下山、不赴齋、不發化主、唯將本院莊課一歲所得、均作三百六十分、日取一分用之、更不隨人增減、可以備飯則作飯、作飯不足則作粥、作粥不足則作米湯、新到相見茶湯而已、務要省緣專一辨道、雖然如是、更在諸人從長相度、山僧也强敎爾不得、諸仁者還見古人偈麼、山田脫粟飯、野菜淡黃齏、喫則從君喫、不喫任東西。語錄。

智者顗禪師示衆舉古德住山、每令執爨者養粥、一日爨者觀火燒薪、念念就盡、無常遷逝、復速於是、卽於竈前寂然入定、數日方起、往上座所具陳所證、叙法轉深、上座曰、汝前所言、皆我境界、今所說者非我所知、勿復言也、遂問、汝得宿命否、答曰、薄知、又問、何罪爲賤、何福致悟、答曰、往世曾住此山、因有客至、侵衆少菜、由此譴責、今爲衆奴、前習未忘、故易悟。爾國清百錄。

大智律師比丘正名曰、梵語苾芻、華言乞士、內則乞法以沽性、外則乞食以資身、父母人之至親、最先割捨、鬚髮人之所重、盡以削除、富溢七珍、棄之尤同草芥、貴尊一品、祇之何啻煙雲、極厭無常、深窮有本、欲高其志、必降其身、執錫有類於枯槁、擎鉢何殊於破器、肩披壞服、卽是弊袍、肘串絡囊、便同席袋、清淨活命已沽、八正道中、儉約修身卽類四依、行內、九州四海都爲遊

處之方、樹下塚間悉是栖遲之處、攀三乘之逸駕、蹈諸佛之遺蹤、禀聖教以無違、眞佛弟子、遇世緣而不易、實大丈夫、可以戰退魔軍、揮開塵網、受萬金之勝供、諒亦堪銷、爲四生之福田、信非虛託、乞士之義斯之謂歟。芝園集。

靈源清禪師門牓其略曰、惟清名曰住持、實同客寄、但以領徒弘法、仰助教風、爲職事爾、若其常住所管財物、既非己有、理不得專、一委知事僧徒分局主執、明依公私、合用支破、惟清止同衆僧齋褪、隨身餅鉢任緣去住而已、伏想、四方君子、來有所須、顧寢食祇接之、餘別難供應、蓋以彼所管者、世法則屬官物、佛敎則爲衆財、偷衆財、盜官物、以買悅人情、而取安己有、實非素志之所敢當、預具白聞、冀垂恕察。石刻在天童。

侍郎張九成居士、蚤業進士之暇、篤志釋典、謁靈隱明禪師、扣宗要、明曰、正當磨礱器業、奮發功名、詎能究死生事乎、公曰、先儒有言、朝聞道、夕死可矣、然世出世之法、初無有二、先朝名公、由禪門得道者、不知其幾、曾何儒釋之異、師既爲斯道主盟、安用設詞拒我邪、明嘉其誠勉、應之曰、此事須念念不捨、久久緣熟、時節到來、自然契悟、復令看僧問趙州、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、久無所入、謁胡文定公、咨盡心行己之道、胡告以將語孟談仁義處、類作一處看、則要在其中、公禀受其語、造次不忘、一夕如厠、諦思惻隱之心仁之端也、正沉默間、忽聞蛙鳴、不覺擧庭前柏樹子、驀有省、頌曰、春天夜月一聲蛙、撞破虛空共一家、正恁麼時誰會得、嶺頭脚痛有玄沙、公偶見妙喜題像云、黑漆龐竹篦、佛來也一棒、由是願見甚力、公尋還朝、遷至禮部侍郎、聞妙喜入城、謁之不値、妙喜報謁、寒溫外無別言、歸謂參徒曰、張侍郎有箇得處、其徒曰、聞相見不曾說著禪字、胡爲知之、妙喜曰、要我眼作甚麼、公奉祠得請、詣徑山問格物之旨、妙喜曰、公只知有格物、而不知物格、公罔措、徐曰、豈無方便、妙喜曰、不見小說載、唐人與安祿謀爲叛者、其人先爲閫守、有畫像在焉、明皇幸蜀、見之怒令侍臣以劍擊其首、其人在陝西首忽墮地、公聞之恍如夢覺、題于壁曰、子韶格物、妙喜物格、欲識一貫、兩箇五百、公從是參道、得法自在、曠然無惑、嘗感歎曰、凡聞徑山老人所擧因緣、無不豁然四達、如千門萬戶不消一踏、而開、或與之聯與接席、登高山之上、或緩步徐行深水之中、非出常情之流、莫能知吾二人落處、九成了末後大事、實出徑山老人、而此瓣香不敢孤負、公貶南安一十四年、繙釋典、解儒書、至有衲子經過、必勘驗爲禪悅之樂、未嘗以得失芥蔕、而識者莫不高其風、服其達、公有書答中丞何伯壽、略曰、九成與徑山往還太熟、抑亦有由、按諸故事、裴公休乎師黃檗、韓退之之師大顚、李習之之師藥山、白樂天之師鳥窠、楊大年之師廣惠、李和文之師照慈、東坡之師照覺、山谷之師晦堂、無盡之師兜率、抑豈與夫老嫗頭陁念南無洗厠籌等邪、徑山心地一死生窮物理、至於倜儻好義、有士夫難及者、天日在上、安可誣也、若好交名士、欲以吾儕取重於世者、此盜賊之所爲爾、而謂斯人爲之乎、既蒙警誨、自當禀承、蓄疑于心、非平昔受知門下、輙倒胷中、盡布左右、惟高明察之、公北還、至贛州、妙喜亦從梅陽來、聯舟東下、妙喜日提宗要、公退謂諸參徒曰、今日不是九成、老和尙安肯傾倒禪河、使諸公得與聞乎、公鎭永嘉、虛光孝禪席、以函翰至福唐西禪淨禪師曰、佛法離披久矣、自徑山老人移嶺外、學徒無歸、今朝廷清明老人比還、是有興隆之期、而九成於此道實曾撞著、故於此間欲求一二明公、大家擧倡以警。

昏鬢、正欲吾師慧然當吾之請、或以謂西禪厚光孝薄、淨必不來、爲此說者、是以俗情待左右矣、然吾以此卜佛法興替、如吾師有意與之、大家出半臂力、不勝幸甚、公之推誠衞法、備見於此。聞道傳。

和庵主姑蘇人也、性高潔、與世邈然、嘗遊湖湘、夜宿旦過、時交禪師亦預席、和見其沈厚不語終夜危坐、心奇之、和顧問曰、子萬里殊途、何孤飛邪、交曰、昔有一二、今絕之、和曰、何爲絕之、交曰、一者以拾遺之金施於衆、予曰、學道人眡此當如糞土、則可、子雖拾以施人、是未忘利、二者有母貧病、棄之而學道、予曰、學道雖超過佛祖、不孝亦奚爲哉、不孝爲利者皆非吾友也、和敬其賢、遂與之遊、和誓曰、我二人効隱山輩、向孤峯頂上、盤結草庵、目視雲漢、爲世外之人、毋墮流俗、交遂爽盟、住天童、往訪之、和不顧、正言陳叔異、闢書堂爲庵、獨居二十年、翛然無長物、唯二虎侍右、嘗有言曰、竹篦二三升野水、牕間七五片閑雲、道人活計只如此、留與人間作見聞。雪牕記。

曹山章禪師泉州人、得祕旨於洞山价和尚、初受請止撫之曹山、道法大振、學者雲委、僧問、國內按劍者是誰、山云、曹山、僧云、擬殺何人、山曰、但有一切總殺、曰、忽逢本父母作麼生、山曰、揀甚麼、曰、爭奈自己何、山曰、誰奈我何、曰、爲什麼不殺、曰、勿下手處、復有紙衣道者、自洞山來、章問、如何是紙衣下事、曰、一裘才挂體、萬事悉皆如、章曰、如何是紙衣下用、道者近前叉手脫去、章笑曰、汝只解恁麼去、且不解恁麼來、僧忽開眼曰、一靈眞性不假胞胎、時如何、章曰、未是妙、僧曰、如何是妙、曰、不借借其僧下堂中而化、時洪州鍾氏屢請不起、但書大梅山居一首答之、

天復辛酉季夏夜、問知事、今日是幾、對曰、六月十五、章曰、平生行脚、只管九十日爲一夏、明日辰時吾行脚矣、及時焚香告寂。僧寶傳。

法雲秀禪師秦州人、前生與魯和尚厚善、一日謂曰、我死後相尋我於竹鋪坡前、其家生兒、魯往視之、兒爲一笑、三歲願隨魯出家、生有異相、軒昂萬僧中、凜然如畫、嘗以怒罵爲佛事、時司馬溫公方登庸、以吾法太盛、欲經營之、秀曰、相公聰明人類英傑、非從佛法中來、何由致此、而一旦遽忘佛囑乎、公意回、又李伯時、工畫馬、不減韓幹、秀呵之曰、汝士大夫、以畫名、況畫馬乎、期人誇以爲得妙、他日妙入馬腹中矣、伯時於是絕筆、又魯直好作艷詞、人爭傳之、秀曰、翰墨之妙、甘施於此、魯直笑曰、又當置我於馬腹中邪、秀曰、汝以艷語淫動天下人心、不止馬腹、正恐墮泥梨中。語錄。

孤山圓法師以奇才奧學、翼贊經論、盈於千萬、高臥西湖之濱、權勢不得屈、貴驕不得傲、世俗不得友、是時文穆王公至錢唐郡、僧悉迎關外、慈雲遣邀孤山同往、圓以疾辭、笑謂使者曰、爲我致意慈雲、錢唐駐却一僧子、聞者歎美、圓每多脾疾、牀上敷筆硯、半起半臥著述不倦、一日告衆曰、吾年四十有九、已知住世不久、若死毋擇地厚葬以加罪我也、汝宜陶器合而葬之、及終自屬祭語云、謹以湖山雲月之奠、祭于中庸子之靈、汝本法界之元常兮、寶圓之妙性兮、尙無動靜之朕兮、豈有去來之跡兮、洎乎七竅鑿而混沌死兮、六根分而精明散兮、遂使汝見自心、而與外境異兮、執生存與死滅兩兮、擾擾乎不可止也、昏昏乎不可照也、吾嘗欲復混沌歸精明兮、乃於非幻法中、假作幻說、且非幻尙無、幻法豈有哉、汝中庸子亦以徵領其旨、汝既受

於幻生、必當受幻死、故吾託幻軀有幻病、口占幻詞、使幻弟子執幻筆成幻文、以預祭汝幻中庸子、且欲令無窮人知諸法如幻也、夫如是則如幻三昧在焉、嗚呼三昧亦幻也、尙享、趺坐而逝。閑居編。

東坡曰、先妣方娠、夢僧至門、瘠而眇、軾十餘歲時時夢、身是僧、又子由與眞淨文、壽聖聰二師、在高安夜間同叙、見戒禪師之夢、則戒之後身無疑、坡與眞淨書曰、前生既是法契、願痛加磨勵、使還舊觀、坡往金山値佛印入室、印云、者裏無端明坐處、坡云、借師四大作禪牀、印云、老僧有一問、若答得、卽與四大爲禪牀、若答不得、請留下玉帶、坡卽解腰間玉帶、置案上、云、請師問、印云、老僧四大本空、五陰非有、端明向甚處坐、坡無語、印召侍者、留下玉帶、永鎭山門、印以衲裙酬之、坡賦二絕句云、病骨難堪玉帶圍、鈍根仍落箭鋒機、會當乞食歌婢院、乞食閤房中。裴相國衣衲裙換得雲山舊衲衣、又曰、此帶閱人如傳舍、流傳到我亦悠哉、錦袍錯落渾相稱、乞與徉狂老萬回。唐則天賜錦袍玉帶、與萬回和尙、出注坡詩。

奘三藏法師、年二十七往西域求法、自秦蘭涼三州、而行至瓜州、出玉門關、關外有候望者居之、漸至沙河、惡鬼異類不可勝數、始念觀音、猶未遠去、及誦心經、發聲皆散、至兢伽河畔、遇群賊、賊相謂曰、此沙門形貌端美、若以祭神得非吉也、令上壇欲揮刀、法師語曰、吾已知不免、願待少時、令我安心取滅、師乃想念慈氏、願得生彼、聞諸妙法、成就通慧、還來下生、先度此人、令修勝行、想念未畢、驚雷掣電、飄風折木、賊大懼、謝罪而散。本傳。

相國裴休河東人、守新安日、屬運禪師初於黃檗山、捨衆入大安精舍、混迹勞侶、公入寺因觀壁畫、乃問主事、是何圖相、答曰、高僧眞儀、公曰、眞儀可觀、高僧何在、主事無對、公曰、此間有禪人否、答曰、近有一僧、投寺執役、頗似禪者、公命至觀之、欣然曰、休適有一問、諸德各一詞、今請上人代酬、一語、運曰、請相公問、遂擧前問、運朗聲曰、裴休、公應諾、運曰、在甚麼處、公當下知旨如獲髻珠、公曰、吾師眞善知識、示人剋的若是、何汨沒於此邪、自是申弟子禮、復請住黃檗、公旣通徹祖心、復博綜教相、諸方禪學咸謂、裴相不浪出黃檗之門。傳燈。

劉遺民名程之、彭城人、漢楚元王之後、祖考爲晉顯官、事母以孝聞、丞相桓玄太尉謝安、嘉其賢、欲薦於朝、公辭之、謁廬山遠公、厥後雷次宗、周續之、同來栖遠、遠曰、諸公之來、盍爲淨土之遊乎、遂命公作誓辭、以識盛事、社賢百餘人、十八人爲最、公又拔乎其萃者、公凡念佛時、見彌陀佛身紫金色、以臨其室、公愧幸悲泣曰、安得如來爲我手摩其頭、衣覆其體乎、俄而佛爲摩頂、且引袈裟以覆之、他日又見、身入七寶大池、其池蓮華青白相間、其水澄澈無有畔岸、中有一人、指池水曰、八功德水、汝可飲之、公飲水甘美、及寤猶覺異香發於毛孔、公曰、此吾淨土之緣至矣、誰爲六和之衆、與我證邪、少頃緇徒咸集、公對尊像、爇香再拜祝曰、我以釋迦遺敎故、能知有阿彌陀佛、此香先當供養釋迦如來、次供阿彌陀佛、至於十方佛菩薩衆、願令一切有情、俱生淨土、願畢乃三扣齒長跪而卒。廬山集。

王日休居士龍舒人、性行端靖、少補國學、俄歎曰、西方之歸爲究竟、奮、從是布衣蔬食、日課千拜、以嚴淨報、或曰、公旣志念純一、復何事苦行邪、答曰、經不云乎、非少福德因緣得生彼國、若不專心苦到、安能決定往生、居士在家持戒甚嚴、坐必宴寂、臥必冠帶、面目奕奕有光、望之者

信其爲有道之士也居士將順世徧別親故且勉進淨業至夜勵聲稱佛名倡言佛來接我屹然立化怡雲並聚允迪記。

靜上座初參玄沙得旨後居天台三十餘年不下山博綜三學操行孤立禪者問曰坐時心念紛飛願師示誨靜曰汝當心念紛飛時却將紛飛之心以究紛飛之處究之無處則紛飛之念何存返究究心則能究之心安在又能照之智本空所緣之境亦寂寂而非寂者蓋無能寂之人也照而非照者蓋無所照之境也境智俱寂心慮安然此乃還源之要道也。

道士吳契初號之朱陽人爲河清令以部使者所劾隱于嵩山尋遇石泰先生吳問曰虛無之道可得聞乎石曰先覺有五無漏法眼不視魂在肝耳不聞精在腎舌不聲神在心鼻不香魄在肺四肢不動意企脾五者相與混融化爲一氣聚于三關名曰鉛汞但身中求之不必求於他也吳稟受訣久之功成偶遊西岳邂逅紫陽先生謂曰子之所得固可佳若不明性道徒勞無益吳曰予能追二氣於黃道會三性於元宮對境無心如如不動復何性道之說邪紫陽以圓覺經示之曰此是釋氏心宗宜熟味之他日知所趨嚮信吾不食言也吳乃信受一日誦至由寂靜故十方世界諸如來心於中顯現如鏡中像俄感歎曰從前閉門作活今日掉臂行大道由是徧歷禪會咨決之後謁單州京禪悰和尚吳問曰佛性堂堂顯見住相有情難見若悟本來無我我面何如佛面學人悟則悟已爲甚不見佛面東禪拈拄杖打出吳方開門豁然有契頌曰驀然覷破祖師機開眼還同合眼時從此聖兄俱喪盡大千元不隔毫釐仙死遺事。

大隋眞禪師梓州鹽亭王氏子族本簪纓妙齡夙悟決志尋師遂南下見藥山道吾次謁大潙

服勤衆務食不至充臥不求暖清苦鍊行履操不群大潙常器之潙一日問曰子在此不曾問一轉話眞曰教某甲向甚麼處下口潙云何不道如何是佛眞便作手掩潙山口勢潙歎曰子眞得其髓矣爾後聿旋西蜀嘗於要途煎茶普施三年偶遊後山見一古院號大隋山中有一樹圍四丈餘南開一門不假斤斧宛成一庵師乃居之時人自曰木禪庵獨居十餘年聲聞遐著蜀王三召不從慕師孤風無由一見遣內侍齎師號寺額等賜師不受凡三度送至師確意却之王再遣使出勑云此回禪師準前不受當誅卿也使者再往懇拜云禪師若更不受某必受戮師乃受之師示衆曰老僧不爲名利來此須要得箇人不可青山白雲中趁爾是非將來之世捨一報身草也無喫諸禪德老僧行脚時到諸方多是一千少是二百衆在其中經冬過夏未省時中空過向潙山會裏做飯七年洞山會中做柴頭三年重處卽便先去只是了得自己時中干他人甚麼事如諸佛菩薩皆是積劫勤苦方得成就似諸闍梨還曾捨得甚麼身命作得甚麼勤苦便道我會出世間法世間法尚不會遇些子境界便自張眉努目消容不得說什解脫法長連牀上坐不揣十指喫他信施了合眼合口道我修行感果如是非獨謾自己亦謾諸聖既在三衣下直須親近知識了辨大事不可又入輪回六趣去也若是得自在底人論甚麼鑊湯爐炭驢胎馬腹於中如喫美食相似若未得如是便實受此報一失人身再求欲似今日萬中無一不見古德問僧何者爲最苦僧云受地獄者爲最苦古德云此未是苦出家不明理爲最苦爾古人恁麼說話血滴滴地當自銘心時時警策莫令後悔。語錄。

廣慧連禪師示衆多勸人疎財利薄口體又云若欲學道先須貧苦鍊行若不爾者欲得道成

無有是處、及璉示寂召衆曰、老僧尋常、只教爾踈財利薄口體、道業無有不辨、何故一切罪業、皆因財寶所生、一切垢染皆因口體而起、老僧一生不蓄財、不別衆食、非是老僧分外底事、乃佛有戒辭親出家、識心達本解無爲法、去世資財、乞求取足、日中一食樹下一宿、此是佛之明訓、安可背違、我若要足衣食、覓自在、何不爲俗隨所任運、又何須假佛形服、破滅法門、作甚麼、既爲釋子、當行釋行、不可道我有福有緣、縱意造業、帶累師僧父母、同入地獄、今時有般知識、自眼不正、開口欲斷人命根、觸著便懷毒蛇心行、見利見名如蠅子見血一般、永無放捨者般底也道、我會禪會、道行棒行、喝苦哉汝輩行脚切須著眼、珍重、言訖而逝。舟峰錄。

光孝安禪師永嘉人、翁氏少莊重、不喜喧囂、父異之令出家、往台之雲峯、結茅而居、長坐不臥一食終日、不衣絹纊、唯壞衲以度寒暑、尋謁詔國師、師問曰、三界無法、何處求心、四大本空、佛依何住、爾向甚處見老僧、安曰、今日捉敗和尚、師曰、是甚麼、安掀倒香臺而出、師器之、安一日閱華嚴、至於身無所取、於修無所著、於法無所住、過去已滅、未來未至、見在空寂、到此豁然、入定經旬餘、方從定起、身心爽利頓發玄秘、安以華嚴李長者釋論旨趣宏奧、因將合經成一百二十卷、盛行於世、忠懿王、嚮師道望、命住越之清泰、安不樂、從務、唯宴坐丈室、如入大定、一日定中見二僧倚殿檻語話、有天神擁衞傾聽、久之俄有惡鬼、唾罵復掃脚跡、及詢倚檻僧、所以乃初論佛法、後談世諦、安曰、閑論尚爾、況主法者、擊鼓陞堂說無益事邪、自是終身未嘗談世故、安死闍維、舌根不壞、柔輭如紅蓮華葉。傳燈通行。

明教嵩禪師藤州人、得度後、嘗戴觀音像誦其號、日十萬聲、於是世間經書不學而能、得法洞山聰公、慶曆間至錢塘樂湖山稅駕焉、所居一室、翛然無長物、清坐終日、非修潔行誼者不可造也、師之道妙、學者器近不能曉悟、師亦不少低其韻撫徇其機、歎曰、安能員鑿以就方枘、聞之聖賢所爲、得志則行其道、否則言而已、言之行由是爲萬世法、使天下學者、識度修明遠邪林游正涂、奚必目擊受之、謂己之出邪、卽閉關著書、書成携之京、因內翰王公素獻之　仁宗、又爲書先焉　上讀至臣爲道不爲名、爲法不爲身、歎愛其誠、旌以明教大師、賜其書入藏、既送中書、時韓魏公琦覽之、示歐陽文忠公、公方以文章自任、以師表天下、又以護宗不喜吾道、見其文謂魏公曰、不意僧中有此郎、黎明當一識之、魏公同往見、文忠與語終日、遂大喜、自韓丞相而下、莫不延見尊重之、由是名振海內、遂買舟東下、大覺璉公、賦白雲謠以將師之行、白雲人間來、不染飛埃色、遙爍太陽輝、萬態情可極、嗟嗟輕肥子、見擬垂天翼、圖南誠有機、去當六月息、寧知絪緼采、無心任吾適、天宇一何寥、舒卷非留跡、歸老於永安、精舍示化、茶毗得六根不壞者三、頂骨出舍利、紅白晶潔、狀若大菽、嗚呼使其與奪之不公、辯說之不契乎道、則何以臻於是矣。石門行樂。

終南山宣律師、初生齊朝、名僧護、居越之剡、鐫彌勒像、次生梁、名僧祐、後生隋、名道宣、其祖湖州人、父爲陳吏部尚書、隨駕入長安、生于京兆、母氏夢月貫懷而娠、又梵僧語其母曰、仁所懷者、卽梁祐律師、宜令出家弘宣佛教、及下髮尅苦勵志、唯求聖法、嘗戴寶函繞塔行道、願求舍利降於函中、七日果獲感應、由是益精其志、日唯一食長坐不睡、樂入禪定、貞觀四年、在清官寺行般舟定、感天龍給侍、乏水示以白泉、於安居日、嘗發誠願、若坐夏有功、願垂異相、後庭中

果生芝草師因勞苦發疾天王授以補心藥方因告師曰今當像末諸惡比丘廣造伽藍不修禪慧亦不讀誦縱有智者千有一二後在西明寺深夜行道足跌前階聖者扶足師問是誰答曰北天王之子勅令侍衛師曰貧道修行無煩太子太子威力自在天竺有可作佛事者却願致之太子曰我有佛牙長三寸闊一寸寶之久矣密授與師宜加保護師乃晝藏地穴夜捧行道人莫得知唯弟子綱律師密見其蹤欲揚之師曰信根淺薄謂吾妖妄唯我與子乃可知耳師與天神往來甚衆喜問靈蹤聖軌隨問隨錄集爲感通傳記乾封二年春二月有神告曰師將報盡當生彌勒內宮并留香一袠此天上棘林之香帝釋所焚者是年冬十月有三日空中天樂花香迎請而逝別傳略記。

智者顗禪師姓陳潁川人生有重瞳年十五於長沙像前誓求出家於禮佛時恍然如夢見山臨海山頂有僧招手曰汝當居此汝當終此既寤精誠愈至年十八投湘州果願寺法緒出家遂受具戒精通律藏兼修禪定時慧思禪師武津人名行高重遙飡風德不啻飢渴其地乃陳齊兵及所衝重法輕生涉險而去思曰昔日靈山會上同聽法華宿緣所追今復來矣即示普賢道場說四安樂行於是昏曉苦到如教研心于時勇於求法貧於資供切柏代香捲簾進月月沒則燎之以松柏盡則繼之以栗經二七日誦法華至藥王品諸佛同讚是眞精進是名眞法供養如來到此一句身心豁然入定持因靜發照了法華若高暉之臨幽谷達諸法相似清風之遊太虛將證白師師更開演自心所悟及從師受四夜進功功逾百年思歎曰非爾莫證非我莫識所入定者法華三昧前方便也所發持者法華旋陀羅尼也縱令文字之師千群萬衆尋汝之辯不可窮矣於說法人中最爲第一後爲儀同沈君理請住瓦官未幾謝遣門人曰昔南岳輪下及始濟江東法鏡屢明心絃數應初瓦官四十人共坐二十人得法次年百餘人共坐二十人得法又次二百餘人共坐十人得法其後徒衆轉多得法轉少妨我自行化道可知吾聞天台地記稱有仙宮若息緣茲嶺啄峯飲澗展平生之願陳太建七年秋入天台有一老僧引之而進曰師欲造寺山下有基捨以仰給師曰正如今日草舍尙難況辦寺乎僧曰今非其時三國成一有大勢力人當起此寺寺若成國即淸當呼爲國淸有定光禪師異人也居山三十載迹晦道明易狎難識有所懸記多皆顯驗其夕宿定光草庵光曰還憶招手時否及觀所住之處宛如昔夢因煬帝遣使詔師至石城乃曰吾知命在此不須進前輟斤絕絃於今日矣聽倡無量壽竟曰四十八願莊嚴淨土華池寶樹易往無人火車相見能改悔者尙復往生況戒慧熏修行道力故實不誑唐損梵音聲相實不誑人智朗請云不審何位歿此何生誰可宗仰師曰吾不領衆必淨六根爲他損己只是五品位爾汝問何生者吾諸師友侍從觀音皆來迎我問誰可宗仰者豈不聞波羅提木叉是汝之師四種三昧是汝明導教汝捨重擔教汝降三毒教汝治四大教汝解業縛教汝破魔軍教汝調禪味教汝折慢幢教汝遠邪濟教汝出無爲阬教汝離大悲難唯此大師可作依止我與汝等因法相遇以法爲親傳習佛燈是爲眷屬若不爾者非吾徒也言訖如入禪定別傳。

廬山遠法師生于鴈門賈氏嘗請法道安法師因聽講般若有契師與大尹張秘友善一日謂曰逆境易打順境難打逆我意者只消一箇忍字不片時便過若遇順境則諸事順適我意如

磁石見鐵不覺不知合爲一處無情之物尚爾況全身在塵境中邪後遊廬阜以山水清勝遂安止之刺史桓伊搬東林以居焉從爾影不出山幾三十年唯以淨土克念于勤初十餘年澄心系觀三觀聖相而師沉厚不言後二十年於般若臺從禪定中見彌陀佛身滿虛空又聞告言我以本願力故來安慰汝汝後七日當生我國師始告其徒曰吾自居此幸得三觀聖相今復再見吾往生決矣汝當自勉。塔銘。

潙山祐禪師福州人薙髮後往天台國清受戒寒拾預修路曰不久有肉身大士來此求戒師至二人隱於路傍深草中待師過跳出作虎勢哮吼而接師罔措寒云自靈山別後五生作人主來今忘之後參百丈一日侍立次丈云汝撥爐中有火否師撥云無火百丈躬起深撥得少火舉示之師發悟禮謝陳所解丈曰此乃暫時岐路經曰欲見佛性當觀時節因緣時節既至如迷忽悟如忘忽憶方省己物不從他得令充典座時司馬頭陀自湖南來謂百丈曰長沙西北絕頂乃奇勝之地可容千衆丈曰老僧去之可乎頭陀曰和尚骨人彼是肉山非所宜也丈曰第一坐可乎曰非也丈曰典座可乎曰眞潙原主人往彼十餘年衆方集師遂往結庵橡栗爲食猿鳥爲侶影不出山宴坐終日如是九年偶念曰吾居久矣竟無人到本圖利物獨居何益欲棄庵而去至谷口虎豹蛇蟒橫於道路師曰吾若於此有緣汝各散去不然從汝啖之言訖而散於是復回有神見曰此山乃迦葉佛時曾爲蘭若今當復成常護此山蓋受佛記爾明年大安領衆輔成法社。寺碑。

淨因臻禪師生福之古田得旨訣於浮山遠公後謁淨因璉公公命首衆及璉歸吳以臻嗣席神宗嘗詔至慶壽宮設高坐恣人問答左右上下得未曾有臻爲人純厚渠渠靖退似不能言者及其辯說縱橫無礙奉身至約一布裙二十年不易魯直太史題其像曰老虎無齒臥龍不吟千林月黑六合雲陰遠山作眉紅杏顯嫁與春風不用媒老婆三五少年日也解東塗西抹來。羅山集。

證悟智法師台之林氏子少聰敏書過目成誦雖醫方卜筮亦皆通曉一日遊講舍聞說觀經傾聽良久歎曰落日之處吾有故鄉今聞此若得家書於是祝髮誓勤祖教休白蓮僊法師問具變之道僊指燈籠曰離性絕非本自空寂理則具矣六凡四聖所見不同變則在焉智不契後因掃地誦法華至知法常無性佛種從緣起意遂豁然契悟僊見之曰且喜大事決了法華止觀此爲喉襟汝能省悟誠造微入妙自是游心昭曠多以此示人每涉五日始一寢餘則涵泳道要惟恐不及一坐東山二十四年兩山學徒與之論辯無敢當者師嘗患後進圓名相膠筆錄或者至以一宗之傳爲文字之學異宗鄙之殊不領略因勉其徒曰豈不思吾佛云是眞精進只者一句便有向上機緣何不觀面激揚斯事乎後被命上竺時丞相秦公問止觀一法邪二法邪師曰一法也譬之於水湛而清者止也可鑑鬚髮者觀也水則一耳又猶兵也不得已而用之以衆生重昏巨散之病用止觀之藥救其心性歸爲全一之體俾法界寂然名止寂而常照名觀若專其所止則何所觀如公垂紳正笏燕坐廟堂不動干戈中興海宇亦若是而已公喜曰非師安知佛法之妙。塔銘。

東山能行人敎觀明白以熏修爲志一入饑室寒暑不變者四十年由是行人之名聞于江浙、

能未嘗自謂修行者、則曰、智者六時禮佛、四時坐禪、云修行之常儀、況我何有焉、草庵因法師、嘗與同修、接膝而坐、見其端謹不委不倚、或有疾唯數日不食、亦不廢禪誦、而疾自愈、能爲人剛潔惡聞名利、凡得施物、卽散於衆、毫髮不留、所存者唯破衲壞絮而已、夏則以篋束之、梁棧、冬卽取以禦寒、每入山飼虎、虎無害意、或風雨昏夜宴坐丘冢、身心安靜、無有怖畏、院有山神、靈化一方、常所交接、或香積不給、知事必告於能、能卽禱之、來日施者、實門而至、僧問其故、施者曰、昨夜巡門報云、常住空虛、特奉供爾。行狀。

汾陽昭禪師太原人、器識沉邃、少緣飾、有大志、於一切文字不由師訓、自然通曉、幼孤、厭世出家、參名宿七十餘人、皆妙得其家風、所至少留、不喜觀覽、或譏其不韻、昭歎曰、先德行脚、正以聖心未通、驅馳決擇、豈緣山水之翫乎、後參首山、問百丈卷席意旨如何、山曰、龍袖拂開全體見、昭曰、師意如何、象王行處絕狐蹤、昭遂大悟曰、萬古碧潭空界月、再三勞漉始應知、禮拜歸衆、時葉縣省和尙作首座、問曰、見何道理、便爾自肯、昭曰、正是我放身命處、後長沙太守張公、以四名刹請昭擇居、昭曰、我長行粥飯僧爾、傳佛心宗、非細職也、前後八請堅不答、後以太子院迎之、閉關高臥、石門聰禪師、排闥而入、讓之曰、佛法大事、靖退小節、汝有力荷擔大法者、今何時而欲安眠哉、昭矍然起曰、非公不聞此語、趣辨嚴吾行矣、既至宴坐一榻、影不出山者三十年、師以汾州苦寒、欲罷夜參、感異比丘請法、龍德府尹李公、以承天迎之、使三返不赴、使者當受罰、復至曰、必欲得師俱往、不然有罰、師當念之、昭曰、當先後之、何必俱邪、昭令備饌且促裝曰、吾行矣、停箸而化。僧寶傳。

眞人張平叔、雅好清虛、在丹丘之廛、遇頂汝貧子、出龍馬所負之數、遂領厥旨、久之功成、且曰、吾形雖固、而本覺之性曾未之究、遂探內典、至楞嚴有省、著悟眞篇、又作禪宗歌頌、叙中引楞嚴十種仙壽千萬歲、不修正覺、報盡還生、散入諸趣之語、又曰、爲此道者、當心體太虛內外如一、若立一塵卽成滲漏、此不可言傳之妙、曉得金剛圓覺二經、則金丹之義自明、何必分別老釋之異同哉、則知平叔、乃求出離生死之法、必歸仗於佛、爲究竟爾。群仙珠玉。

眞人呂洞賓、河陽滿故人、生於唐天寶間、世爲顯官、累舉進士不第、因遊華山、遇鍾離權、乃晉之郎將、避亂學養命法、將度呂公、首以財施之、一日呂侍行、鍾拾一塊石、以藥塗之、卽成黃金、鍾遣之曰、前途將粥之、呂問曰、此仍壞乎、鍾曰、五百年壞、呂擲之曰、他日誤人去、鍾復試之以色、命呂入山採藥、化一小廬、有美婦、懷迎之、曰、夫故久矣、今遇君子、願不我棄、婦欲執手而近、呂以手托開云、毋以革囊穢於我矣、言訖其婦不見、卽鍾離也、於是授以金丹之術及天仙劍法、遂得遊行自在、詩曰、朝遊南越暮蒼梧、袖裏青蛇膽氣麤、三日岳陽人不識、朗吟飛過洞庭湖、謁龍牙和尙、問佛法大意、牙與偈曰、何事朝愁與暮愁、少年不學老還羞、明珠不是驪龍惜、自是時人不解求、因過鄂州黃龍山、見紫氣盤旋、疑有異人所止、遂入値機禪師上堂、師知有異人潛跡坐下、卽厲聲曰、衆有竊法者、呂毅然問曰、一粒粟中藏世界、半升鐺內煮山川、且道此旨如何、師曰、守屍鬼、呂曰、爭奈囊中有長生不死藥、何師曰、饒經八萬劫、終是落空亡、呂不憤而去、至夜飛劍脅之、師已前知、以法衣蒙頭坐于方丈、劍遶數帀、師以手指之、劍卽墮地、呂謝罪、師因詰曰、半升鐺內卽不問、如何是一粒粟中藏世界、呂於言下有省、乃述偈曰、拗却瓢

兒碎却琴、如今不戀水中金、自從一見黃龍後、始覺從前錯用心。尚苑遺事。

給事馮楫居士、少游上庠、一日公試、以生者德之光論、中魁選、其文用圓覺經意、發明之、雖在仕途、不忘佛學、徧參名宿、居龍門從佛眼經行次、偶童子趨庭吟曰、萬象之中獨露身、佛眼拊公背曰、好寧、公於是契入、後帥瀘南、嘗宴坐、有公事之餘喜坐禪、少曾將脅到牀眠之句、尤篤意淨業、所至作繫念勝會、勸發道俗、兵興來敎藏煨燼、不自厚養、所得俸給專施藏經、有偈略曰、我賦躭痂癖、有財貯空虛、不作子孫計、不爲車馬通、不充玩好用、不買聲色娛、置錐無南畝、片瓦無屋廬、所得月俸給、唯將贖梵書、庶使披閱者、咸得入無餘、古佛爲半偈、尙乃捨全軀、是以不惜財、開示諸迷徒、借問惜財人、終日較錙銖、無常忽到地、寧免生死無、紹興二十三年、公帥長沙、俄報親知、期以七月三日報終、至日令後廳設高坐、見客如平時、降階望闕肅拜、請漕使攝郡事、著僧衣履、踞高坐、囑諸官吏及道俗、各宜進道扶護敎門、遂拈拄杖、按膝而化、蘭大聘誌。

趙清獻公、年四十餘、去聲色、系心祖道、會佛慧泉禪師來、居衢之南禪、公日親之、泉未曾容錯一詞、後典青州、政事之餘、多務禪宴、忽大雷震驚、豁然有契、頌曰、默坐公堂虛隱几、心源不動湛如水、一聲霹靂頂門開、喚起從前自家底、泉聞之曰、趙悅道撞彩爾。梅溪集。

仰山寂禪師韶州葉氏子、薙髮後、夢獲一大珠、光彩射人、覺曰、此是無上心寶、我得之當明心地、卽遊方謁耽源、已契玄旨、後參溈山、遂升堂奧、寂問、如何是眞佛住處、溈曰、以思無思之妙、返思靈燄之無窮、思盡還源、性相常住、事理不二、眞佛如如、寂言下頓悟、暨受密印、領衆住王莽山、化緣未契、至袁州訪仰山、沿流而上、有二神迎問曰、深山絕險、師自何來、師曰、吾欲尋一庵地、神曰、弟子福慶相遇、願施此山、與師居止、師曰、君旣施我、須具廣大心、不見僧過則吾受君施矣、神曰、諾、神遂指集雲峯下曰、莫吉於此、師乃結茅而居、木食澗飲、危坐終日、未幾二神見曰、徒衆將盛、弟子住處不便、當易之、至夜風雷暴作、移廟于堵田、三十里古壕神像、巨松皆往、乃會昌三年夏四月也、感異僧乘空而至、曰、特來東土、禮文殊、今日却遇小釋迦、自是溈仰宗風大振於世、師將順寂、神求緒言、師曰、吾幻泡之身、隨緣興謝、來時無物、去、更何求、神曰、諸佛滅時、天龍請囑、願毋違我、師以得法之師溈山祐禪師正月八日忌齋爲囑、殆今民人莫敢違。寺記。

道法師西京順昌人、宣和詔改德士、師與林靈素抗辯邪正、愬于朝廷、忤旨流道州、監防卒曰、此去萬里宜茹葷酒、以助色力、師曰、死乃天命、佛禁不可犯、卒乃敬服、師未氏寧所前一日、郡守夜夢、佛像荷枷入城、僚屬亦有同夢者、翌早師至、大守語人曰、被罪之僧必異人也、未逾月郡人患疾者太半、師鑿池祝水、飲者咸愈、於是一方尊事不啻父師、尋令逐、便道由長沙、邂逅寂音、音以詩遺曰、道公膽大過身軀、敢逆龍鱗上諫書、只欲祖肩擔佛法、故甘引頸受誅鋤、三年寘逐心無愧、萬里歸來貌不枯、他日敎門綱紀者、近聞靴笏趁朝趨、時公卿大夫謂、師有文武才略、請加冠冕、補官序、分領兵權、恢復故疆、師力辭、朝賢知志不可奪、奏請、賜寶覺圓通法濟之號、紹興改元宣入、上曰、先帝爲妖術所惑、廢卿形服、朕與卿去其黥、涅可乎、師曰、臣雖感聖恩、先皇墨寶不忍毀除、上曰、者僧到、老倔强、許自便、紹興三年、師與道士劉若

謙、詣朝廷、正祈禱道場所班次、其箚略曰、緣崇寧間、林靈素等叨冒資品、紊亂朝綱、由是道壓佛班、自建炎之來、所有道士官資、已行追毀、既無官蔭、當遵 祖宗舊制、伏望朝廷明降指揮、特賜改正、頒行天下、以正風俗、時國政多故、仍寢其說、至十三年、再行整會、僧左道右、永爲定制、後因旱魃爲虐、奉 旨宣入祈禱、師卽登坐聲祝、且乞四金餅、各置鮮鯽魚、噀水密祝、卽遣四急足、放諸江沼、急足未回雨已霈然、 天顏大悅。塔銘。

晦庵光禪師、閩之長樂人、出嶺謁圓悟、佛心諸名宿、會大慧寓廣因、光往從之、光一日侍行問曰、某到者裏、不能得徹、病在甚處、慧曰、汝病最癖、世醫拱手何也、別人死了活不得、汝今活了未曾死、要到大安樂田地、須是死一回始得、光益疑之入室、問曰、喫粥了也、洗鉢盂了也、去却藥忌道、將一句來、光曰、裂破、慧震威喝云、爾又來說禪、光大悟、慧槌鼓告衆曰、兎毛拈得笑哈哈、一擊萬重關鍵開、慶快平生在今日、就云千里賺吾來、光以頌呈曰、一拶當機怒雷吼、驚起須彌藏北斗、洪波浩渺浪滔天、拈得鼻孔失却口。語錄等。

人天寶鑑上 終

人天寶鑑下

沙門波若高麗人、開皇間、詣佛隴、求智者禪法、未幾卽有所證、智者謂曰、汝於此有緣、宜須閑居靜處、成辦妙行、今天台華頂去寺六七里、是吾昔日頭陀之所、汝可往彼學道進行、必有深益、勿慮衣食、波若遵訓往彼、曉夜行道不曾睡臥、影不出山十有六年、一日忽下山告諸友曰、波若知命將盡、特出山與大衆別爾、卽回華頂而卒。天台石刻。

正言陳了翁、南劍州人、妙年登上第、性閑雅、與物無競、見人之短未嘗面折、但微示意警之而已、公初尙雜華、頗有所詣、及會明智法師、扣天台宗旨、明智示以止觀上根不思議境、以性奪修、成無作行、忽有契悟、晚年謫居海上、未嘗有不滿意、唯剋念西歸、嘗作延慶淨土院記、其略曰、如來之敍九品、以至誠爲上上、智者之造十論、破疑心之具縛、縛解情忘、識散智見、則彌陀淨境不假他求、若臨明鏡自見面像、又曰、譬如清淨滿月影見諸水、月體無二、攝流散而等所歸、會十方而總于一、亦如十鏡環繞中然、一燈燈體交參、東西莫辨、而方有定位、西不自西、各隨相融、境將誰執、安以在塵執方之見、測度如來無碍之境乎、因法師曰、了翁言淨土可謂深賾佛祖之壺奧矣。草庵錄。

石壁寺去杭越二十里、走龍山而西、曾然入幽谷、有溪流巖石之美、雖其氣象清淑、而世未始知之、自紹大德靖法師居之、而其名方播、亦地以人而著也、靖紹皆錢塘人、同依壽禪師出家、

通練律部、時韶國師其道大振、靖紹往從之、國師見且器之、即使往學三觀法於螺溪寂法師、於是偕往事寂講求大義、居未幾所學已就、靖紹復回石壁以會講衆、前後五十年、守其山林之操、未始苟游鄉墅閭里、處身修潔、吳中宿學名僧、皆推其高人、明教曰、出家於壽公學法於寂公、見知於韶公、三皆奇節異行不測人也、天下豈可多得、二師皆遇而親炙之、假令得一見、已自甚善、況因人而得法、二師之美多矣。塔表。

海月辯都師雲間人、生有異、父母令入普照出家、得法明智、智老命代講八年、遂領寺事、翰林沈時卿、以威猛治杭、僧徒見者多懼、師獨從容如平日、公異之、俾澄僧職、遷至都僧正、時東坡作倅、喜其道行高峻、發言璀璨、嘗序之曰、錢唐佛僧之盛、蓋甲天下、道德才智之士、與夫妄庸巧僞之人、雜處其間、號爲難齊、故僧職正副之外、別補都僧正一員、簿帳案牒奔走將迎之勞、專責副正已下、而都師總領要略、實以行解表衆而已、師容止端靖不畜長物、有盜夜入其室、脫衣與之、使從支徑遁去、居無何、勸於酬酢、歸隱草堂、但六事隨身而已、將順寂先遺言、須東坡至方可闔棺、四日東坡始氐山中、見其端坐如生、頂尚溫、遂作三絕哭之云、欲尋遺跡强沽裳、本自無生可得亡、今夜生公講堂月、滿庭依舊冷如霜、生死猶如臂屈伸、情鍾我輩一酸辛、樂天不是蓬萊客、憑仗西方作主人、欲訪浮雲起滅因、無緣却見夢中身、安心好住王文度、此理何須更問人。塔銘。

高麗僧統義天、捨王位出家、問法中國、首至四明郡、將命延慶明智、三學法隣二師、爲館伴、至杭州謁照律師、願從律學、照爲說戒法、令習儀範、授以三衣盂鉢錫杖、仍有偈曰、爲汝裁成應法衣、更將盂錫助威儀、君看宿覺歌中道、不是標形虛事持、朝廷復詔楊次公館伴、所經諸刹迎餞如王臣禮、至金山、獨佛印牀坐納、其大展、次公驚問其故、印曰、義天亦一異國僧爾、衆姓出家同名釋子、安問貴種、若屈道隨俗、先失一隻眼、何以示華夏師法乎、朝廷以元爲知大體。僧傳等。

天竺悟法師錢塘人、每誦呪時身出舍利、所供像亦如之、天聖三年、慈雲欲以智者敎觀求入大藏、文穆王公擬達天聽、悟曰、此非常之事、小子將助之、乃繪千手像、誦大悲密語、誓曰、事果遂當焚此軀、未幾公薨、悟益加精勵、晝夜不廢、越歲乃克如志、悟遂答前誓、薪盡屍在、裂裳覆體、儼然如生、衆咸異之、慈雲再積香木焚乃方壞、舍利無數、三歲之後、信者尙獲、慈雲作讚刻石曰、悟也吾徒、荷法捐軀、其餘赫赫、其樂愉愉、逮火將滅、儼如跏趺、逮骨後碎、璨若圓珠、信古應有、今也則無、芳年三十、眞哉丈夫。金園。

晦堂心禪師、初承南禪師遺命、領住山緣、十有三白、於法席正盛時、毅然謝事、居西園、以晦命其堂、且曰、吾所辭者世務爾、今欲專行佛法、於是牓其門曰、告諸禪學、要窮此道、切須自看、無人替代、時中或是看得因緣、自有歡喜入處、却來入室吐露、待爲品評是非深淺、如未發明、但且歇去、道自見前、苦苦馳求轉增迷悶、此是離言之道、要在自肯、不由他悟、如此發明、方名了達無量劫來生死根本、若見得離言之道、即見一切聲色言語是非更無別法、若不見離言之道、便將顚倒會目前差別因緣、以爲所得、只恐誤認門庭目前光影、自不覺知、方成剩法、到頭只是自謾枉費心力、宜乎晝夜剋己、精誠行住觀察微細審思、別無用心、自然有箇入路、非是朝

夕學成事業、若也不能如是參詳、不如看經禮拜度此殘生、亦自勝如亂生謗法、若送老之時敢保、成箇無事人、更無他累、其餘入室、今去朔望兩度却請訪及江。

孝宗皇帝、詔徑山主僧寶印於選德殿、　上曰、三教聖人本同者箇道理、印奏曰、譬如虛空東西南北初無二也、　上曰、但聖人所立門戶各別爾、孔子以中庸設教、印曰、非中庸之教何以安立世間、故華嚴云、不壞世間相、而成出世間法、法華云、治世語言、資生產業、皆與實相不相違背、　上曰、今之士夫、學孔氏者多只攻文字、不見夫子之道、不識夫子之心、唯釋迦老子、不以文字教人、但直指心源、開示衆生、各令悟入、此爲殊勝、印曰、非獨今之學者、不見夫子之道、當時十哲、如顏子、號爲具體、盡其平生力量、只道得箇瞻之在前忽然在後、如有所立卓爾、竟捉摸未著、而夫子分明八字打開、與諸弟子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者是丘也、以此而觀、夫子未嘗回避諸弟子、而諸弟子目蹉過也、昔張商英丞相云、唯吾學佛然後能知儒、　上曰、朕意亦謂如此、　上又問曰、莊老何如人、印云、只作得佛門中小乘聲聞人、蓋小乘厭身如桎梏、棄智如雜毒、化火焚身入無爲界、正如莊子所謂形固可使槁木、心固可使如死灰、於是稱旨、奏對錄。

可久高僧錢塘人、徧游講肆、深得天台旨趣、後居祥符、喜爲古律、造於平淡清苦、東坡以詩老呼之、坡因元宵同僚屬觀燈、坡獨往謁之、見其寂然宴坐、作絕句云、門前歌鼓鬧紛崩、一室蕭然冷欲冰、不把瑠璃開照物、始知無盡本非燈、久律己甚嚴、長坐一食、四威儀中、法服未嘗去體、儉約自持、一布衲終身不易、或絕粮辟穀、宴坐而已、晚居西湖之濱、翛然一榻、不留餘物、臨外唯紅蕉數本、翠竹數百竿、自號蕭蕭堂、將卒語人曰、吾死蕉竹亦死、後如其言、恰雲集。

楊次公云、大願聖人從淨土來、來實無來、深心凡夫從淨土去、去實無去、彼不來此、此不往彼、而其聖凡會遇兩得交際、彌陀光明如大圓月、徧照法界、念佛衆生攝取不捨、諸佛心內衆生、塵塵極樂、衆生心中淨土、念念彌陀若能發心、念彼佛號、即得往生、河沙諸佛有同舌之讚、十方菩薩有同往之心、佛言不信何言可信、不生淨土何土可生、自棄己靈是誰之咎、公臨終時見金臺從空而至、即說偈而逝、偈曰、生亦無可戀、死亦無可捨、太虛空中之乎者也、將錯就錯、西方極樂輔道集等。

玄沙備禪師福州人、姓謝、少漁於南臺江上、忽棄舟從釋、芒鞋布衲、食才接氣、宴坐終日、雪峯呼爲備頭陀、再來人也、何不徧參去、備曰、達磨不來東土、二祖不往西天、峯然之、備縛屋玄沙、衆相尋而至、遂成叢林、說法與契經合、諸方有要義未明者、皆從決之、示衆曰、佛道閑曠無有途程、不在三際豈有昇沈、建立乖張不屬造作、動即涉塵勞之境、靜即沈昏醉之鄉、動靜雙泯即落空亡、動靜雙收即漫汗佛性、何必對其塵境、如枯木寒灰、但臨機應用不失其宜、如鏡照像不亂、光輝如鳥飛空不雜空色、所以道、十方無影像、三界絕行蹤、不墮往來機、不住中間相、譬由壯士展臂不由他力、師子遊行豈求伴侶、九霄絕翳何用穿通、一段光明未曾昏昧、到者裏體寂寂、常皎皎、赤赫赫、無邊表、圓覺光中不動搖、吞欝乾坤廻然照。傳燈。

文潞公居洛陽、嘗致齋往龍安寺、瞻禮聖像、一日像忽朽墮、公見之略不加敬、但瞪視而出、傍有僧曰、何不作禮、公曰、像既壞吾將何禮、僧曰、先聖道、譬如官路士、私人掘爲像、智者知路士、

凡愚謂像生、後時官欲行、還將像塡路、像本不生滅、路亦無新故、公聞之有省、由是慕道甚力、年九十餘、晨香夜坐未嘗少廢、每日願曰、願我常精進勤修一切善、願我了心宗廣度諸含識、

椿溪雜錄。

普首座、自號性空、得旨於死心、久居華亭、好吹鐵笛、放曠自樂、人莫測之、喜爲偈句開導於世、偶曰、學道尤如守禁城、晝防六賊夜醒醒、將軍主將能行令、不動干戈致太平、又曰、不耕而食、不蠶衣、物外清閑過聖時、未透祖師關戾子、也須存意著便宜、一日告衆曰、坐脫立亡不如水葬、一省柴燒、二免開壙、撒手便行不妨快暢、誰是知音、紅子和尚高風難繼、百千年一曲漁歌、少人唱、遂向青龍江上、乘木盆張布帆、泛遠而沒。**普燈。**

愚法師嘉禾人、棄儒從釋、精苦自勵、凡三十年、加功進行、未嘗一日輒廢、嘗與道潛則章二師爲友、潛能詩近名、而章與師、韜光鏟彩不求人知、唯務己行、而章先卒、及愚將順世、告衆曰、吾夢神人告云、汝同學僧、則章得普賢願行三昧、已生淨土、彼待汝久、曷可遲留、於是淨土聖相、及諸花樂、悉見在前、愚卽說偈而逝、偈曰、空裏千花羅網、夢中七寶蓮池、踏得西歸路穩、更無一點狐疑。**行樂記。**

東坡曰、已飢方食、未飽先止、散步逍遙務令腹空、當腹空時、卽入靜室端坐默念、數出入息、從一數至十、從十數至百、數至數百、此身兀然此心寂然、與虛空等、不煩禁制、如是久之、一息自住、不出不入時、覺此息從毛竅中八萬四千雲蒸霧起、無始已來諸病自除、諸障消滅自然明悟、譬如盲人忽然有眼、爾時不用尋人指路也。**大全。**

靈芝照律師錢塘人、幼有夙成、年十八以通經得度、在沙彌中已爲衆講解、習毗尼每悵然興恨無所師承、時處謙法師、深得天台之道、師見之曰、眞吾師矣、請居坐下、風雨寒暑日行數里、謙每講必待師至、或少後衆以過時爲請、謙必曰、聽講人未至、其愛之若此、師欲棄所習而從之、謙曰、近世律教中微、汝他日必爲宗匠、當明法華以弘四分、吾道不在茲乎、師乃博究群宗、以律爲本、非苟言之、實允蹈之、嘗依南山六時致禮、晝夜行道、持盂乞食、衣唯大布、食不過中、一鉢三衣、囊無長物、凡有祈禱誠達穹昊、祈皇而皇出境、祈雨而雨成霖、述古龐公命師禱雨、懺未絕口震雷大霆、公曰、吾家數世不事佛矣、今遇吾師、不得不歸向也、太師史越王、題其碑陰曰、儒以儒縛、律以律縛、學者之大病、唯師三千威儀、八萬細行、具足無玷、而每蟬蛻於定慧之表、毗尼藏中眞法王子、故能奮數百歲後、直與南山比肩、功實倍之、嘗使師身不披緇、必爲儒宗、特立超詣、惜哉、師沒後二十六年、遺馨不泯、朝廷錫號大智律師、塔曰戒光、以賜謚之寵、不及載劉公之文、因書于後。**塔銘。**

大慧禪師、謁湛堂準和尙、指以入道捷徑、慧橫機無讓、準訶之曰、汝不悟者、病在意識領會、是爲所知障矣、時逸士李商老、參道於準、適有言曰、道須神悟、妙在心空、體之不假於聰明、得之頓超於聞見、李擊節曰、何必讀四庫書、然後爲學哉、以故結爲方外友、準示寂、慧謁丞相無盡居士、請準塔銘、公雅以禪學自許、非具大知見、無敢登其門、慧承顏接詞、綽有餘裕、公稱之曰、子禪逸格矣、慧曰、奈自未肯邪、公曰、若爾見川勤可也、於是謁圓悟京之天寧、因陞坐次舉、僧問雲門、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、若有人問天寧、卽向他道、薰風自南來、殿閣生

徹涼、慧忽然前後際斷、雖然動相不生、却在淨顆顆處、每入室悟曰、也不易爾得到者箇田地、可惜死了不能得活、不疑語句是爲大病、不見道懸崖撒手、自肯承當、末後再蘇、欺君不得、須信有者箇道理、始得悟室中嘗問、有句無句如藤倚樹開口便道、不是、慧一日同客藥石、把筯在手、忘了喫食、悟笑謂客曰、者漢參得黃楊木禪也、慧憤然問曰、和尚嘗問五祖和尚有句無句如藤倚樹、祖如何答、悟曰、描也描不成、畫也畫不就、又問、樹倒藤枯句歸何處、祖曰、相隨來也、慧抗聲曰、我會也、從是豁然無有凝礙、未幾取道江西、邂逅待制韓子蒼、劇談儒釋、深嘆服之、館于書齋半年、晨與相揖外、非時不許講、行不讓先後、坐不問賓主、相忘爾汝、傾倒緒餘無日無法喜樂也、後以丞相張魏公挽住徑山、天下衲子靡然景從、衆將二萬指、慧不不繩以清規、容其自律、每有禪者徵詰要義、或氣論不合、諍於大慧之前、慧不決巨細、例送堂司、趁出、時維那紹眞、蜀之義士、大慧凡有令下、寢而不行、甚則令遊山、後聞于慧、慧大稱之曰、非妙喜龍象窟中、安得有此悅衆、瑩仲溫曰、蓋師倜儻好義、趣識高明、性雖急量實寬、雖怒罵中實慈、衆中有不徇律者、一時據令而行、未嘗有傷人害物之意、師所以稱之者深有旨矣、後人可不爲鑑。正續傳。

治父川禪師、蘇之弓級也、以宿種故喜聽禪法、常參景德謙禪師、謙示以趙州狗子無佛性因緣、早夜參究、從爾廢職、尉怒笞之、忽於杖下大悟玄要、謙爲改名曰、汝舊呼狄三、今名道川、此去能竪起脊梁、益加奮勵、則其道如川之增、苟其放怠無足言矣、川佩服其訓、志願不移、嘗頌金剛經、今行於世、開法治父、冬至示衆曰、群陰銷盡一陽生、草木園林盡發萌、唯有衲僧無底鉢、依前盛飯又盛羹。舟峰集。

德山密禪師會下、有一禪者、用工甚銳、看狗子無佛性話、久無所入、一日忽見狗頭如日輪之大、張口欲食之、禪者畏避、席而走、隣人問其故、禪者具陳、遂白德山、山曰、不必怖矣、但痛加精彩、待渠開口撞入裏許便了、禪者依教坐至中夜、狗復見前、禪者以頭極力一撞、則在函櫃中、於是爀然契悟、後出世文殊、道法大振、卽眞禪師也。梅溪筆錄。

神照如法師、問法智尊者曰、如何是經王、尊者曰、汝爲我主三年庫事、却向汝道、如敬承其命、三年畢、如再請曰、今當說矣、尊者大喚本如一聲、忽然契悟、頌曰、處處逢歸路、頭頭是故鄉、本來成見事、何必待思量。教行錄。

楦庵嚴法師、試經得度、依東山神照、照器之曰、吾宗得人益不墜矣、擢居上首、師不特以講說爲尙、凡出處語默、必與其法相應而後已、時法眞問止觀不思議境、師曰、萬法唯一心、心外無別法、心法不可得、是名妙三千、未幾法眞移東掖、及謝事命師繼踵、師曰、昔智者年未五十已散徒衆、四明年至四十、長坐不臥、吾老矣、又何人詎暇住山乎、竟不受、隱居靈鷲之東峯、有楦木一本、結庵於傍、名曰楦庵、其文曰、予年六十歸卜草庵、庵成養病其中、且不以矯激流俗爲意、庵之左有楦一樹、因名焉、夫楦非名果珍也、比之于梨栗、豈無愧色、然梨以爽故致剝、栗以甘故見啖、儻使梨栗有識性、而自求於無用之地、且不可得、彼楦者與梓爲類、雖香而澁、强啖之香不可、使腹實澁不可、使口爽、縱三尺豎子亦希、採焉、磊磊在枝、有自得之狀、是可佳爾、於戲人以智故勞其骨、楦以澁故安其身、智乎澁乎何者爲眞、予之不智得與楦隣、師奉身之具、

止一小鉢、晨晝之飡唯三白、如是獨居二十年、閉門宴坐、世不可親、毗尼條章輕重等議、便用之物、細至於爇香悉有潔觸、寂寥自得、專以安養爲所期、一夕夢、池中生大蓮華、天樂四列、師曰、此吾淨土相也、後七日果逝。行業等記。

昔有一尊宿、以道學爲宗教所重、晚年被旨住山、雅爲聖君賞遇、臨終上震悼、詔令宜葬、侍臣奏曰、此僧衣鉢太富、見諂有司、上不悅、春禮遂衰、少雲曰、惜哉世利能蔽名喪德、今豐儲厚斂者、烏可不戒。少雲雜錄。

古德、浴室示衆偈曰、從本腥臊假合成、皮毛津膩逐時生、直饒傾海終朝洗、洗到驢年不解清、身惹塵埃沾尚淺、心隨欲境染尤深、堪憐擧世忘源者、只洗皮膚不洗心、滿斛盛湯大杓澆、檀那更望利相饒、後生若不知來處、福似須彌立見銷。湖心石刻。

分庵主爲道猛烈、無食息暇、一日倚石闌看狗子話、雨來不覺、良久衣濕、知是雨、爾後因行江干、聞階司喝侍郎來、忽然大悟、偈云、幾年箇事挂胷懷、問盡諸方眼不開、肝膽此時俱裂破、一聲江上侍郎來、從是不規所寓、庵居劍門、化被嶺表、偈語走筆而成、自題像曰、面目兜搜、語言薄惡、癡癡酣酣、磊磊落落、罵風罵雨、當慈悲、是聖是凡、難摸索、每日橋頭橋尾等箇人、世無王良伯樂、一生空過却。曝山。

靈源清禪師、南州武寧人、風神瑩徹、好學不倦、黃太史曰、清兄好學、若飢渴者之嗜飲食、依晦堂、晝夜參決、至忘寢饋、一日晦堂與客語話次、清侍立、客去久之、清只在舊處立、堂呼之曰、清兄死了也、於是有省、清與佛鑑書曰、某兩處住持、凡接東山師兄書、未嘗有一句言及世諦、其叮嚀委囑、在忘軀弘示此道而已、到黃龍得書云、今年諸莊皆旱損、我總不憂、只憂禪家無眼、一夏百餘人入室、擧箇趙州狗子話、無一人透得、此爲可憂、至哉斯言、與憂院門不辨、怕官人嫌責、慮聲名不揚、恐徒屬不盛者、實相遠矣。汀江筆語等。

佛燈珣禪師雪川人、久依佛鑑和尚、隨衆咨請、邈無所入、俄歎曰、此生若不徹證、誓不展被、於是四十九日、只靠露柱立地、如喪考妣相似、偶佛鑑上堂曰、森羅及萬象、一法之所印、珣卽頓悟往見佛鑑、鑑曰、可惜一顆明珠、被者風顛漢拾得、圓悟聞得疑其未然、乃曰、我須勘過始得、悟令人召至、因遊山偶到一水潭、悟推入水、遽問曰、牛頭未見四祖時如何、珣狼忙應曰、潭深魚聚、又問、見後如何、樹高招風、又問、見與未見時如何、曰伸脚在縮脚裏、悟大稱之。丹峰語錄等。

秀州遲禪師、方五歲秀氣藹然、母異之、令往資聖出家、徧歷禪會、乃還、而秀郡未有禪居、待來者、亦有所闕、師乃一更其院、如十方禪規、主之、時吳中僧坐法失序、輒以勢高下、不復以戒德論、師慨然嘗以書求理於官、得正其事、師語明教嵩曰、吾不能以道大慧於物、德行復不足觀、以媿於先聖人、苟忍視其亂法、是益媿也、明教曰、不必謙也、宗門道妙罕至、十二頭陀出世至行也、吾徒之所難能、爲法而奮不顧身、亦人之難能、師皆得而行之、又何愧乎。影堂記。

圓照本禪師、常州人、天質粹美、不事緣飾、依天衣懷和尚、弊衣垢面、探井臼、典炊爨、晝則驅馳僧事、夜則坐禪達旦、精勤苦到、略不少怠、或謂之曰、頭陀荷衆良勞、本曰、若捨一法不名滿足、菩提決欲此生身證、敢言勞乎、瑞光虛席、命師主之、既至擊鼓集衆、鼓忽墮地圓轉震響、有僧呼之曰、此和尚法雷震地之祥也、俄失僧所在、從是法席大盛、後以諸刹爭迎之、晚主淨慈、與

靈芝照律師友善、照授師法衣、師終身陞坐必爲衣之、東都曦法師、定中見淨土、蓮華大書金字云、杭州永明寺比丘宗本坐、曦異其事、特往瞻禮而問曰、師是別傳之宗、何得淨土有位邪、曰、雖在禪門、常以淨土兼修爾。行業等記。

仰山圓禪師盱江人、禀戒後、爲道勇決、聞妙喜居梅陽、往依之、服勤炊爨、精苦自勵、妙喜見其器識精敏、嘗異之、因小參、開舉修山主、具足凡夫法、凡夫不知、具足聖人法、聖人不會、聖人若會卽是凡夫、凡夫若知卽是聖人、忽然有契、後主衢之祥符、遷袁之仰山、視事閱七日、講禪門告香之禮、首座領衆羅拜、咨以生死事大、無常迅速、伏望慈悲、開示因緣、圓徐曰、若欲究明生死事、直須於行住坐臥處覷看、生從何來、死從何處、畢竟生死、作何面目、良久不起于坐、泊然蟬蛻。行狀。

大慧曰、近代主法者、莫若眞如喆、善輔叢林者、莫若楊岐會、慈明眞率作事忽略、殊無避忌、楊岐忘身事之、惟恐不周、惟慮不辨、雖衝寒冒暑、未嘗急己惰容、自南源終于興化三十年、總柄綱律、盡慈明一世而後已、眞如者始自束包行脚、逮于應世領徒、爲法忘軀、不嘗飢渴、造次顚沛、無遽色、無疾言、一室翛然安靜自怡、嘗曰、衲子內無高明遠見、外乏嚴師良友、鮮克有成、器者、嗟于二老、實千載後昆之美範也。與西善書。

石隱恭禪師、道行孤峻、才力有餘、久依天童宏智禪師、細大職務、靡不歷試、一日歸省母、母曰、汝行脚本爲了死生度父母、而長爲人主事、苟不明因果、將累我於地下、恭曰、某於常住毫髮不欺、雖一炬之燈、亦分彼此之用、無足慮、我母曰、然過水得不脚濕、恰雲錄。

秦華可、夷也、飲食可、無也、而孝不可、可忘也、故大孝同天地、竝日月、而健行不息、大戒曰、孝順父母師僧、孝名爲戒、則孝可忘乎、吾儕祝髮預三寶數者、無問貧富貴賤、唯尙以道、唯尙以孝、間有父母無親屬供億者、佛許減衣鉢一分、以奉之、若不躬父母之養者、非吾釋之子也。叢林公論。

牧庵朋法師、婺之金華人、見車溪卿公、發明大事、累尸大刹、學徒奔萃、惟恐其後、師臨講不預看讀疏文、俾侍者簽出、起止以樂說辯流瀉不竭、嘗謂衆曰、自領徒已來、七番講摩訶止觀、於正修中、未嘗擧口道著一字、又曰、我於大部中、欲作箇小難、如片紙大、亦作不成、所謂文字性離皆解脫也、晚主明之延慶、一日登坐講調御丈夫、次、忽數士夫至聽師擧唱、師曰、若在儒教論丈夫事、如忠臣不畏死、勇士不顧生、故能立天下之大事、成億代之顯名、乃至不爲名利聲色所惑溺者、皆名丈夫、若在吾教、則以一心三觀爲舟航、六時五悔爲櫓棹、降伏諸魔、制諸外道、是名大丈夫爾、士夫嘆美而去。行業。

無畏久法師、餘姚人、依慧覺璧公、得旨、後徧歷禪會、嘗入徑山佛日之室、佛日夜坐必召師至、命說天台旨趣及楞嚴大意、深遇之、出世清修、學者雲集、師患後生單寮縱恣、闢屋爲衆堂、淨几明牕、蒲褥禪板、洒然有古叢社之風、講次、見學者膠文相鼓異說、歎曰、天台之道由四明而興、亦由四明而廢、非聖人復生、孰能扶持哉、識者謂、師知言、師天資慧利、辯說如流、擧止委蛇與物無忤、終身與之游處者、未嘗見有喜慍之色、日課七經、夜則宴坐、率以爲常、創無畏庵、歸老焉。塔銘。

紹興癸亥冬、大慧禪師蒙恩北還、時育王虛席、宏智和尙擧大慧主之、宏智前知其來多衆必

匱食、智預告知事曰、汝急爲我多辦歲計、應香積合用者、悉倍置之、知事如所誡、明年大慧果至、衆盈萬餘指、未幾香積告匱、衆皆皇皇、大慧莫能錯、宏智遂以所積之物、盡發助之、由是一衆咸受其濟、慧詣謝曰、非古佛安能有此力量、慧一日執智手曰、吾二人偕老矣、爾唱我和、我唱爾和、一旦有先渣然者、則存者爲主其事、越歲宏智告寂、大慧竟爲主喪不逾盟也。雪窗雜記。

圓覺慈法師、解行兼備、學者宗之、東掖虛席、能文二師、然指請師主之、慈至法席鼎盛、盛暑講罷、歸方丈偃息、而文適至、謂師曰、東掖道場、世世皆有道者主之、講罷不在懺室、即在禪堂、未有偃臥自恣者也、慈聞曰、敢不敬命、自後祁寒溽暑、殊不少怠。草庵錄。

南岳讓和尚參六祖、有般若多羅讖云、汝一枝佛法、從汝邊去、向後出一馬駒、蹋殺天下人、在、即馬祖是也、祖出八十四人善知識、世人謂之觀音應化、凡住持皆王臣供給、有院主二十年、管執常住、不置文曆、一日有司磨勘四禁在獄、乃自惟曰、我此和尚不知是凡是聖、二十年佐助伊、今日得此苦毒之報、馬祖於寺中覺知、令侍者裝香端然入定、院主於獄中忽爾心開、二十年用過錢物、一時記得、令書司口授筆寫、計算無遺。通明集。

雪堂行和尚云、高庵爲人端勁動靜有法、處己雖儉、與人甚豐、聞人有疾、如出諸己、至於蒼頭廝役、躬往候問、聽其所須、及死不問囊篋有無、盡禮津送、其深慈愛物、眞末世之良軌。怡雲錄。

黃太史、與胡少汲書曰、公學道頗得力、治病之方當深求、禪悅照破生死之根、則喜怒憂患、無處安脚、疾既無根、枝葉無能爲害、投子聰、海會演、皆道行高重、不愧古人、若從文章之士、學安言綺語、只增長知見、何益於己事。梅溪集。

簡堂機禪師、台之仙居楊氏子、風姿挺異、才歷儒林、年二十五、棄妻孥學出世法、晚見此庵元禪師、密有契證、出應茫山、刀耕火種、單丁者、一十七年、偶云、地爐無火客囊空、雪似楊花落歲窮、拾得斷麻穿壞衲、不知身在寂寥中、每謂人曰、某猶未穩在、豈以住山落吾事邪、而念道不減、在衆之日、晝夜參究、殊不少廢、一日偶看斫樹倒地、忽然大悟、平昔碎膺之物、泮然氷釋、未幾有江州圓通之命、師曰、吾道將行、即欣然曳杖而去、登坐說法云、圓通不開生藥鋪、單單只賣死猫頭、不知那箇無思算、喫著通身冷汗流。大同拾遺。

隱山、與靈空書曰、沙門高尚、大聖慈蔭之力、後世紛紛者、自卑賤之、三三兩兩、出沒於泉石間、其氣象與天台巖洞無異、頻頻偃僂王公之前、得不爲識者掩口、年來糞火煨芋、不起謝恩之風、固不復見覓一人如政黃牛志庵主、大似掘地覓天。

紹興十三年、左修職郎詹叔義、上財賦表、乞住賣度牒、朝廷依至三十二年、侍郎吳子才、上表陳請、仍許願賣、尋被論以爲、佞佛邀福、罷歸巖谷、宴坐一榻、咏經禪、以自飫、弄雲泉、以自娛、仍製一棺、夜則偃臥其中、才至分夜、令二三童子擊棺而呼曰、吳子才歸去來、三界無安不可住、西方淨土有蓮胎、吳聞即起禪誦、如是精進者數年、及終命、家人曰、汝聞乎、家人曰、不聞、吳曰、汝當斂念而聽、悉聞空中隱然有天樂之音、吳曰、清淨界中失念來、此金臺既至、予則行矣、言訖而逝。雪窗雜記。

寂室光禪師、住靈隱日、兄往訪之、茶湯而退、兄意不悅、知事延至庫堂備食待之、光聞曰、無故受食、他日累我、在令兄塡還而去。汀江筆語。

長靈卓禪師命無示立僧、法席嚴肅、不事堂廚、唯安禪以當佳供、夜參以當藥石、其間衲子有不任者、無示告卓曰、人以食爲先、若是則衆將安乎、卓慍之曰、表率安可爲此、無示云、某不爭堂廚敎誰爭邪。慈航小參。

孝宗賜佛照禪師手詔曰、禪師所奏菩薩十地、乃是修行漸次、從凡入聖、夫復何疑、方知脚踏實處、十二時中、曾無間斷、以至圓熟、雜染純淨俱成障礙、作止任滅、脫此禪病、當如禪師之言、常揮劍及卓起脊梁、發心精進猶恐退墮、每思到此兢兢業業、未嘗敢忽、今俗人乃以禪爲虛空、以語爲戲論、其不知道也如此、玆事至大、豈在筆下可窮、聊叙所得爾。

慈航朴禪師、福州人、生于世家、忽厭浮幻、脫身從釋、師納戒時、身心輕安如在空際、戒師曰、子眞得上品妙戒矣、由是終身持戒嚴甚、主天童二十年、未有一日輒背衆食、雖病不違、奉己甚約、待衆至豐、有小師、知庫畢歸拜師曰、某竭力營轉增一倍贏、不敢自與、納之常住、師怒曰、汝所贏者、從巧取不義得之、常住物乃淨財也、豈容汝不義物乎、終不納、其僧逐之、師凡童行剃染、令入沙彌寮、習登壇受戒儀軌、及誦遺敎經、方令受具戒、受具畢入新戒寮、受持三衣一鉢、夜則展坐具披五條而睡、復請一精誦戒經者、與之敎授、誦至通利、方許參堂、越二三夏、山門方督掌務、願遊方者、師必欣然、動于眉睫、贈道具促其行、嘗誡其徒曰、古者爲僧朝廷以試經得度、故發心從釋者、皆英特上行、誓求佛果之士也、今時佛法淡薄、名存實忘、多資者服方袍、資不贍者裨販爲利、貪僞捷出無所不至、一朝得預緇流、自謂畢生了辦、更不克己進修、便乃撥無因果、虛喪光陰、徒消信施、皆由不知出家正因、不明佛法罪淨、不解三乘十二分敎、不達一切諸法本空、未得謂得、未證謂證、諂奉貴權、干求應世、且無爲法身心、一味貪嗔造過、如斯之徒、入我法內、傷敗壞亂、爲害滋多、佛言、譬如師子身中蟲、自食師子身中肉、非外道天魔能破、汝既正因出家、正因爲僧、須當遠離魔道、遵持佛戒、若是達道人、總不消恁麼、奈汝積劫至今心識昏倒、爲僧之初、不以三衣一鉢種種禁戒、制御其心、安可入道、譬如象馬憹悞不調、加諸楚毒、方乃調伏、若不如是、異時三塗苦重、悔將無及、我在無示會中、凡遇五夜必參、誡行者、我須往聽、聞他苦口爲人、不覺涕淚俱下、凡登無示之門、聽其舉揚、觀其行事、雖老於叢林者、亦皆汗下心死、蓋者老和尙、生平眞實行說俱到、四十餘年、不食非時不畜衣鉢、至於持己細行悉徇律制、以故所至住山不動聲氣、自然法席雍肅、諸方目曰鐵面、汝爲釋子、當抗志慕古、依言立行、毋墮庸俗、無示嘗曰、我爲主法者、若不方便敎汝攝心爲道、汝他日無知造罪、老僧未免同汝受苦、今不可使汝無聞、聞而不行、非我之咎、不見良禪師靖州人、楊岐會下尊宿、有小師犯戒律、臨終入惡道、其母夢、其子銜恨於師、曰、皆父師不能導我爲善、致受是苦、其母以是夢告於良、良未之信、龍圖徐禧德占、是時爲布衣、嘗參扣於良、德占俄夢入一官府、兵吏斧鉞森列左右、熟視之乃良禪師、坐於庭下、鬼卒以杵撞其背、號叫震裂、復見其小師、枷鏁杻械、蹲踞其側、德占問守閻吏曰、二僧何罪、吏曰、老者乃少之師、以其師平時不能訓導、縱令破戒、故師之罪特重爾、此猶生報、後七日與子同墜、無間斯爲大苦、德占夢覺、遂詢良之所以、乃云、數日來背痛如擊撞、藥不可療、七日果卒、德占嘗擘窠大書于分寧諸刹之壁、紹熙間、光孝超禪師、榜子天童行堂壁。

法智尊者、學行高妙、凡所著作、莫不立宗旨闢邪說、開發人心、到眞實地、指要書成、雪竇顯禪師、持出山羞齋爲慶、仍有茶榜、具美其事、則知、在昔禪敎一體、氣味相尙、至有如此、與今暗禪奪敎者、非同日語也。草庵錄

黃龍心禪師南雄人、爲儒生有聲、年十九目盲、父母許以出家、忽復見物、遊方謁南禪師、雖深信此事、而不大發明、辭往雲峯會、峯謝世、就止石霜、因閱傳燈、至僧問多福、如何是多福一叢竹、福曰、一莖兩莖斜、僧云、不會、福曰、三莖四莖曲、此時頓見二師、歸禮南公、方展坐具、南曰、汝入吾室矣、師亦踴躍自喜、卽應曰、大事本來如是、和尙何用敎人看話下語、南曰、若不令汝究尋到無用心處、自見自肯、吾則埋沒汝也、會南入滅、道俗請師繼踵、四方歸仰不減南公時、然師雅尙眞率、不樂從務、五求解去、乃得謝事、未幾謝師直守潭州、虛大潙、以致師、三辭不往、又屬江西轉運彭器資請所以不應長沙之意、師曰、馬祖百丈以前無住持事、道人相尋於空閑寂寞之濱而已、其後雖有住持、而王目尊禮爲天人師、今則不然、挂名官府、直遣伍伯追呼、此豈可復爲也、器資以斯言反命、師直復致書曰、願得一見、不敢以住持相屈、師與四方公卿意合千里應之、不合雖數舍不往、師以內外書徵詰開示、使人因所服習、克己自觀、悟則同歸、歸則無敎、諸方訾師不當以外書糅佛說、師曰、若不見性、則祖佛密語盡成外書、若見性、則魔說孤禪皆成密語、故四十年間、士大夫聞其風而開發者衆矣、庭堅宿承記莂、堪任大法、道眼未圓、來瞻宰堵、實深安仰之嘆、乃勒堅珉、敬頌遺美。塔銘

宏智覺禪師隰州人、未遊方時、預夢天童之境、嘗紀之曰、松徑森森窈窕門、到時微月正黃昏、建炎間、謝事長蘆、訪眞歇寶陀巖、及到天童、宛如昔夢、尋爲州府敦請住山、師固辭、後爲裕子肩至法座、由是黽勉而受、居山三十年、傳法之外百具鼎新、常安千餘衆、而齋厨豐衍、甲於諸剎、裕子得以安然辨道、師嘗爲衆行乞、吳越人篤信其化、金帛之施不求而至、師謂諸檀曰、化汝布施令破慳心、毋專施於我、後有小寺僧來、却願施之、或見廢寺窘乏及窮民老弱輩、卽出衣資施令歡喜、師未嘗儲積、用盡爲度爾、有隰州僧哲魁者、孤硬人也、潛跡坐下、不言鄉所、經十餘載、始知宏智鄉人、宏智聞欣然訪曰、父母之邦何太絕物乎、智欲招至方丈、魁謝曰、己事尙未辨、豈暇講鄉禮邪、卽曳杖而去、人莫能挽、徑往寶陀、眞歇故居、禪宴、月餘日臨終、召衆說法而逝。闍維舍利無數。雪竇誌其事。

歐陽文忠公、遊嵩山、放意而往、至一古寺、風物蕭然、有老僧閱經自若、公與語不甚顧、公問曰、古之高僧、臨死生之際、類皆談笑脫去、何道致之、僧曰、定慧力、公曰、今寂寞無有何哉、僧曰、古人念念在定、臨終那得散、今人念念在散、臨終安得定、文忠嘆服之。林間錄。

馮濟川居士施藏經、願文其略曰、予之施經、一事而具二施、何故以財贖經、是謂財施、以經傳法、是謂法施、按佛所說、財施、後世當得天上人間福德之報、法施、當得世智辯聰、蓋衆之報、當知此二報皆是輪廻之因、苦報之本、我今發願、願回此二報、臨命終時、莊嚴往生極樂世界、蓮華爲胎、見佛聞法悟無生忍、登不退階、入菩薩位、還來十方界內五濁世中、普見其身而作佛事、以今日財法二施之因、如觀音大士具大慈悲、游戲五道、隨類化形、說諸妙法、永離苦道、令得智慧、普與衆生、悉得成佛、乃予施經之願也。舍經碑。

北峯印法師戒睡曰、佛法欲滅而調養幻身、然此臭身終爲灰土、苟因樹立以致死、不亦大丈夫、又曰、說得過人不濟得事、須是行得過人、若自己分上、一點用不著、雖記得千經萬論、如阿難、亦何足貴、又曰、嘗與見識人論住持興顯寺門法、曰、不出勤奉香火、常住潔白、將衆人爲事、予深喜此說盡理、若無識人、論則汗下趨俗、失本色人體矣。自行錄。

資壽總禪師蘇氏、元祐間、丞相孫女、年十五、懵不知禪之所謂、唯疑人之處世、生則不知來處、死則不知去相、於是斂念忽有所省、自不以爲異、意其爲最靈者、靡不如是、亦未嘗以語人、及勉從庭闈之命、歸西徐許壽源、無幾何而深厭世相、齋潔自如、且欲高蹈方外、抗志慕古、遂謁薦嚴圓禪師、圓曰、閨門淑質何預大丈夫事、邪總曰、佛法分男女等相乎、圓詰之曰、如何是佛、卽心是佛、汝作麼生、總曰、久嚮老師猶作者箇語話、圓曰、德山入門便棒、嚮總曰、老師若行此令、不虛受人天供養、圓曰、未在、總以手拍香臺一下、圓曰、有香臺從汝拍、無則如何、總便出、圓呼曰、汝見甚麼道理便與麼、總回首曰、了了見無一物、圓曰、者箇是永嘉底、總曰、借他出氣、又何不可、圓曰、眞師子兒、時眞歇禪師庵於宜興、師徑造焉、眞歇端坐繩牀、總才入門、眞歇曰、是凡是聖、總曰、頂門眼何在、曰、覿面相呈、事若何、總提起坐具、歇曰、不問者箇、總曰、蹉過了也、歇便喝、總亦喝、總於江浙諸名宿參扣殆徧、從壽源守官嘉禾、唯未見妙喜、爲念適妙喜俱馮濟川、舟御氏城、總聞之往禮敬而已、妙喜謂濟川曰、適來道人却曾見神見鬼來、但未遇鑪鞴鍛鍊、恰如萬斛舟、在絕潢斷港中、未能轉動爾、馮軒渠曰、談何容易邪、妙喜曰、他若回頭定須別、翌日壽源命、喜說法、喜顧衆曰、今此間却有箇有見處人、山僧驗人如掌關吏、才見其來便知、有無稅物、及下坐、總遂求道號、喜以無著名之、明年聞徑山法席盛、卽往度夏、一夕宴坐忽有契悟、頌曰、驀然撞著鼻頭、伎倆冰消瓦解、達磨何必西來、二祖枉施三拜、更問如何若何、一隊草賊大敗、喜復之曰、汝旣悟活祖師意、一刀兩斷直下了、臨機一一任天眞、世出世間無剩少、我作此偈爲證明、四聖六凡盡驚擾、休驚擾碧眼胡兒猶未曉、總因入室、喜問曰、適來者僧祇對汝、且道老僧何故不肯他、曰、爭怪得妙總、喜舉竹篦云、汝喚者箇作甚麼、總曰、蒼天蒼天、喜便打、總曰、和尙他後錯打人去在、喜曰、打得著便休、管甚錯不錯、總曰、專爲流通、總一日禮辭旋里、喜曰、汝下山去、有人問此間法道如何祇對、總曰、未到徑山不妨疑著、喜曰、到後如何、總曰、依舊孟春猶寒、喜曰、恁麼祇對、豈不鈍置徑山、總掩耳而出、由是一衆歎艷、無著之名大著于世、晦藏旣久遂服方袍、師年德雖重、持律甚嚴、苦節自礪、有前輩典刑、太守張安國、以師道望命出世資壽、未幾求謝事、歸老家墅焉。投機傳。

道曇法師常州人、於禪定中得慈忍三昧、有猿鳥常供花果、乃爲受戒說法而去、至夜施鬼神食時、祝之曰、食吾食、受吾法、同爲法侶、年九十餘、而四方師事、受法者皆新學少年、師凡閱經、炷香九禮、趺坐良久、然後開帙、常訓諸徒曰、夫窺聖敎意在明宗、若不端己虛心、爭到如來境界、誠匪小緣、莫生容易。孫仲益碑。

郭道人世爲鐵工、常參景德忠禪師、忠曰、汝但去其所重、扣己而參、無有不辨、忠一日上堂、擧善惡如浮雲、起滅俱無處、郭於言下忽然心開、自是出語異常、及卒別親故、趺坐說偈曰、六十三年打鐵、日夜扇搧不歇、今朝放下鐵鎚、紅爐變成白雪。類說。

伊庵權禪師、臨安昌化祁氏子、幼莊重、嶷然如成人、十四得度、通內外學、依無庵全禪師、用工甚銳、至晚必垂淚曰、今日又只麼空過、未知來日工夫如何、師在衆不與人交、一詞毅然自處、人莫能親疎之、嘗夜坐達旦、行粥者至、忘展鉢、隣人以手觸之、師感悟爲偈曰、黑漆崑崙把釣竿、古帆高挂下驚湍、蘆花影裏弄明月、引得盲龜上釣舡、無庵喜以爲類、己乾道間出應萬年、宿學老師見其威儀、聽其舉揚、皆拱手心醉、內外萬指、井井然如入官府、師所至行道與衆同、其勞、尙書尤公袤曰、住持者安坐演法、何至躬頭陀行邪、師曰、不然、未法比丘憍上驕慢、未得謂得、便欲自恣、我以身師、尙恐不從、況敢自逸乎、近世言禪林標準者、必以師爲稱首也。行狀。

東山淵禪師、業履端潔、聞于叢林、自東山遷至五峯、見火箸與東山所用者無異、遂詰其奴曰、莫是東山方丈物乎、奴曰、然、彼此常住無利害、故將至之、淵誡之曰、汝輩無知、安識因果、有互用之罪、急令送還、恰雲錄。

別峯印禪師住雪竇日、有小師訴頭首之過、峯厲聲怒曰、汝是我小師、包含上下則可、反來說人過惡邪、置之左右、必敗吾事、遂杖逐之、聞者歎曰、何其明也。少雲雜記。

淳禪師劒州人、出世丹霞、宏智爲侍者、在寮中與僧徵詰公案、宏智不覺大笑、適丹霞過門、至夜參問云、汝早來大笑何謂、答曰、因詰僧話、渠答太龜生、所以發笑、淳曰、是卽是、汝笑者一聲、失了多少好事、不見道、暫時不在如同死人、宏智敬拜服膺、後雖在暗室、未嘗敢忽。雪竇記。

成都昭覺祖首座、久參圓悟、因入室問、卽心是佛、從此有省、圓悟命分坐、一日爲衆入室問禪者、曰、生死到來如何回避、僧無對、祖擲下拂子、奄然而逝、衆皆愕眙、亟以聞、悟悟至呼曰、祖首座、祖復開目、悟曰、抖擻精神透關去、祖復點頭竟爾長寢。東林顚屯庵記其事。

韓退之曰、且愈不助釋氏而排之者、其亦有說、至於歐陽永叔曰、佛法爲中國患千餘歲、世之卓然不惑而有力者、莫不欲去之、已嘗去矣、而復大集、攻之暫破而愈堅、撲之未滅而愈熾、遂至於無可奈何、二皆欲壯其儒道、雖排之破之、實激揚吾釋氏之道、何害之有。公論。

舒王問佛慧泉禪師曰、禪家所謂世尊拈華、出自何典、泉云、藏經所不載、王云、頃在翰苑、偶見大梵王問佛決疑經三卷、因閱之、經中所載甚詳、梵王至靈山會上、以金色波羅華獻佛、捨身爲牀坐、請佛爲群生說法、世尊登坐拈花示衆、人天百萬悉皆罔措、獨迦葉破顏微笑、世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心、分付摩訶迦葉、泉嘆其博究。梅溪集。

秦國夫人計氏法眞、因寡處、屏去紛華、蔬食弊衣、習有爲法、於禪宗未有趨嚮、因徑山大慧、遣謙禪者致問、其子魏公浚公、留謙以祖道誘其母、眞一日問謙曰、徑山和尙尋常如何爲人、謙曰、和尙只敎人看狗子無佛性、只是不得下語、不得思量卜度、只擧狗子還有佛性也無、州云、無、只恁麼敎人看、眞遂諦信、以狗子話晝夜參究、坐至中夜、俄有契、連作數偈呈於大慧、其後云、終日看經文、如逢舊識人、莫言頻有該、一擧一回新語錄。

神光者磁州人、曠達之士也、居伊洛博覽群書、善談玄理、每歎曰、孔老之敎禮術風規、經論之詮未盡妙理、近聞、達磨大士住止少林、至人不遙當、造玄境、光乃往、彼晨夕參承、大士唯端坐面墻、莫聞師誨、光自惟曰、昔人求道、敲骨取髓、捨身求偈、古尙若此、我又何人、其年十二月九日夜大雪、光立于庭中、遲明積雪過膝、師憫而問曰、汝立雪中當求何事、光悲淚曰、惟願慈悲、

開甘露門廣度群品師曰諸佛無上妙道積劫勤求難行能行難忍能忍汝豈以小德小智輕心慢心欲覬眞乘乎光聞師誨潛取利刀自斷左臂置于師前師知是法器乃曰諸佛最初求道爲法忘軀汝今斷臂吾前求亦可在因與易名曰慧可光曰諸佛法印可得聞乎師曰諸佛法印匪從人得光曰我心未安乞師安心師曰將心來與汝安光曰覓心了不可得師曰與汝安心竟光卽契悟傳燈。

永明壽禪師先丹陽人父王氏因廉兵寇歸吳越爲先鋒遂居錢塘師生有異才及周父母有諍人諫不從輒於高榻奮身于地二親驚懼抱泣而息諍長爲儒生年三十四往龍冊寺出家受具後苦行自礪唯一食朝供衆僧夜習禪法尋往台之天柱峯九旬習定有尺鷃巢于衣裓曁謁韶國師一見深器之密授玄旨仍謂師曰汝與元師有緣他日大興佛事初住明之資聖至建隆元年忠懿王請居靈隱新寺爲第一世明年請居永明道場衆盈二千皆頭陀上行願爲僧者師卽奏王與度牒剃染因僧問如何是永明旨師示偈曰欲識永明旨西湖一湖水日出光明生風來波浪起又僧問學人久在永明爲甚不會永明家風師曰不會處會取僧云不會處如何會師曰牛胎生象子碧海起紅塵開寶七年謝事歸華頂峯頌曰渴飲半掬水飢飡一口松胷中無一事高臥白雲峯偶讀華嚴至若諸菩薩不發大願是菩薩魔事遂撰大乘悲智願文代爲群迷日發一偈在國清修懺至中夜旋繞次見普賢像前供養蓮華忽然在手從是一生散華供養感觀音大士以甘露灌口獲大辯才著宗鏡一百卷寂音曰切嘗深觀之其出入馳騖於方等契經者六十本參錯通貫此方異域聖賢之論者三百家領略天台賢首而深談唯識牽拆三宗之異義而要歸於一源故其橫生疑難則釣深賾遠剖發幽翳則揮掃偏邪其文光明玲瓏縱橫放肆所以開曉自心成佛之宗而明告西來無傳之的意也禪師旣寂叢林多不知名熙寧中圓照禪師始出之普告大衆曰昔菩薩晦無師智自然智而專用衆智命諸宗講師自相攻難獨持心宗之權衡以準平其義使之折中精妙之至可以鏡心於是禪子爭傳誦之元祐間寶覺禪師年臘雖高猶手不釋卷曰吾恨見此書晚矣平生所未見之文功力所不及之義備聚其中因撮其要處爲三卷謂之冥樞會要世盛傳焉後世無是二大老叢林無所宗尚舊學者日以慵惰絕口不言晚至者日以窒塞游談無根而已何從知其書講味其義哉脫有知之者亦不以爲意不過五以謂祖師敎外別傳不立文字之法豈當復刺首文字中耶彼獨不思達磨已前馬鳴龍樹亦祖師也而造論則兼百本契經之義泛觀則借讀龍宮之書後達磨而興者觀音大寂百丈黃檗亦祖師也然皆三藏精微該練諸宗今其語具在可取而觀之何獨達磨之言乎聖世遙遠衆生根劣趣慮褊短道學苟簡其所從事欲安坐而成譬如農夫惰於耕耘垂涎仰食爲可笑也師嘗願曰普願十方學士一切後賢道富身貧情疎智密闡揚佛祖心宗開鑿人天眼目。實錄等。

人天寶鑑下 終

古之人、以修心爲要、心之正行毋越思言、斯鳴道使夫後進其可師模、有何禪教律儒釋道之異也、蓋至公則天下共之、四明禪者秀公、篤志于此、履歷叢林、玄機綜覽、隨所聞見、集成此書、闢人天眼目、因以寶鑑名焉、走大圓覺、求之刊行、非獨發明先輩幽德潛光、將與同志、力追此道、予嘉其說、遂跋其後云、嘗紹定庚寅自恣前一日、古岑比丘師贊、書于萬壽歸雲堂。

秀書記、集古成書、曰人天寶鑑、請着語、遂下一轉云、先德情知已厚顏、那堪落井更攀欄、本來一點明如日、胡漢何曾自照看、紹定庚寅中秋、住靈隱。

妙堪書

大正八年七月二十五日印刷
大正八年七月二十八日發行

【國譯禪宗叢書】 第一卷

編輯兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 國譯禪宗叢書刊行會

右代表者 宮下軍平

印刷者 東京市神田區錦町三丁目一番地 中島藤太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目一番地 神田印刷所

著作權所有

(非賣品)

發行所 東京市神田區錦町一丁目十六番地(二松堂書店內) 國譯禪宗叢書刊行會
電話神田二四七八番
振替東京四六〇一六番

11J-102

終